

大隊指揮官殿が鎮守府に着任しました

秋乃落葉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

HELLSINGの少佐が異世界転生して戦争する話です。

初投稿なので拙い文章ですが生暖かい目で見ただけると幸いです(・ω・)

文章量が少ない割に執筆スピードが遅いです。平にご容赦を…。

本編

目次

h g e r n . 2	92
h g e r n .	87
G l e i c h u n d g l e i c h g e s e l l t s i c	
G l e i c h u n d g l e i c h g e s e l l t s i c	
速さは、自由か孤独か。	9
速さは、自由か孤独か。	8
速さは、自由か孤独か。	7
速さは、自由か孤独か。	6
速さは、自由か孤独か。	5
速さは、自由か孤独か。	4
速さは、自由か孤独か。	3
速さは、自由か孤独か。	2
速さは、自由か孤独か。	1
しぐれてゆくか。	4
しぐれてゆくか。	3
しぐれてゆくか。	2
しぐれてゆくか。	1
うしろすがたの。	2
うしろすがたの。	1
晚餐	10
プロローグ 3	7
プロローグ 2	4
プロローグ	1

鎮守府大爆発！ぶつちぎりバトルフリートガールズ1	I F																		
	母3	母2	母	h	G	h	G	h	c	h	G	h	G	h	G	h	G		
	161	156	151	gern.	leich	gern.	leich	gern.	h	gern.	leich	gern.	leich	gern.	leich	gern.	leich		
				ll	und	ll	und	ll	8		und	ll	und	ll	und	ll	und		
					gleich		gleich				gleich		gleich		gleich		gleich		
					gesell		gesell				gesell		gesell		gesell		gesell		
					t		t				t		t		t		t		
					sic		sic				sic		sic		sic		sic		
165				144	c	137	c	131	126	121	c	113	c	108	c	102	c	97	c

## 本編 プロローグ

「ああ素晴らしい。戦争だ。また戦争ができるぞ。窮途末路の極まるこの世界で、大戦争が!!」

二十世紀末、ロンドンで一人の狂人の、長い夢が終わりを迎えた。「ああ、これは良い、良い戦争だった。戦争・・・良い・・・戦争だった」

彼は薄れ行く意識の中でこれ以上ないほどの幸福感を感じていた。憎き化物を屠り、ロンドンを焼いてやった。ああ、勝利。良い響きだ。願わくば、ヴァルハラでも勝ちたいものだ。

とうとう意識は途絶え、戦争狂モンティナ・マックス少佐は、ヴァルハラへと向かう。・・・かに思われた。

途絶えたはずの意識が、再び戻ってくる。死に損ねたか、とも思ったがどうやら違うらしい。目に飛び込んできた情景は、左右に無数の扉が並ぶ無機質な通路と、その真ん中に、事務机に向かう眼鏡をかけた男。

「ここは・・・どうやらヴァルハラではなさそうだが」

男がこちらを向き、なにやら書類を広げる。

「次」

「まさかこんな場所が地獄というわけではあるまい？通してくれたまえよ、私が逝くべき次の戦場へ」

男はもう一度こちらを一瞥した後、書類に何かを書き込んだ。その刹那、体が壁へと引き込まれてゆく。なるほど、ここが審判の場ということか。再び、意識が落ちてゆく。

「・・・次」

次に目を覚ました時、彼は波打ち際に横たわっていた。暑い。デブを日光に長時間さらしてはいけないのだ。私が言うのだから間違

はない。

「ここもヴァルハラではないようだが、地獄でもなさそうだ。・・・少なくとも英国ではなからう」

遠くには軍港らしき施設が見えるが、艦艇は停泊していない。

「あそこに向かうしかあるまいな」

軍港に向かって歩く間、少佐は思考する。あの戦いの後自らに何が起こったか。負っていたはずの負傷は無くなり、見知らぬ場所へ現れた。死後の世界としてはえらくお粗末なものだ。地獄も、煉獄も、永遠の戦争も無いのだから。

「！・・・あれは人か」

前方の砂浜に人影を見つける。どうやら子供のようなうだ。じりじりと照りつけてくる直射日光のせいで噴出す汗をぬぐいながら近づいてゆく。少女が二人、波打ち際で遊んでいる。

「すまないお嬢様方。ここはどこなのか教えてもらえるかね？」

黒髪の少女とピンクの髪の少女は、こちらを訝しむように見ている。まあ当然だろう。

「・・・吹雪ちゃん、変質者っぽい？」

「へ、変質者なんて突然失礼だよ！夕立ちゃん！」

どうやら黒髪の少女は吹雪、ピンクの少女は夕立というらしい。

「変質者とは、手厳しいね。そこにあるのはどこの国の軍港なのか知っているかい？君達は水兵服を着用しているが、関係者かなにかかね？」

彼女らはまた目を見合わせてから、吹雪という名の少女が説明してくれた。

「ここは日本の海軍泊地で、私達はこの泊地所属の艦娘です」

「日本だと？地球を半周したというのか・・・？それに艦娘とはなんだね？日本の兵科の一種か何かかね？」

「吹雪ちゃん、やっぱりこの人ヤバイ人っぽい？」

「だ、だから夕立ちゃん失礼だよお！」

ふむ、一方的に問い詰めすぎただろうか。しかし、ここは日本だというが、第二次世界大戦後の日本が離島にこのような海軍基地を設営

していただけるか？それに艦娘とは？

「だってこの島に普通の人がいるなんておかしいっばいよ？長門さんに言ったほうがいいっばい？」

「た、確かにそうかも・・・」

明らかに変質者を見る目が変わっている。

「聞くに、その長門という御仁が君達の上官なのであろう？是非お目通りを願いたいね」

それにアーカード亡き今、最早英国に固執することもあるまい。戦争、ああ甘美な響きだ。この世界がヴァルハラでないとしても、戦争がある限り、私は戦い続けなくてはならぬ。

「ひい、邪悪な笑みを浮かべてるっばいっ!!」

## プロローグ2

二人の少女、吹雪と夕立は話し合いの末、彼女らが長門と呼ぶ上官を呼ぶことにしたらしい。吹雪はここに残り、夕立が軍港へかけてゆく。

「今長門さんをお呼びしますから、ちよつと待ってくださいね、えつと・・・」

「何だね？」

「お名前、お聞きしてもいいですか？」

そうか、まだ私は名乗りもしていなかったな。

「私のことは少佐と呼んでくれたまえ。以前の所属の階級だ。名は名乗らなくなつて久しい」

「少佐さん、ですか・・・？」

吹雪は疑わしそうな目でこちらを見ている。親衛隊に入つて以来幾度と無く疑われたことだ。所属に疑いをかけられるのは最早慣れたものである。

「さて、お嬢さん<sup>フロイライン</sup>。よろしければ私に艦娘とやらが何なのか、ご教授願えるかね？君は海軍属の兵士か何かなのか？」

彼女から発せられた『艦娘』という言葉。やはり一番気になる点はこちらである。

「兵士というか、その、私は特型駆逐艦一番艦の吹雪です」

「駆逐艦だと？それは、駆逐艦の乗員ということではなさそうだが、一体どういうことだね？」

「えーっと、だから私が駆逐艦の吹雪なんですが・・・」

吹雪の説明は、このような感じで五分ほど続いた。根本の理解の違いから噛み合わぬ点が多く話が難航していたが、やつとのこととで輪郭が掴めてきたようだ。彼女の話をもとめると、彼女達は人類の敵である『深海棲艦』に唯一対抗することのできる戦力であり、彼女達の中にも駆逐艦や巡洋艦、戦艦などの艦種の違いがある。そして深海棲艦の正体は一切不明であるということが、なんとなくわかった。

「深海棲艦、か。く、くく、クハハハッ！あッはッはッはッ!!」



突然の高笑いに吹雪は狼狽しているようだ。だが、笑わずにいられようか？

「素晴らしい！全く持って素敵だ！やはりここは私の逝くべき戦場であった！敵は化物！深海棲艦！そうだ、そうでなくては!!」

愉悦が抑えきれない。新たな戦争が、未知なる戦場が世界に広がっている！

「おーい、吹雪ちゃん！長門さん達呼んできたっぽーい！」

どうやら夕立が上官をつれて戻ってきたようだ。その後ろには黒い長髪の女と茶髪でショートカットの女の二人が見える。

「長門さん、陸奥さん！こちらの方です！」

「ああ、吹雪、ご苦労だった。・・・私が当泊地の現秘書艦である長門だ。御無礼を承知の上でお願いする。まず貴方の身体検査をさせていただきたい」

黒髪の女、長門が私に言った。ということは茶髪の女が陸奥ということだろう。

「この島は全域が海軍の敷地だ。その格好は軍装のようだが、貴方の素性がわからない以上最低限の確認は確保させて欲しい。理解いただけるだろうか？」

「よかろう。当然の権利だ」

長門はうなずいて、身体検査を始めようとする。

「武器の類は？拳銃など所持していれば先に出してくれ」

「そんなものは持っていない。当たった例がないからな」

長門は少し釈然としない様子で検査を始めた。上半身を調べ、下半身に入ったところで、右ポケットから折りたたんだ紙を見つけたようだ。しかし、私自身この紙に覚えは無いが。

「中身を確認していいか？」

「どうぞ自由に確認したまえ」

長門は紙を開き、何か書かれている内容を確認すると、あからさまに驚いた表情をしている。

「おい、陸奥・・・これを」

長門はその紙を陸奥に手渡した。そしてまた陸奥も同様に驚いて

いる。

「偽造された書類ではなさそうね……」

なにやら小声でやり取りしている。それが二、三続いた後、急に彼女らは姿勢を正し、私に敬礼して見せた。

「大変失礼いたしました。ご着任、お待ちしていました、提督」

陸奥が私に言った。提督だど？あの紙になにやら書かれていたようだが、いったい……。いや、ひとつだけ思い当たることがある。

「……あの男か」

そうだ、思い当たることなどひとつしかない。ここに来る前に扉だらけの通路で出会った男。あの男しかいまい。あの男め、確かに、私の逝くべき戦場へ送り出してくれたようだ。

敬礼している彼女らに対して、私もして返し、

「出迎えご苦労。では案内してくれたまえ。新たなる戦争の、その指揮をとるべき場所へ」

こちらへ、と行って長門が先導してくれるようだ。そうして彼らは軍港、『鎮守府』へと向かって歩き出した。

「……あの人が、この提督さんなんだね」

「……なんか、本当にやばい人っぽい？」

### プロローグ3

「・・・以上が、私の知り得る艦娘についての情報です、提督」

鎮守府の中の庁舎の一角、その中枢たる提督の執務室に舞台は移る。そこには一人の小太りの男と一人の艦娘が向き合っていた

「なるほど。艦娘は何らかの理由で艦の記憶を持ち、深海棲艦に対抗しうる武装たる艦装を運用することができるとは。なぜ艦の記憶を持つか、なぜ艦娘にしか艦装が運用できないのかは不明、君達自身にも理解しえぬことであるということか」

長門の話を聞き終えた少佐が言った。その表情は心なしか愉悦を湛えているようでもある。

「ああ、それと敬語は不要だ。楽に話してくれたまえ」

「そうか、では普通に話させてもらおうぞ」

少佐が提督と判明して以来、少し緊張したようだった長門であるが、これで多少は弛緩した様子である。最も、提督として着任してきた男が最初に問うた言葉が「艦娘とは何か」だったのだから、不信とまではいかずとも疑問を抱くのは当然ともいえるだろう。

「提督の前歴については私からは詮索はしない。軍には様々な人間がいるからな。ただ提督はほとんど艦娘と関わったことが無いようだから、私としては任務に入る前に艦娘達と十分に交流することをお願いしたいのだが・・・」

「長門秘書官」

少佐が長門の言葉をさえぎるように名を呼んだ。

「君は私をどの様な軍人だと想像しているのかね？艦娘を兵器として無慈悲に振るい、非道に徹する士官か？少女を軍人として扱うことに抵抗を覚えるような、青臭い将校か？はたまたうら若き艦娘を性処理の道具としか捉えていないような卑劣漢に見えているのかも知れん。だがそれは無意味なことだ。どれも本質を捉えるに至っていない。ならばあえて私から君に、問おう」

長門はあつけにとられているようで、言葉がでない。しかし、少佐はそれに構うことは無く、

「君達艦娘は人間か？兵器か？それとも深海棲艦と同じように化物か？」

長門に問いをぶつけた。

「・・・艦娘は人間だ。艦装を外せばごく普通の、どこにでもいる少女達だ。深海棲艦と戦うことを運命付けられていたとしても、私達は人間だ。ただ使われるだけの存在じゃない。断じて化物などではない！」

長門は声を荒げて言った。そしてはつとする。少佐がその顔に満面の笑みを張り付かせていたからだ。

「ならばそれが答えだ。私は君達艦娘を人間として、か弱く、そして高い人間として捉えている。かつて私の好敵手であった男はこう言った。『化物を倒すのはいつだって人間だ』と。彼は紛れも無く化物だった。人間の様な姿形をしていても、それは化物だ。そして彼を打ち倒した私は人間だ。たとえば体を機械に換装し、肉体を放棄していても、たとえ幾千の化物を従えていようとも。化物と対峙する君達艦娘もまた、人間でなくてはならない」

少佐は嬉々として語り続ける。

「艦娘を兵装し、艦娘を構築し、艦娘を教導し、艦娘を編成し、艦娘を兵站し、艦娘を運用し、艦娘を指揮する。化物に対峙するのに化物など、最早不要だ。我々は、人間として、深海棲艦を打倒する！果てしなき闘争の末に！」

少佐の狂氣的ともいえる語りに長門は反応に困っている。この提督の思想は、正直理解の範疇を超えているのだ。

「艦娘との交流の件は検討しよう。私としても興味のあることだ」

「・・・感謝しよう。しばらくは鎮守府内の施設の把握や艦娘との交流を頼む。任務が開始されるときには大淀を担当につけることになっている。では、私はこれで」

「ご苦労。下がりましたまえ」

少佐に一礼し、執務室から退室する。なんだかどっと疲労が押し寄せてくるようだ。

「お疲れ様、長門。提督はどんな人だったの？」

「ああ、陸奥か。・・・そうだな、一言で言うなら、狂人だろうか」

陸奥はこちらの言葉が理解できなかったようで、目をしばたかせている。

「なんというか、こちらの想像とかけ離れすぎているというか・・・理解の及ばない思考をしているというか・・・」

「ちよつと、大丈夫なの？無茶な指揮をして轟沈艦でも出たら洒落にならないわよ？」

これまた厄介な提督を迎え入れてしまった。果たして、どう補佐していけばいいのか・・・頭痛がしてくる。

「とにかく、提督には任務の指揮を執られる前に艦娘との交流をしてもらおうと言っておいた。後は各々に任せるしかないな」

「長門が匙を投げるなんて、よっぽど難しい人なのね。私からも他の子たちにお願いでおくわね」

「よろしく頼む。私はこれから大淀と話してみる。どの道、艦隊指揮が駄目ならば、大本営に提督の交代を要請しなくてはならないからな」

各鎮守府の提督は大本営の人事の元派遣されているわけだが、本当に提督が職務を全うするに問題ありと判断される場合、艦娘から申し立てを受けることになっている。もちろんそれぞれの関係が悪いからといってすぐに変更されるわけではないが、艦隊指揮が取れなくては当然話は別である。

「じゃあ長門、また後で間宮で合流しましょう」

「うむ、面倒をかけてすまないな」

いいのよ、といって陸奥は艦娘達の宿舎のほうへ向かった。私も大淀を探さなくてはならない。急に押し寄せてきた疲れや不安感などをなんとか思考の外に追いやって、長門もまた、歩き始めた。

## 晚餐

「ふう、予定より時間がかかってしまったな」

大淀との打ち合わせを終えた長門は急ぎ足で鎮守府内の食堂である間宮に向かう。時刻は既に十五時を回りつつある。もうそろそろ陸奥との約束の時間だ。

「長門さん！」

進行方向のほうから誰かに呼び止められた。駆逐艦のようだから足を止めざるを得ない。

「おお、雷に電か。どうした？」

彼女は特三型駆逐艦の三番艦の雷と四番艦の電。仲睦まじい姉妹である。

「司令官が着任したんでしょ？どんな人なの？」

「電も気になります！」

二人が揃ってキラキラとした目を向けてくる。やめてくれ、答えづらくなってしまう。

「あー、そうだな・・・提督には直接各艦娘と交流していただくようお願いしてある。近いうちに機会があるはずだ」

「へー、楽しみね！」

「やさしい人だといいいのです！」

罪悪感を感じる。・・・しかし何れは皆関わらなくてはいけないのだ。

「ところで私はこれから間宮に向かうが、お前達も来るか？」

「あら、いいわね！電もいくでしょ？」

「もちろんいくのです！」

雷電姉妹を伴って再び間宮へと向かう。既に遅刻気味であるので、急がなくては。

結局間宮についたときには十分弱ほどの遅刻になってしまった。駆逐艦たちにはじやれ付かれては対応しないわけにはいかないの仕方が無いことだ。

「すまないー！ずいぶん遅れてしまった」

「ああ長門秘書艦、遅かったじゃあないか」

そこには艦娘達に混じって飯を頬張る少佐がいた。あまりの予想外の事態に思わず固まってしまう。

「いやあ和食というものはなかなか美味だな。甘味の類も素晴らしい！」

長門の困惑を知ってか知らずか、少佐は定食にいくつかのデザートを平らげ、さらにこれから鎮守府特製のカレーに手をつけるところだ。

「あなたが司令官ね？私は雷よ！たくさん食べるじゃない、嫌いなものは無いの？」

「ふむ、雷、知らんのかね？デブが日々を幸福に過ごすには食事の好き嫌いをなくすことが近道なのだよ」

少佐は会話の間にも食事の手を止めない。事前にあれだけの量を平らげていたとは思えぬ早さである。

「私は電なのです。司令官さん、よろしくお願いいたします」

「うむ、よろしく頼むぞ、電。君達はよく似ているが、姉妹かね？」

「はい、私と雷ちゃん姉妹なのです！」

「私がお姉さんなのよ！司令官も、私に頼っていいんだから！」

少佐は早々とカレーを完食し、スプーンをおいて言った。

「ではこのカレーのお代わりをいただこうか」

「はわわっまだ食べるのですか？」

「当然だ。まだまだいくぞ」

ここからまだ食べるのか。このままいつたら正規空母並みに食うんじゃないか？

「提督、食事中申し訳ないが、ここに陸奥は来ていないか？」

「陸奥？ああ、先ほど食堂の場所を聞いたときにあっただぞ。なにやら話があるからそのままここで待てといわれたが。ところでこのカレー甘すぎやしないかね？誰の味覚に合わせてるのか知らんが」

そういつつ少佐は雷が運んできたカレーのお代わりをまた食べ始めている。

「ごめんなさい、提督、長門、お待たせしちゃった？」

と、少し息を切らして陸奥がやってきた。

「いや、大丈夫だ。しかし提督をお呼びしたのは何故だ？」

「ええ、それについては今から説明するわ。提督、いい？」

少佐はもう半分ほどまで減ったカレーを食べる手をようやく止めた。

「ああ、説明してくれ。このカレーが冷めないうちに頼むよ」

「これは提案なんだけど、艦娘全員を招いて着任式典代わりの食事を開くのはどう？料理の準備があるから今すぐにとはいかないけど、普通の堅苦しい挨拶にするより艦娘達との交流ができると思うの」

「なかなかよさそうじゃあないか。長門秘書艦、食糧備蓄や料理の準備は問題なく執り行えるかね？」

「それは問題ない。艦娘の中から調理の心得があるものを選出して準備に当たらせよう」

少佐はまたすぐに食事の手を動かし始めた。

「ならばよろしい。準備を進めてくれたまえ」

「料理なら私達もお手伝いするわ！いいでしょ司令官！」

「電もお手伝いするのです！」

「うむ、楽しみにしているぞ」

こうして私達は食事会の準備に移ることとなった。しかしあの提督、意外と人当たりがいいところもあるのかもしれない。このまま食事会でもうまくやってくれるといいのだが……。

「あー、チェック、チェック……マイク音量大丈夫？チェック、ワン、ツー……皆様、本日はお集まりいただきましてありがとうございます。これより、提督の着任式典兼艦娘との親交を深めていただくためのお食事を開催いたします！」

拍手の音がホールに鳴り響いた。ここは式典やイベントを行う際に使用される多目的ホールになっている。

「本日の司会進行は私霧島が勤めさせていただきます！それでは皆様、提督の入場です！盛大な拍手でお迎えください！」

再び拍手が起こる。



「・・・あのー、金剛お姉さま？着任式ってこんな軽い感じで行っていないでしょうか？」

「大丈夫ネー、問題があれば長門が止めているはずデース。きっと提督も Party を楽しんで欲しいと思ってるんじゃないですかー？」  
「はっ!? さっすがお姉さま! この不肖比叡にはそこまで思い当たりませんでした!!」

「比叡お姉さま、提督が来ますから静かにしたほうが・・・」

ホールに少佐が現れた。少佐はそのまま演壇へと登り、艦娘達を見渡す。

「一同、起立! 敬礼!」

長門が声をかけると、艦娘達は一糸乱れぬ動きで敬礼をして見せた。

「ありがとう諸君。着席してくれたまえ。私がこの鎮守府に着任した提督だ。食事を前に長々とした口上は無しにしよう。さあ、杯を持ちたまえ。そしてこの宴を存分に楽しむと良い! 乾杯!」  
Pr o s i t

乾杯の音頭をとった後、少佐は早々と演壇から降りてきた。

「意外だな。私はてっきり演説の一つでもするものだと思っていたのだが」

「人間が人間たらしめている物はただ一つ、己の意志だ。君達艦娘は曲がりなりにも、己の意志で深海棲艦の打倒を目指してここにいるのだらう? ならば演説など必要なかろう。意思が故に迷い、悩み、意志が故に化物を打倒する。それが人間だ。他者の意思決定に従うだけならば化物にもできることだ」

長門は既に理解を諦めたのか、度し難いといわんばかりに少佐の言葉に肩をすくめ、少佐を席へ案内した。

「・・・さあ、提督のご挨拶も終わったところで、本日会場にはカラオケマシンを用意しております! 皆様奮ってご使用ください!」

「はいはい! 一番手、那珂ちゃんいっきまーす!・・・皆さん聞いてください! 『恋の2-4-1-1!』!」

曲が始まると、皆一斉に席を立ち始めた。食事はビュツフエ形式になっっている。

皆が食べ物を取り終え、席に戻る頃には少佐の下に訪れる艦もかなり多く見えた。ただかなりの勢いで食事をしている少佐を見て、挨拶だけで戻っていくのがほとんどだったが。歌のほうも那珂が歌い終え、次に嫌嫌ながら正規空母が引つ張り出されてきている。

「……えー、一航戦加賀です。……『加賀岬』」

なにやら皆大盛り上がりしている。見ればよくわからない動きで踊っている艦娘もいる。この鎮守府で人気の曲なのだろうか。

「提督、お疲れ様です」

「ん？霧島か。ご苦労」

食事までの司会を終えた霧島がやってきた。なにやら機械を持っている。

「提督も何か歌われませんか？」

「すまないが私は日本の歌はよく知らんのだよ」

「あ、大丈夫です！洋楽なども色々入ってますから！」

「ふむ……わかった、ではこれにしよう」

席を立ち、ステージのほうへ向かう。提督が歌うということで、周りもまた少し盛り上がり始めた。

「マイクはこれかね？では歌わせていただきます」

der 我 我 我 祖 祖 祖 敵 黒  
Fla 等 等 等 国 国 国 は 白  
gge の は あ イ の の 旗 赤  
Sch 命 黒 な ツ か 旗 が 我  
war 命 黒 な ツ か 旗 が 艦  
z 命 黒 な ツ か 旗 が 艦  
— 捧 赤 忠 誠 離 吹 馬  
Wei げ 誠 離 吹 馬  
ss げ 誠 離 吹 馬  
— 旗 誓 風 寄 旗  
Rot! 旗 誓 風 寄 旗

うしろすがたの。 1

少佐の着任から数日、少佐と艦娘達は主に食堂を中心として交流の輪を広げていた。最初は危惧していた艦娘と提督の関わりも案外問題の起こらないものだった。長門の主観から見ると、あの提督は基本的に各艦娘に好かれやすい。偶に狂気が見え隠れすることはあるが、普段は比較的物腰が柔らかい態度を取っている。

「意外とあの提督、艦娘達とうまくやっているな。これならば近いうちに作戦指揮に移っていただくこともできるだろう」

鎮守府庁舎の廊下を、長門と大淀が提督の執務室へ向かって歩いている。

「提督には人を引きつける才があるんですね。・・・以前の所属にも関係があることなんでしょうか」

提督の前歴については、鎮守府の頭脳とも言える大淀も把握していない。以前の所属組織での階級は少佐であるということ、それが日本の組織ではなく、おそらく欧州の国家の所属であったということ、そして化物を従えていた、化物と戦っていたというような言動をしていること。

「提督が口にした化物と言うのは、何かの隠語だろうか？例えば深海棲艦のような正体不明の敵がいたとして、それに対して同じく化物のような何かを従えて戦っていたというような」

長門も詮索しないとはいったものの、やはり気になるのが本当のところだ。そもそもその生い立ちから経歴に至るまで一切不明ということであるから、気にせずにもいられないのだが。

「何らかの特務機関のような組織に所属していたということでしょうか。しかしそれにしては艦娘の存在を知らないのはおかしな話ですね。軍部に一切関わりのない一般人でもなければ艦娘を見たことはなくても存在くらいは知っていないとおかしいですし」

国や軍という組織が絡めばいくらでもきな臭い話は存在する。そこから真実のみを抽出することはほぼ不可能に等しい。

「意外と言葉の通りの答えだったりして。幽霊とか、妖怪とか、そういう

うのと戦っていたのかもしれないよ？欧州だったら、悪魔とかドラゴン、吸血鬼あたりでしょうか」

「はは、そうかもしれないな。深海棲艦なんて存在がいるくらいだ。妖かしの類も実在するかもしれない」

しばらくはそんな話で盛り上がりつつあったが、提督の執務室に近づいてくると流石にどちらからともなく話をそらし始めた。あの提督が気にするとは思われないが、なんとなくバツが悪いような気がして、自然とそうなってしまった。

執務室のドアの前で大淀と目配せし、長門がノックする。

「提督、長門、大淀兩名。入室するぞ」

入ってくれ、という声が聞こえ、入室する。

「提督、今後のことについて大淀から説明がある」

「うむ、説明してくれ」

大淀は手元に持っていた書類を広げ、説明を始めた。

「提督も艦娘との交流は順調のようですので、そろそろ出撃任務の準備に移りたいと思います。といっても艦隊の直接指揮は各艦隊の旗艦が取りますから、提督にさせていただくことといえば、艦隊編成や出撃、進撃、撤退の決定といった事になります。あとは陣形などの戦術行動に対しても命令していただくことができますが、この辺は旗艦の艦娘が状況を判断して指示できますからよつぽど重要な決断以外ならおまかせにしても大丈夫だと思います」

「要するに提督の最たる仕事は責任を取ることでよろう？」

「まあ、そうですね。それらのマニュアルは後ほどお持ち致します。わからないことは私か、長門秘書官に聞いていただければ、その都度お答えいたしますね。・・・それで、実は提督に一つお願いというか、お頼みしたいことがあるんですが」

大淀が少し言い淀んでいるのを見て、長門が代わりに言葉を継いだ。

「実は、他の艦娘と関係があまりうまく行っていない駆逐艦が居てな。喧嘩するとか、そういうことじゃないんだが・・・」

「なんとというか、達観しちやつてる子なんです。人と過度に触れ合う

のを避けてるといふか」

「良からう、私が直接話してみようじゃないか。その駆逐艦を呼んでくれたまえ」

少佐の言葉に大淀はホツとした様子だ。

「すまない、本来なら秘書官たる私が解決しなくてはならないことなのだが・・・」

「なあに、部下のことを把握し、手助けするのは上官の勤めだ。構わんや」

執務室に、軽いノックの音が響く。

「失礼します」

程なく小柄な艦娘が執務室に入ってくる。セミロングの髪を三つ編みにして束ね、透き通る青い目を持った彼女は、跳ねた髪がなんとなく犬をイメージさせる。彼女は執務机の前まで来て、姿勢を正し、敬礼した。

「白露型駆逐艦、時雨です。お呼びでしょうか」

「ああ時雨、待っていたぞ」

少佐は食べていたサンドイッチを皿に置き、時雨を出迎えた。なるほど、確かにどこか悟ったような、憂いを感じさせる艦娘だ。

「単刀直入に聞こう。周りの艦娘とうまくやれてないそうじゃないか。良ければ理由を教えてくださいませんか？」

「・・・理由なんてそんな、大した話じゃないさ。ただ僕は人と群れるのが苦手みたいでね」

時雨は少し目を伏せて、言った。

「できれば部屋も個室に変えてもらえないかな？」

少佐は執務机に置いてある資料に目を落とした。

「えーと確か・・・ああそうだ、夕立と一緒にの部屋だったな。姉妹艦と聞いているが、何か不満かね？」

彼女は静かに首を振る。

「夕立に落ち度はないよ。悪いのは僕さ。姉妹だとしても、うまく付き合えないんだ」

少佐はしばらく考えてから口を開いた。

「結論から言つて、部屋を変えることは却下する。君たち艦娘は深海棲艦との戦争をしているのだ。他人との協調を拒めば死ぬ」

そう伝えた時の時雨は、その澄んだ青い瞳が僅かに曇っているようだった。

「そう、だよ。ごめん、無茶なこと言つて」

そう言つて時雨は再び少佐を見据えて、

「戦闘に支障がないようにはするよ。・・・でも、ごめん。僕は提督達のこと、好きになれそうにないよ」

言い終えた時雨は、逃げるように執務室から退室していく。扉が力なく閉じられ、執務室には少佐だけが残った。しかし少佐の顔には、いつも通りの憎たらしい笑みが未だ張り付いている。

「・・・やはり彼女たちは人間のようだな。やれやれ、お嬢さんフロイライン方はなかなか繊細のようだ」

少佐はそのそと立ち上がり、何処ぞへ向かおうとする。と、その前に食べかけのサンドイッチを一瞥し、口に放り込んでから、執務室を後にした。

うしろすがたの。 2

駆逐艦時雨。太平洋戦争において「呉の雪風、佐世保の時雨」と評されるほどの幸運艦であり、多くの武功を上げた艦。しかしレイテ沖海戦では所属する西村艦隊の僚艦全てを失い、その後戦争の終結を見ずして散っていった。

「・・・それがあの子の、時雨がただの艦だった頃の経歴さ」

シヤリシヤリと、手にしたかき氷を食しながら彼女は時雨のことを語る。彼女は、西村艦隊の一員であった航空巡洋艦、最上。時雨のことを詳しく知る艦娘に話を聞かため、執務室を出た少佐が行き着いたのが彼女であった

「時雨は多くの僚艦が沈んでいくのを目にして、そして生き残ってしまっただけだからね。きつと、辛いんじゃないかな」

「辛い？自分だけが生き残ったことに自責の念を感じているということかね？」

少佐もまた、かき氷を食べながら最上の話を聞いている。腰掛けたベンチは、砂浜を目の前にしており、波打つ音が一定の間隔で心地よく届く。

「艦だった頃のこと、今の状況も」

最上は水平線を見つめている。その横顔には普段の賑やかな雰囲気はなく、憂いを帯びた表情をしている。

「提督は、時雨に『協調しないと死ぬ』って言ったんだよね？」

「ああ、確かにそう言ったぞ。それが事実である以上は受け入れなくてはならないことであるからな」

「きつと、時雨はそのことをよくわかってるんだと思うよ。でもそれができないから困ってるんだ」

じりじりと突き刺さる夏の日差しは氷をゆっくりと溶かしていく。空は、人の手から離れた海の色を映して、憎らしいほど澄んだ青を照らし出している。

「時雨は多分、怖いんだよ。自分が傷つくのも、誰か傷つくことも。本当は誰よりも他人のことを思っていて、誰よりも優しい子なんだ。で

も、だからこそ、大切な人を失う辛さに耐えられない。辛いから、他者を遠ざけて関わりを絶とうとする。でも心のそこで誰かを想ってしまうから、孤独がもつと辛くなる」

スプーンに掬ったまま口に運ばれなかったかき氷が、溶けてぼたぼたと地面に垂れている。

「ある種の二律背反に陥っているということか。他者を思うあまり失うことを恐れて遠ざけ、遠ざけるあまり孤独に耐えられず誰かを求める。しかし失うことが怖いから求めることをやめてしまう、と」

そういうこと、と言つて最上は新しくかき氷を掬つて口に運んだ。「不器用な子なんだよ。かつて艦だった頃の記憶のことはあんまり気にしない子もいるけど、そうはできない。ボクなんて、こんなにあっけらかんとしているのにな」

えへへ、と笑う彼女は、やはりどこか悲しげな表情を隠している。「戦争とは何かを失うことで成り立つ行為だ。隣人もまた例外ではない」

「提督は強いね。普通そこまで割り切れないと思うんだけどなあ」  
「かつて私は宿敵を打ち倒すために、私の何もかもを投げ打った。それほどまでに強大で度し難い、全くもって度し難い化物だった。深海棲艦もそうだろう。大洋という至宝を人類の手に取り戻すために、いずれは一切合切をかなぐり捨てて立ち向かわねばならぬ時が来る」

「そんなこと簡単にできないって。大体そんな崇高なこと言われてもはいそうですかって納得できるほどうまくできてないよ、ボク達」

戦うことを運命付けられながらその運命に翻弄される艦娘。疾風怒濤の闘争を望まぬ彼女たちは、果たしてなんのために戦うのか。その袋小路に行き詰まってしまったのが時雨だとも言えるだろう。

「ふむ、難しいものだなあ、艦娘というのは」

「難しいものなんだよ、女の子つてのはね」

最上が冗談めかして言った。

「男の子はいいよね。浪漫があればどこまでだって行っちゃうんだもん」

「ロマンか。うむ、ロマンはいいものだ。第三帝国の栄光も、永遠の闘



争も、全てはそこにある」

そう返して少佐は溶け始めているかき氷をまた掻き込んだ。それに習って最上もまたかき氷を口へ運ぶ。

「時雨をや、もどかしがりて、松の雪」

「何？」

ポツリと呟いた最上の言葉に、反射的に言葉を返した。

「芭蕉の句。本当はこんな夏に読むような俳句じゃないけどね」

「その芭蕉とは、何者だね？」

松尾芭蕉を知らないの？、と彼女は詰め寄ってくる。聞けば日本の文化である俳句の大成者であるという。最上の名の元になった川に関する俳句もあるそうだ。

「で、その芭蕉の句が何だと？」

「これは時雨が降っても紅葉しない松の樹を、雪がもどかしがって、雪で松を真っ白に染めたって情景の句なんだけどき。要するに時雨はいろんな思いはあっても割り切れない、紅葉できない松なんだよ。自分で紅葉できないなら、誰かが雪化粧で飾ってあげればいいんだ」

何やら最上は力説しているが。

「んー？・・・うむ、よくわからんな。簡単に噛み砕いて説明してくれないか？」

最上は不満そうに声を上げる。

「うまいこと言えたと思ったんだけどなあ。要約したらせつかくの情緒が台無しじゃないか。まあいいけどさ。要するに時雨には誰かが助け舟を出して上げたほうがいいってこと。自分で答えが出せなくて他人にも頼れないなら誰かが助けてあげるしかないじゃない」

「俳句を引き合いに出して語った割には、えらく普通の結論に至ったじゃあないか」

「もお、いいじゃないかよお、そうボクをいじめないでよ」

そういつて最上は残りのかき氷を流し込んだ。そのせいで頭痛が来たようで、空を仰いでほんの少し顔をしかめている。

「じゃ、かき氷ご馳走様、提督。あの子の大切な人になってやってよ。時雨が閉じてしまった心の扉を開けてあげて」

最上は食べ終わったかき氷の容器をベンチに置いて、少佐を見た。そこにはいつも通りの憎たらしげな笑みが張り付いている。その笑みが、今はほんの少しだけ心強い。

「無論だ。戦争音楽を忘れた戦乙女にもう一度ダンスを申し込もうじゃあないか。きつと素晴らしい舞踏会だぞ」

しぐれてゆくか。 1

朝から曇天模様の鎮守府の執務室には、モニターや通信機を始めた機器や海図など、様々なものがごった返していた。

「おい、まだつながらないのか？もうそろそろ会敵する頃のはずだろう？ああ、楽しみだな！素晴らしい舞台だ。バルバロッサを思い出しらするなあー！」

「あの、提督、ちよつと落ち着いていただけないでしょうか」

そこにいるのは提督である少佐と、大淀の二人である。少佐はクリスマスのプレゼントを待つ少年のように興奮し、燥いでいる。

「・・・おっ！映ったぞー！」

モニターに大海原と、海面を滑るように駆ける艦娘が数人。

「戦闘海域に艦隊が到達したようですね。もう少して深海棲艦と接敵するはずですよ」

「ああ早く見せてくれたまえよ、艦娘の戦争を、次なる私の戦争を!!」  
遡ること数時間、少佐は大淀より説明を受けていた。出撃任務に関する説明だ。

「というわけで、そろそろ我が鎮守府も出撃を行いたいと思います。提督はまだ着任したばかりなので、比較的危険度の低い海域に出撃し、基本的な艦娘の戦闘を知っていただこうと思うのですが」

「うむ、そうしてくれ。万事抜かりなく頼むぞー」

相変わらず少佐はその顔に愉悦をたたえている。そして今日は一層とそれが濃い。

「艦隊編成については事前にお伝えした通り提督の意見を組み入れながらこちらで決定させて頂きましたが・・・本当にあの子を入れてよかったですか？」

「良い。普通の手が通用しないのならば少々強引な手を使わねば仕方があるまい」

「そうですね、では出撃する子たちを呼びますね」

大淀が執務室から出てから数分、大淀と六人の艦娘が執務室にやつ

てきた。

「では提督、わかっているとは思いますが、各艦娘のご確認をお願いします」

うむ、と言って少佐は手元の資料を眺める。

「旗艦、戦艦金剛！」

「ハーイ！英国で産まれた帰国子女の金剛デース！提督の初めての出撃のFlag shipに選ばれて光栄デース！ヨロシクオネガイシマース！」

少佐は英国、という言葉に一瞬反応したようだったが、金剛は気が付かなかつたようだ。知らぬが仏ということもある。

「艦隊旗艦として前線指揮は君に一任する。重要な任務だ。期待しているぞ」

「任せてくだサーイ！Perfectな指揮で提督のHeartも掴んじやうヨー！」

親指を立ててウインクする金剛に少佐も親指を立てて返した。かつてこれほど邪悪な雰囲気のスラムズアップがあつただろうか。

「二番艦、戦艦霧島！」

「はい、私霧島です！艦隊の頭脳として金剛お姉さまを補佐致します！」

本人の言葉通り霧島は頭脳派の艦娘らしい。金剛型四姉妹の中でも一番知性的な顔立ちだといえる。噂では金剛型随一の武闘派でもあるらしいが。

「三番艦、えーツと・・・君は駆逐艦だったかね？」

「そうそう、うちは珍しい航空駆逐艦の・・・って、なんでや！どう見ても航空母艦やろ！軽空母の龍驤や！ちゃんと覚えてや！」

ノリツツコミする龍驤に少佐は呵々と笑っている。

「四番艦、駆逐艦吹雪！」

「はい、吹雪です！私頑張ります！」

「五番艦、駆逐艦夕立！」

「頑張るっばい！」

この二人は言わずもがな、少佐がこの鎮守府に流れ着いたとき、は

じめにであった二人である。あれからしばらくは警戒されたりしたもののだが、今は二人とも少佐になつている様子だ。

「六番艦、駆逐艦時雨！」

「・・・僕を加えるなんて、提督は不思議なことをするね」

「戦闘には支障を出さないのだろうか？ならば問題はない」

明らかに時雨は不服そうであるが、少佐は意に介さない。実際編成を担当した大淀も本当に時雨を加えて良いものか悩んだが、少佐の意向ということで加えたのだ。なにせこれから行われるのは演習ではなく、実戦なのだから。

「では以上六名、鎮守府近海に置いて出撃任務を開始いたします！」

「よろしい、敵を打ち倒し、暁の水平線に勝利を刻むのだ！」

時は進み、再び場面は海上へと戻る。旗艦金剛を戦闘に、六人の艦娘が戦闘海域を目指して進んでいる。

「しっかしあの司令官も呆れたもんや！うちのどこ見て駆逐艦なんてゆうてんねや！どこからどう見ても空母に決まってるやろ！なあ吹雪？」

「えっ!?あ、そうですね、龍驤さんは立派な空母です」

「なんか含みがあるなあ？ま、ええわ」

龍驤は速度を落として吹雪の横につき、顔を近づけてくる。吹雪は怒られるかと思ひ少し怯んだが、どうやら違うようだ。

「あの司令官が変わりもんなんはようわかってるけど、時雨をこの出撃のメンバーに入れたのはようわからん采配や。どう思う？」

「どうって・・・姉妹艦の夕立ちちゃんもいますし、時雨ちゃんがいるのもおかしくないんじゃないですか？」

しかし龍驤は腑に落ちない様子で、ちらりと最後尾の時雨を見やつてからまた小声で語りかけてくる。

「普通最初の出撃なんてもんは何事もなく終えたいもんやろ？そこに、言っちゃ悪いけど不安要素の時雨を入れるのは道理に合わんってもんやで」

実際時雨は任務は卒なくこなしているものの、積極的に他者と関わ

り合おうとしている様子ではない。命を預け合うもの同士、お互いを理解することは重要なことである。せめてもう少し消極的すぎる性格が改善されてからの出撃でも遅くはないと、龍驤は思う。

「とにかく今日のところは無事に帰るで！もしかしたら戦闘経験が時雨にプラスになるかも知れんからね」

そう言つて龍驤は元の位置に戻っていった。なんだかんだ言つて面倒見のいい人だ、と吹雪は思った。

「もうじき戦闘海域に到達しマース！龍驤！観測機の発艦、頼みますネー！」

「あいよ！任せといて！」

龍驤は巻物のようなものを広げると、そこから艦載機を発艦させた。この観測機は鎮守府のモニターに映像を送信できるようになっており、俯瞰的な視点を得ることができる仕組みだ。

「霧島、視覚情報を同期します！」

龍驤の観測機と同様、霧島のメガネにも仕掛けがしてある。こちらはメガネがカメラの役割をしており、艦隊の主観的な映像を送信できる。この2つの視点を送信している先が、鎮守府の少佐がかじりつくように見ているモニターというわけだ。

「マイクチェック、ワン、ツー！提督、戦場からの音声は私霧島がお送りいたしますね！」

『素晴らしい！これが艦娘の視点かね!?こんな戦争行動の形が現実存在するとは！ああ、私も出撃してみたいぞ!!』

鎮守府からの音声は、異常に興奮する少佐と、それをなだめる大淀の声が聞こえてくる。相変わらずの変わり者ぶりに霧島も思わず苦笑いがこぼれた。

「提督うー！聞こえますカー!?間もなく深海棲艦との接敵が予想されマース！」

『ああ、そのようだな！さあ、私に各員の奮戦を見せてくれたまえ!!』  
「任せてくだサーイ！提督に勝利を Presentsするヨー！」

「金剛！観測機が敵艦隊を発見したで！十一時の方向、およそ五分で有効射程圏内に突入や！」

龍驤の声が届く。金剛は龍驤に領いて、艦隊に指示を飛ばす。  
「皆サーン！左舷、砲雷撃戦用意デース！提督の初陣、勝利で飾るヨー  
！Follow me！」

しぐれてゆくか。 2

厚く張った雲の下にエンジン音が響く。九七式艦攻の編隊である。搭乗している妖精が互いに合図を送り合い、一斉に高度を下げてゆく。眼下に見えるのは深海棲艦の艦隊。やがて高度が下がると、隊長機を先頭に敵艦隊の横つらからアプローチをかける。深海棲艦の対空射撃をかくぐり、九七式艦攻の雷撃が放たれた。魚雷はまっすぐに敵艦隊へと突き進み、やがて敵駆逐艦に直撃した。九七式艦攻の編隊は戦果を確認すると、一斉に離脱してゆく。

帰還した編隊は、次々と龍驤の甲板へと着艦してゆく。妖精たちも戦果を上げてどこか誇らしげだ。

「敵駆逐艦一隻撃沈、未帰還機なし。上出来やね」

「これで残存戦力は重巡洋艦一隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦二隻ですね。敵艦隊は依然こちらへ接近中です、お姉さまー！」

金剛は報告を聞き、すぐに返答を返した。

「このまま反航戦に突入しマース！各員、砲戦用意はいいですネー？」  
各々の返答を聞き、前方に見えてきた敵艦隊に向かって金剛は照準を合わせる。

「お姉さま、霧島いつでも撃てます！」

「いきますヨー！Fire！」

金剛、霧島の41cm連装砲が火を噴き、敵艦隊の頭上に降り注いでゆく。そのうち一発が敵の軽巡に直撃し、そのまま海中へ屠っていった。更に一発が重巡を掠め、小破させる。

「弾着を確認！お姉さま、やりました！」

「Good jobネー！続いて駆逐艦隊、砲雷撃戦の用意アース！」  
敵艦隊が駆逐艦の射程に入り、吹雪、夕立、時雨の三人も砲を構える。しかしそれは敵の射程に入ったという意味でもあり。

深海棲艦側からの砲撃が始まる。各艦が回避行動を取り、砲弾を避けてゆく。

「っ！夕立、砲弾が掠ったっばいっ！」

「夕立っ！」



砲弾を掠らせた夕立に、時雨が少し狼狽している。それに構うことなく、深海棲艦の砲撃は続いている。

「こら時雨えー！ 氣い張ってへんと自分が被弾するで！ ……このお、あんまり調子のつとつたらあかんで！ 攻撃隊、発進！」

龍驤の飛行甲板から九九式艦爆が発艦し、敵艦隊の頭上めがけて飛び立っていく。

「急降下爆撃、いくでえー！」

敵艦隊上空に到達した九九式艦爆が敵めがけ一気に急降下してゆく。深海棲艦も対空砲火を張るが、それも抜けて爆弾が投下される。そのまま爆弾は軽巡の頭上で炸裂し、爆炎が敵を包む。おそらく生きてはいないだろう。海面近くで反転した九九式艦爆を深海棲艦の対空砲の追撃が襲う。何機かはエンジンをやられ、水面に墜落してゆく。

「今や！ 雷撃、やったって！」

「はいっ！ 三連装酸素魚雷、発射っ！」

龍驤の合図を受けて吹雪が、続いて夕立、時雨の二人が魚雷を放つ。魚雷は敵の重巡を的確に捉え、轟沈させる。残った駆逐艦二隻が戦況を見て、戦闘海域からの離脱を目指し急速に離れてゆく。

「敵が逃げてくっぽい！」

「砲撃するよっ！」

夕立と時雨が敵に向け砲撃する。砲弾は手前にいた駆逐艦に着弾し、轟沈させたが、もう一隻の駆逐艦は射程範囲外へと離脱する。

「逃げられた…！」

思わず追撃しようとする時雨を、霧島が引き止める。

「時雨！ もう射程圏外です！」

「でもー！」

時雨は柄にもなく焦燥感に駆られているようで、反射的に霧島に反論しようとする。

「いい加減にしいや！ 艦隊は集団行動や！ 自分の都合で行動したらあかん！」

「でも、ここで撃ち漏らした敵が誰かを襲うかもしれない！ そんなの

見過ごせないよ！」

パァン！という快音が海原に響いた。

「自分も守れんやつに守られる筋合いはないわ！命あつての物種や！  
頭冷やせや！」

龍驤の平手が時雨の頬を打った。戦場が水を打ったように静まり返る。

「どんな大層なことゆうててもなあ、死んだらそれまでやねん！それくらい自分もわかつてるやろ!？」

時雨は呆然としたまま腫れた頬を抑えている。

「Oh・・・龍驤、時雨も悪気があつたわけではないですネー。今回は大目に見て欲しいデース・・・?」

「いや、一回はつきり言つたらなあかん！命のやり取りしとる出撃なんや！」

「おいおい、戦場で喧嘩を始めてしまったぞ」

「も、申し訳ありません、提督。やはり私がもう少し編成を考えるべきでした。私の想定が甘く・・・」

少佐が右手を上げ、大淀の言葉を静止する。

「何も問題はない。新兵の強攻は戦争に付きものだ。そして古参兵の統率も虚しく戦場は新兵の血で塗られてゆく。その中で生き残ったもののみが古参となり、再び戦場へと舞い戻ってくる。迷い、惑い、生き急げ。闘争に見出すものが生であろうと、死であろうと、そこに戻らずにはいられないのだ。闘争の中で生きるために、闘争の中で死ぬために！」

どうして、この状況でまだ笑っていられるのだろうか。この人は一体何を見てきたのだろう。提督が抱える狂気に、大淀は寒気すら感じた。

「さあ、この大戦争の中で彼女たちが何を見出すのか、鑑賞しようではないか・・・ん?」

混乱する大淀を尻目に、少佐はモニターをバンバンと叩いたり、揺らしたりしている。

「おい大淀、俯瞰の映像が消えたぞ」

龍驤の説教が続く中、最初に、唯一それに気がつけたのは夕立だった。微かに、身を震わせるような低い音が耳に届く。ふと空を見上げると、そこには見慣れぬ複数の影が。

「敵の航空機っばい！」

そのときにはもう遅く、直後敵の戦闘機に観測機が叩き落された。更に爆弾を抱えた爆撃機が迫ってくる。

「全員対空射撃開始！航空機を迎撃して敵空母及び敵艦隊を捕捉し  
マース！H u r r y！」

各艦が急ぎ対空砲火を展開しようとするが、すでに直上から迫る一機が飛び込んでくる。

「ッ！龍驤さん、時雨ちゃん！敵の爆撃機が！」

吹雪が叫ぶ。虚しくも放つ対空砲は敵を仕留められない。

「くっ！迎撃機・・・あかん、間に合わん！」

龍驤は飛行甲板の巻物を広げるが、明らかに発艦は間に合わない。無情にも爆弾は投下され――

――龍驤と時雨の上で、炸裂した。

しぐれてゆくか。 3

龍驤と時雨が爆炎に包まれ、他の艦娘のもとにも爆風が届いてくる。強烈な熱波は離れていてもジリジリと突き刺さるような痛みを感じさせる。

「龍驤さんっ！時雨ちゃんっ！」

吹雪の絶叫にも等しい声が響く。爆炎が薄れ、二人の姿が現れた。痛つつつ．．．なんとか生きてはいるようやな．．．」

龍驤が時雨を庇うように被さり、更に飛行甲板を爆発からの盾とすることで二人とも致命的な一撃は避けたようである。

「龍驤っ．．．僕を庇って．．．飛行甲板が．．．！」

「ああ．．．？ああ、あかんねえ、これは発艦は無理そうやなあ．．．」  
至近距離で爆発を受け止めた飛行甲板はかなり融解しており、修理を受けるまでにはろくに機能しそうもない。むしろこれだけの損傷で致命打を避けることができたのは幸運とも言えるが、どちらにせよ龍驤の戦闘能力はほぼゼロに等しい。

「龍驤を中心に輪形陣を組みマース！敵艦隊の捕捉、急いでくださーイ！」

対空砲の斉射が敵の艦爆を捉え、撃墜してゆく。しかし制空権の喪失から圧倒的な不利は覆らない。やがて敵の第二攻撃隊が飛来するだろう。

「お姉さま！敵艦隊捕捉！空母ヲ級一隻、戦艦ル級二隻、重巡リ級三隻！」

「Shit！まずいですネー．．．！」

想定外の重編成である。特に龍驤の艦載機が使用不可能な現状、まともにぶつかりあうのはかなりまずい。

「敵艦隊を牽制しつつ海域からの離脱を図りマース！」

金剛と霧島の砲撃で敵艦隊を牽制し、海域離脱を目指して進路を変える。敵の砲撃を交わしつつ射程外へ。

「ツ！お姉さま、進行方向に更に敵艦隊！このままでは挟撃を受ける可能性があります！」

金剛は龍驤を見る。やはりダメージは大きい。意識も少し朦朧と  
している様子で、とても正面突破に耐えうる状態ではない。

「一旦近くの島に上陸して態勢を立て直しましょう!」

「そうしましヨウ! 大淀、敵を振り切れて尚且つ身を隠せるちようど  
いい距離の島はありますカー?」

『えつと．．．ありました! 皆さんからみて二時の方向!』

「敵を振り切りマース! 皆さん、ついてきてくださいネー!」

金剛の号令を合図に艦隊は海域内の島を目指して突き進む。よう  
やく運も味方したか、曇天だった空もいよいよ泣き出し始めた。

雨天による航空機の発艦不能もあり、これ以上の被害なく島へ到達  
した艦隊は、島内に潜伏し、海域離脱のため態勢の立て直しを画策す  
る。

「龍驤さん、負傷は大丈夫っぽい?」

「ごめん、龍驤．．．! 僕が勝手な行動取ったから．．．!」

「あほなことゆうな、これはうちの不覚や。人に説教しておいてやら  
れてるんやから世話ないなあ．．．」

「長時間の戦闘を行う余裕はありませんね．．．お姉さま、やはりこ  
こは夜戦で敵艦隊を突破、一気に海域を離脱するしか．．．」

すでに日は大分と傾いている。もう一時間もすれば完全に水平線  
へ沈むだろう。

「どうやらそのようですネー。霧島、探照灯は装備していますネー?」  
「はい、動作に不備はなし、です!」

「日没と同時に夜戦突入、この海域からescapeデース! 皆さん、  
準備をオネガイシマース!」

各々が夜戦に向け、装備の損傷の確認や簡易整備を行い、また気持  
ちを整えていく。その中で、やはり時雨は沈み込んでいる。

「．．．ねえ、時雨?」

「．．．夕立? どうしたんだい．．．?」

地面に座り込み、膝を抱えている時雨に、夕立が話しかける。

「龍驤さんには怒られたけど．．．時雨が夕立の事心配してくれたのは  
嬉しいっぽい! だから落ち込まないで!」

「夕立・・・ごめん、ありがとう」

「大丈夫っぽい！夕立は夜戦得意っぽい！深海棲艦にソロモンの悪夢、見せてあげる！」

その明るさは、ほんの少しだが、時雨の心に光を指した。

「いつまでも落ち込んではいられないね。僕も、準備なきや」

夕立は優しく笑い、また自分の準備へと戻っていった。もう日没まで時間はない。迷っている時間はないのだ。

「どうやら覚悟を決めたようだな」

執務室にて、霧島からの映像と音声を頼りに状況を見守っていた少佐がつぶやく。

「そうですね、後は突破作戦がうまくいってくれればいいのですが・・・」

「ああそうだな。彼女たちならば大丈夫だろう」

「・・・落ち着いていらっしやるんですね、普通慌てたりとかするものだと思うのですが」

大淀の疑問に少佐は何の事はないというように答えた。

「かつて我々は世界を相手取って戦ったのだ。この程度のことは危機にも値しない」

そしてついに、黄昏を越えて夜が訪れる。夜闇の中に、六人の艦娘が集った。

「ではこれより、私たちは夜戦に突入しマース！」

「霧島、探照灯照射、いつでもいけます！敵の砲撃は私が引き受けますから、敵を攻撃しつつ、負傷の大きい龍驤さんを優先的に、皆さん離脱してください！」

戦闘の方針を確認し、再び艦隊が海へと漕ぎ出してゆく。依然雨は降り続けているが、さすがの深海棲艦もいずれこちらを捕捉するだろう。そこからが本番である。

「前方に敵艦隊を発見デース！先制攻撃を仕掛けますヨー！」

金剛の号令に霧島が探照灯を照射し、暗闇の中に敵の姿が映し出さ

れた。艦隊の一斉射撃は、敵の重巡り級二隻を捉え、そのまま海中へと叩き込む。しかし煌煌と輝く探照灯を頼りに、敵の砲火が轟いた。その砲弾が霧島を掠め、付けていたマイクを破壊してしまう。

「おい、音が聞こえなくなっちゃったぞ!? どういうことだね!」

「なぜこういう時には取り乱すんですか!? おそらく今の砲撃でマイクが破壊されたものと思われまます!」

「マイクチェック：ダメです、マイクが破壊されてしまいました!」

「しように無いネー! このまま接近戦に突入するヨー!」

深海棲艦との距離が迫り、駆逐艦も敵を射程に捉える。両艦隊が近づくにしたがつて、より砲火は激しくなっていく。

「さあ、素敵なパーティーしましよ!」

夕立が主砲を放ち、敵艦隊へ切り込んでゆく。主砲の一斉射と酸素魚雷が重巡り級を襲い、海中へ没せしめた。さらに吹雪と時雨の砲撃が戦艦ル級に一撃を与え、ル級を中破へ持ち込んだ。怯むル級に金剛が追い打ちをかける。

「これで finish? な訳ないでシヨー!」

金剛の 41cm 連装砲が至近距離で放たれた。

「金剛! 次や! 増援が来てるで!」

龍驤が声を上げる。その通りに闇夜に乗じて重巡り級が二隻、駆逐イ級が二隻の計四隻が接近していた。すぐに吹雪達駆逐艦が応戦するが、先んじて砲撃された敵の砲弾がこちらに届く。

「きゃあつ! 吹雪、小破ですう!」

「っ!」

吹雪が被弾するも、時雨は集中を切らさない。龍驤の思いは確実に伝わったようだ。

「皆さん、頑張ってください! ここが踏ん張りどころで・・・ツ!」

「ぬおお!? 次は映像すら消えてしまったではないか! これでは戦況がわからないぞ! なんてことだ!」

「落ち着いてください！提督！まだ電文での通信はできますから！」

戦艦ル級の副砲が霧島に着弾し、メガネを破壊した。炸裂した砲弾の破片が額を掠めたようで、顔の左側に血が流れる。

「マイクだけにとどまらず、メガネまでツ！・・・もう容赦しませんからねツ！」

その時霧島の中で何かが切れた。至近距離ながら一定の距離を保っていたル級に一気に接近し、飛びかかる。そのままマウントポジションのような姿勢に持ち込み、水上を滑りながらゼロ距離で、お互いに拳で殴り合いにかかる。

「さあッ！衝角戦の始まりですッ！」

霧島とル級の殴り合いは、互いに避けることも程々に、まさに一心不乱に続いている。

「こ、金剛さん、あれ大丈夫なんですか!？」

吹雪が金剛に半ば叫ぶように問いかける。金剛は砲撃を続けながら「No problem!」と答えた。

「霧島は姉妹の中でも一番の武闘派ですからネー・・・スイッチが入ったら私も止められないデース・・・」

しばらく殴り合っていた霧島は、ル級をノックアウトさせたように、顔に痣を作りながらも、軽傷で戻ってきた。

「申し訳ありません、お姉さま。メガネがないので砲撃が当たりそうもありません・・・。なので衝角戦に移行しますね！」

「りよ、了解デース！敵をこのまま掃討しますヨー！」

嬉々として次の敵に向かっていった霧島を見送って、金剛は「このmodeの霧島は少し苦手デース・・・」と吹雪にこぼした。

増援に現れた四隻の深海棲艦のうち、駆逐イ級は最初の砲撃と、その後の夕立の切込みによってすでに葬られた後であった。残った重巡り級が捨て身とばかりに接近してくる。

「ここぞ止めるっばい！・・・っ！」

夕立が仕留めにかかるが、一隻が夕立に接近戦を仕掛け、もう一隻は大回りで龍驤の方へと向かってゆく。龍驤の一番近くにいたのは、



時雨だった。

「くっ……！ここで僕が仕留めなきや……！」

強烈なプレッシャーがかかる。自分に仕留められるのか？龍驤を大破させた本人の自分に？思考が鈍り、押しつぶされそうになる。その刹那。

「時雨え！しゃきつとせえ！誰かを守るんやろ!?まずうちを守ってみせえ！」

龍驤の激励が、時雨の意識を突き通らせた。思考が加速し、時間が泥のようにゆっくりと流れて見える。リ級の砲門が二人に向けて、放たれようとしている。それに返すように、時雨も主砲を構え、重巡リ級に向け、渾身の一撃を放った。

「時雨！龍驤さん！大丈夫っぽい！」

リ級を片付けた夕立が二人の元へ駆けつける。二人へ向かったり級は崩れ落ち、そして……時雨もまた力なく倒れかけ、龍驤が受け止めた。

「時雨っ！」

「心配せんでええよ。緊張の糸が切れただけや」

龍驤の言葉どおり、時雨は被弾していない。どうやらリ級の砲撃は逸れたようだ。

「龍驤……ごめん、力が抜けちゃって……皆に迷惑かけてるかな……?!」

時雨は申し訳なさそうに自分を支える龍驤を見る。そんな時雨の頭を龍驤はわしゃわしゃと撫でて言った。

「ええんやで。よう頑張ったなあ、えらいで！」

それを聞いて時雨は、恥ずかしそうに顔を伏せた。

「……たーだーし、鎮守府に帰るまでが出撃やで！さ、立った立った！」

そう言って龍驤は時雨を自分で立たせ、金剛たちと合流する。霧島はもう敵がいなかったなので、少し不満げだった。

「全員、無事ですすねー、よかったデース！」

金剛が全員の顔を見回して言った。いつの間にか雨はやみ、雲間か

らは月が覗いていた。これから雲が晴れば、帰還する道中で綺麗な月が見えるだろう。真つ暗だった水面に、月明かりがきらめいた。「さあ、私達の鎮守府へ、Go homeネー！」

しぐれてゆくか。 4

「はあー、えらい目に負うたでほんまに！」

龍驤のため息が浴場に反響する。夜戦での海域離脱を完遂した艦隊は無事母港へと帰還し、すぐさま入渠に入っていた。入渠とは、すなわち入浴を指すというわけではなく、基本的には戦闘で損傷を受けた艦装の修復の時間が入渠となる。その時間は基本的に各々が自由に使うことができるが、戦闘直後は当然ながら真っ先に入浴へ向かう艦娘が多いために、そうした共通認識があるのである。

「皆さん、お疲れ様でしたネー！特に龍驤は損傷を負いながらの奮闘、Niceな活躍デース！」

「まあ航空機の発艦ができんようになってからは何もしてへんけどなー」

どっかりと洗い場に座り込む龍驤に金剛が飛びつく。

「ご褒美に私が背中を洗ってあげるヨー！」

「おっ気が利くやん・・・ってそっちは胸や！自分わかってやってるやろ！」

「こ、金剛お姉さまにお体を洗っていただくなんて・・・！羨ましますぎますー！」

霧島がその様子を見て生唾を飲み込んだ。

「お姉さま！私も敵戦艦との衝角戦において戦果を上げました！是非！是非私にもご褒美を！」

「自分間違えようがないやろ！あてつけかいな！」

龍驤が叫んだ。霧島は龍驤の言葉の意味がわからず困惑しているようだ。蛇足ではあるが、霧島のバストは金剛型でも一番大きい。

「龍驤、よかったら、僕が体を洗おうか？」

龍驤たちのやり取りを見ていた時雨が怖ず怖ずと名乗り出た。龍驤は一瞬だけ物珍しいものを見るような目で時雨を見たが、すぐに笑顔で「じゃ、頼むわ」といってタオルを時雨に差し出した。

「洗うのは背中やで、ええか、背中やー！」

「そんなに言わなくてもわかってるよ！僕はそんな変態じゃないよ

！」

時雨はタオルを受取り、龍驤の背中を洗っていく。龍驤の背中はいさく、ともすれば駆逐艦とも見間違えてしまうような体躯だ。しかしその背中はとても頼もしい。

「龍驤、本当にごめんね。僕が初めからしっかりしていれば攻撃を防いでいたかもしれないのに」

「もうええって。初めからしっかりしてるやつなんておらん。これからいろんな経験を積んで、成長していけばええ」

「…僕、提督に、提督のこと好きになれないって言っちゃったんだ。提督、怒ってるかな」

少し悲しげな声色で不安をこぼした時雨に、龍驤は「あ？という素っ頓狂な声で返した。

「あの提督の初めての出撃のメンバーに選ばれてる時点でそんなありえへんやろ？」

「でも、それは僕が覚悟を持てなかったからで、それを直させるために編成に入れたのかも・・・」

あくまで時雨は龍驤の言葉に懐疑的な様子で、うつむいている。そんな時雨を見かねたか、龍驤は洗う手を止めさせ、時雨に向き直った。

「あんなあ、あの提督がそんなこと言ったくらいでへそ曲げるような玉にみえるか？少なくともうちにはみえへん。気にするだけムダや」

「そうかな・・・」

ネガティブな時雨の発言に、龍驤はじれったそうに唸った後、真っ直ぐに時雨の瞳を覗き込んで、言った。

「ちよつとは自信を持たんかい！あんたが思ってるほど物事は悪いよ。うに回ってるわけやないよ！それに自分の中だけで完結させようとするのもやめや！そんなに気になるんやったら直接聞きに行ったらええやろ？」

そう言われた時雨はまた少し萎縮して、言葉を返す。

「でも、本当に怒ってたら、提督に嫌われてたら」

「そんなときは」

明るく、そして優しい笑顔で。

「うちも一緒に謝りにいったる」

その時時雨は、涙を落としていた。悲しくないのに。辛くないのに。

「うわわ!?自分何泣いてんねん!?うちなんかおかしなこと言うたか!?!」

人が時雨れる時は、悲しい時だけではない。辛い時だけではない。嬉しくて、安心して、流れる涙もある。

「ほら、うちの胸を貸したるから泣き止みい!」

泣き続ける時雨を、龍驤は抱き寄せてなだめる。時雨の心中を知らぬ龍驤は、おかしなことになってもうた、と混乱気味だ。

「えーと・・・そのやな・・・あー」

「ちよつ!霧島、くすぐりたいデース!」

二人の間の空気をぶち壊すように、賑やかな騒ぎ声が響いてきた。

「お姉さまのバスの成長、この霧島には誤魔化せませんからね!ほら、もっと触らせてください!」

龍驤の頭の中で様々な情報が行き交い、混乱し、そして処理落ちした。

「人が真面目な話しとるときに何乳練り合つとんねん!!当てつけはやめろゆうとるやろ!!あほーっ!!」

龍驤の絶叫が、浴室に木霊した。

夜の鎮守府に一際賑やかな一角がある。多くの艦娘が集うその店ののれんには、「鳳翔」という字が見て取れる。

「艦娘の運営する居酒屋か。艦娘とはなかなか多彩なことをしているのだな」

少佐は軽空母である鳳翔の開いている居酒屋「鳳翔」へ足を運んでいた。その大食漢ぶりは変わらずである。

「いいお店だよ。皆一日の疲れを癒やすためにやってくる。何よりご飯がおいしいからね!」

少佐の対面に座るのは、最上だ。ウイスキーを煽りながら少佐と雑談している。

「で、そろそろ教えてよ。時雨、なんだか表情が明るくなってたじゃないか。何をしてあげたのさ？」

「戦場に出してやった」

少佐の返答に最上はなんとも言い難い表情で、

「それだけ？」

と聞き返した。

「それだけだ。闘争に身を投じたものは必ず何かをそこに見出してくる。愉悦、悲哀、畏怖、軽蔑、興奮、恐怖、希望、絶望。その他無限の感情が入り乱れ、何かが残る。そこではもはや傍観者ではいられないのだ。思い悩む間などない。それ故に彼女も決断した。見出したものが何であれ戦うことを選んだのだ」

「提督が何を言ってるのかはわかんないけど、つまりそれって荒療治ってことだよな？ボク、提督に、あの子の心の扉を開けてあげてっていったはずなんだけど。もっと優しく諭すとか、相談相手になってあげるとか、そういうつもりで言っただけだなあ」

最上の言葉に、少佐は悪びれる様子もなく言った。

「その代わりに大切なものを与えてやった。闘争の中に生きる意味だ。何かを殺すことであれ、何かを守ることであれ、それがあれば戦い続けられる。それは素敵なことだ。とてもとても、素敵なことだ」

最上は虚空を仰ぎ、思考して、やがてそれを投げ捨てた。

「あーもういいや、結局時雨は少し明るくなったことだし！今日はお祝いだね！朝まで飲もう！」

「うむ、とりあえずメニューの初めから片端から持ってきて貰おうか」

こうして鎮守府の夜は更けてゆく。少佐の提督生活は、まだ始まったばかりである。

速さは、自由か孤独か。 1

金色の髪を靡かせて、水上を疾走する艦娘がいる。小柄な身体に恵まれた能力を秘めた彼女は、遠方から飛来する砲弾をひらりと躲し、瞬く間に敵との距離を詰めて行く。そのまま、吹き抜けて行く風をも追い越して突き進み、やがて酸素魚雷を撃ち放った。相手もそれに気付いて回避行動を取るが、弾幕が自由な回避を許さない。そうしているうちに放たれた酸素魚雷の一つが接触し、爆音の代わりに、そこまで、という声が響いた。

「駆逐艦島風、駆逐艦同士の演習ではほぼ負け無しの成績。艦娘の中でもトップクラスの速度を持っている艦娘か。なんとも素晴らしい」

眼鏡越しに、更に双眼鏡を覗き込む少佐の視線の先では、駆逐艦同士の戦闘演習が行われている。出撃任務の開始に伴い、各艦娘の練度向上の為にこの様な演習が行われているのだが、少佐はいつもその様子を観戦している。

「実際優秀な子ですよ。戦闘に関しての技術は駆逐艦の子達の中では頭一つ抜けている印象ですね」

少佐の横では、半ば解説役として連れ歩かされている大淀が書類に演習の記録を書き留めている。

「やはり艦娘の戦いは面白いな！船を出してもう少し近くで観戦する訳にはいかんのかね？」

「演習用の弾とはいえ、砲弾が飛び交っている訳ですからかなり危険です。我慢してください」

最初は少佐の言動に振り回されていた感のあった大淀も、大分と付き合い方を心得てきた様だ。少佐の無茶振りにも涼しい顔で答えている。

そうしたやり取りをしているうちに、演習を行っていた艦娘たちが母港へと戻ってくる。その中で一人、後続を振り切るかのような速度で戻ってくる艦娘が見えた。

「皆おっそーい！先にお風呂いっちゃいますよー!?!」

一番乗りで母港に帰ってきた島風が振り向き、海に向かって叫んだ。海の方からはかすかな声が届くのみだが、双眼鏡越しの少佐の目には怒声をあげている艦娘の姿が映る。やがて島風以外の艦隊が母港へ近づいてくると、その怒声もはつきりと聞き取れる様になった。

「こらあー島風えー！吾輩達を置いて先に帰るとは何事じゃー!!」

妙に古風な言葉使いの艦娘は、怒り心頭と言った様子で島風に向けて怒鳴っている。彼女は航空巡洋艦である利根。この演習の教官でもある。利根は全速力で戻ってくるなり、島風に詰め寄った。

「帰ってくるまでが演習じゃと言っておるじゃろう！艦隊行動を崩すなど何度言うたらわかるんじゃー！」

「だって皆遅いんだもんー！」

島風は悪びれる様子もなく言い返した。

「艦隊行動は遅いものに合わせるのが基本じゃ！大体お主が演習で響の艤装を損傷させたから余計遅くなっとるんじゃぞー！」

「当たり前どころが悪かったのはしまかぜの責任じゃないし！大体利根さんも艦隊置き去りにしてるじゃないですか！」

反論してくる島風に利根はまた叱ろうとしたが、指摘されて振り返ると、そこで初めて他の艦娘を置き去りにして来てしまったことに気がついたようだ。どうやら勝手に先行していく島風を追うことに夢中になりすぎて自分も艦隊を置いてきてしまったらしい。

「た、確かに吾輩も置き去りにしてしまったが・・・って、どこへいくのじゃー！まだ話は終わっておらんぞー!？」

言い訳混じりに向き直った利根だが、島風はすでにそこから逃げ出していった後であった。しかし利根は叫べども追いはしない。本気で逃げる島風に追いつき捕まえるのは難しいとわかっているからだ。常習犯なのである。そうこうしているうちに艦隊も戻ってきたように、何やら利根はあたふたと説明をしている。彼女たちを解散させた利根は、大淀を見つけると一目散にこちらへやってくる。

「大淀おー！お主からも島風に言っちゃってくれえー！彼奴、いつつも吾輩の言うことを聞かんのじゃー！」

「利根さん、あの子は自由奔放な子ですから、長い目で見て基本を教え



てあげてください。と言うか私が言ったくらいで直るならもう注意してますから」

大淀は開き直ったように利根に告げた。

「吾輩には無理じゃ！完全になめられておる！もつと上の奴から言ってもらわぬとどうにもならんぞ！」

「うーん、困りましたね……。長門秘書官は駆逐艦の子達に弱いですし、そうなるに誰に頼んだものか」

利根は完全に参っている様子で、大淀に頼み込んでいる。しかし大淀もこの手の処理があまり得意ではないようで、誰にその役を頼むか悩んでいるようだ。

「いかに能力が高かろうと単身で幾千の深海棲艦と渡り合うことなどできまい。我々は不死身の化物などではないのだからな。実戦経験の豊富な艦娘を当てるのが良かろう」

大淀の向こう側から聞こえる声に、利根はびくりと反応し、恐る恐る覗き込んだ。今の今まで少佐の存在に気がついていなかったようだ。一部に気が行き過ぎると他に気が回らなくなるという性格なのか、単に天然なのかは分からないが、どことなく子供っぽさを感じさせる艦娘だ。

「て、提督、いつからそこにおったのじゃ？」

「ん？いつからも何も初めからここにいたではないか」

利根はなぜか取り乱している。

「そ、そうか。大淀、吾輩は工廠に寄らねばならんから失礼するぞ。島の件は確かに頼んだからのう！」

あからさまに逃げ出してしまった。少佐には利根に逃げ出される心当たりなどないのだが。

「・・・多分偵察機を飛ばせなかったのを怒られると思ったんじゃないでしょうか」

大淀が半ば呆れ気味に言った。本来ならば今日の演習では利根が映像送信可能な偵察機を飛ばして演習の様子を写す予定だったのだが、カタパルトの不調で発艦不能だったのだ。それ故少佐も双眼鏡を持ち出して港から観戦していたのだが、どうも利根には少佐がそのこ

とを怒りに来たものと勘違いしたようだ。だからといって逃げ出すのもどうかと思うが。

「提督、島風の件、いかがなさいますか？」

「先程行った通りだ。適任と思われる艦娘を当ててくれたまえ。選出は君に任せる」

「で、なんでその適任がうちなんや。別に実戦経験豊富ってわけでもないし、まさか見た目が駆逐艦みたいやからなんて言わんやろうな？」

数時間後、大淀によって選出された龍驤が執務室にやってきていた。しかし龍驤は選出の基準に疑問を抱いているらしい。

「と言いましたも、この鎮守府が動き始めたの自体つい最近のことですから、皆さんそこまで経験があるわけでもないじゃないですか。龍驤さんは最初の出撃で時雨を前向きにしてあげるのに貢献してくださいましたことありますし、適任かと思ひまして」

「いやいや、それとこれとは話が別や。あれは状況がそうさせただけやつて。そもそも態度が悪いつちゆう話なら教官連中の仕事やろ？」

イマイチ龍驤は乗り気ではなさそうだ。というか龍驤の言い分は最もなものなので仕方がない。その教官連中が音をあげてしまっているから、と言うのはあまりにお粗末な理由である。しかしそれが事実なのでこちらが引き下がるわけにもいかず、大淀はなんとか龍驤の懐柔を成功させようと苦心する。

「確かにそれもごもつともなんですけど……。教官側の皆さんからしても、龍驤さんには敵わないと思うところがあります。時雨への働きかけ、本当に凄いと思ってるんです。ですから教官としても恥を偲んで、龍驤さんをお願いしたいという言伝を預かっているんです」

「……ほんまか？」

「はい。それに時雨を身をもって守ったという話を聞いて、龍驤さんに憧れている子もいっぱいいるんですよ。そのような名実ともに優れた龍驤さんですから、今回の一件も龍驤さんが適任だと思っただんです。引き受けてくださいませんか？」

「・・・しゃあないなあ、今回だけやで！うちは何でも屋やないんやからな！今回だけ特別やからな？」

おだてられた龍驤は案外簡単に納得してしまった。ほっとした様子の大淀から少し説明を受けると、意気揚々と執務室を飛び出していった。後には大淀と少佐のみが残る。

「・・・提督、私は正しかったのでしょうか」

大淀は、簡単に丸め込んでしまった龍驤にある種の罪悪感を感じていた。

「正しさとは時々状況や視点によって変化するものだ。いかなる手段であろうとも、自らの目標を達成するために取られた行為は自らの中で正しいものなのだ。倫理や法律がそれを縛っているだけなのだよ」

## 速さは、自由か孤独か。 2

駆逐艦達の宿舎の前の広場では、たくさん駆逐艦がたむろしている。その中に混じって、駆逐艦のような背丈の空母が一人、あたりをきよろきよろと見回していた。

「む？龍驤ではないか。こんなところで何をしているのじゃ？」

彼女に声をかけたのは、何やら紙の束を抱えた利根だ。

「とうとうお主も駆逐艦寮に移されたのか？いかんのう、いくら駆逐艦並みとはいえそれはあんまりじゃ！吾輩が後で大淀に文句を言っておいてやるが故、安心するがよいぞ！」

「どこが駆逐艦並みや、怒らへんから言うてみい。ああ？」

そりや身長と胸じゃろ、と利根が言ったところで、利根の脛に強烈な蹴りがお見舞された。声にならない悲鳴をあげた利根は、痛みのみ、あたりを跳ね回っている。

「大体あんたもなんでここにおるんや？」

「吾輩は駆逐艦達に授業で配り忘れた資料を渡しに来たんじゃ！痛つつつ・・・何も本気で蹴ることはないじゃろ！」

そういえば、利根も教官の一人であったと、龍驤は思い出した。この一連のやり取りを見ていると、こいつが教官で大丈夫か、と思ってしまうが。

「自業自得や！そもそもうちはあんたら教官が頼りないからここに来てんねんで！」

脛をさすりつつも不思議そうな顔をしている利根に、龍驤は事のあらましを説明する。

「おお！するとお主が島風を教育してくれるということじゃな！いやー困っておったんじゃ！彼奴め、いつつも吾輩の言うことを聞かぬし、注意すれば何かと煙に巻いて逃げてしまうからのう、お主なら安心じゃ！」

利根は龍驤が島風の態度改善に当たると聞いて、無邪気に喜んでいる。ある意味それほど島風の自由奔放さに苦しめられていたということでもあるのだが、その無責任さに腹が立つのもまた事実。

「で、もうその用事は終わったんか？」

「うむ、終わったぞ。この後筑摩と間宮で落ち合う予定になっておるのじゃ。吾輩はこのへんで……」

立ち去ろうとする利根の肩を、龍驤はガツチリと掴んだ。その顔には悪い笑みが浮かんでいる。

「ちようどええなあ。ほんならあなたにも手伝って貰おうやないの。ティータイムは延期や」

「えつと、じゃから吾輩は筑摩を待たせておるんじやが……。おい！無理やり引つ張るでない！嫌じゃ！吾輩は筑摩と甘味を食べに行くんじや！筑摩あ！助けてくれ！筑摩あああ!!」

助けを求める利根の叫びは、鎮守府の喧騒の中に溶けて消え、ついに筑摩の元へ届くことはなかった。

龍驤と、引きずられる利根が島風を探し始めて数十分、ようやくその居場所をつかむことができた。艦娘は姉妹艦と行動をともししていることが多いが、島風は姉妹艦が存在しない艦である。本人も奔放な性格であるが故に、一人で気の向くままに行動していることが多いようだ。実際道行く艦娘達の日撃情報を元に探した結果、これほど時間がかかってしまった。

「のう龍驤、やつぱり吾輩じゃ無理じゃ。全く役に立たんぞ？だから解放してみたらどうじゃ？」

「安心せえ、あんたでも役に立てることはあるぞ。うちの道連れや」

さすがの利根もこれで観念したか、首根っこを掴まれたまま、とぼとぼと歩いていく。

最後に島風が目撃された工廠区画付近にやってくると、遠目に艦娘が歩いてくるのが見える。

「Здравствуйте、龍驤さん、利根さん。二人が一緒にいるのは珍しいね」

彼女は響。雷、電と同じ特三型駆逐艦の二番艦である。

「おう響。今島風を探してるんやけど、見てへんかな？」

「島風ちゃん？島風ちゃんならこの先で司令官と一緒にいるのを見か

けたけど」

「提督と？なんや珍しいな」

島風と提督が共にいる様子を想像しようとするが、いまいち思い浮かばない。何を考えて動いているのかよくわからない島風と、変わり者の提督。控えめに言つて、異色のコンビだ。

「ありがたいな、響。自分、演習で壊れたスクリュー修理に持つてた帰りやろ？艦装は命懸けるもんやからね、次出撃する前に最後の調整はしっかりとやつくんやで」

「うん。ありがたい、龍驤さん。じゃ、利根さんも、До свидания」

響は二人に敬礼して、宿舎の方へ戻っていった。龍驤がふと隣に目を向けると、利根が感心するような顔でこちらを見ている。

「お主、本当に面倒見がいいんじゃないや。よう気がつくもんじゃ」

「なんや、またなんか難癖でも付ける気か？そんなんはええから、はよ島風捕まえるで！」

「吾輩は褒めとるんじゃないぞ！．．．しかし提督もそこにおるのか。尚更吾輩は行きたくなかったのう．．．」

何やらまたごね始めた利根に、龍驤は一つため息をついてから聞いた。

「なんや、何があつたか言うてみい。今度はなんなんや？」

「うむ．．．実は演習時に飛ばす予定だった偵察機がカタパルトの不調で飛ばせなくてのう．．．。提督に怒られるんじゃないかと．．．」

「はあ？そんなことかいな。心配して損したわ」

龍驤は再び利根を引きずって歩き出した。心なしか先程よりも利根が重くなっているような錯覚を感じる。しばらくそのまま歩いてきたが、やはり気になるので口を開いた。

「まだ怒られてないんやろ？ならもう怒つてへんつてことや。あの提督が変わりもんなんはあんたもわかつてるやろ？」

「それはそうじゃが．．．しかしのう．．．」

「しつかりせえ！あんた教官やろ！そんなんじゃ駆逐艦達に笑われるで！」

ほら、と言って利根を掴んでいた手を離し、代わりに背中を押しした。バランスを崩した利根はつんのめって二三歩前に踏み出した。

「もう自分で歩けるやろー！さっさといくで！」

利根はまだ何か言いたげであったが、渋々と言った様子で歩き出した。なかなか難儀な奴やな、と思うが、これ以上言っても気持ちの整理がつかないだろうからひとまず放っておいた。

それから少しいくと、響の言葉通り島風と少佐がいるのを見つけた。実際にその様子を見てもミスマツチであると思う。共通点といえば互いに金髪であるということか、何を考えているやらよくわからぬということくらいだろう。

「何度見ても不思議なものだなあこの連装砲ちゃんというやつは！自我があり、自ら動く砲台とは、思い至りもしなかったぞ！」

今日も提督は艦娘の装備を見て興奮しているようだ。妖精さんがいる以上連装砲ちゃんも特に物珍しいものではないと思うのだが、提督からすればまた話が別であるらしい。

「提督、ちよつち失礼するで！」

「龍驤に利根か。この連装砲ちゃんが自律行動するメカニズムはどうなっているのだね？自我を持ちながら使用者の言うことを聞く、的確に攻撃をする、何より敵味方の区別がつけられるとはなんとも頼もしい！赤軍の対戦車犬などとは大違いじゃあないか！」

またよくわからん言葉を持ち出してきよった、と思いつつも、軽く受け流して横目で島風を見る。逃げ出すような素振りは見せていないので、まず一安心だ。そのまま利根に視線を移すと、すでに逃げ腰になっている。

「提督、利根がなんか話あるらしいで」

「なっ!?お主一体何を・・・」

まずはこれでよし。子供ではないのだからこの程度は自分で解決してもらわなくては困る。

「さて、うちが用があんのはあんたや、島風」

「おう!?島風に何の用ですか?」

島風は顔に疑問の表情を浮かべ、小首をかしげた。

「教官連中の言うことを聞かんらしいな。なんでや?」

龍驤の言葉に、島風はなんだそんなことか、と言わんばかりに、不満げな顔で答えた。

「だって皆島風についてこれないんだもん。演習でもちゃんと結果出してるし、別に教わることなんてないもん」

「結果出してるからええってもんやないで。一対一ではあんたの戦い方でええかも知れんけど、いざ実戦でその戦い方じゃ他のメンバーが困るんよ」

「皆島風についてくればいいじゃないですか!それに島風は速いから敵の砲弾になんか当たりません!」

「艦隊での行動は遅いもんに合わせてるもんやろ?一人で突っ走るのが戦いやないで。個人の特色は集団全体に利益を生むための一手段に過ぎん」

「じゃあ島風は実戦で速度を活かすことはできないってことですか?」

島風は急に真面目な表情になり、まっすぐに龍驤を見据えた。足元では二人の会話を、心配そうに連装砲ちゃんが見守っている。

「そんなのは島風じゃありません!島風は最速です!速きこと、島風の如しなんです!」

島風は先程から打って変わり、噛み付くような剣幕で捲し立てた。さすがの龍驤もこの事態は予想外で、不意打ちを食らったように怯んでいる。

「わ、わかった!わかったから一旦落ち着きい!」

「最速だから誰にも縛られない、それが島風です・・・!」

龍驤になだめられた島風は、肩を上下させて息を整えている。取り乱した島風は、いつもの自由奔放、傍若無人な様子とは正反対に、ひどく臆病で神経質な印象すら感じさせる。

「うちの言い方が悪かったな、謝るわ。じゃあ、どうしたら皆に合わせしてくれるか。そつちを聞かせてくれんかな?」

島風は少しの間視線を地面に落とし、何かを考えている。しばらく



して息が整い、視線を上げてもう一度龍驤を見据えた。いつも通りの大胆不敵な笑顔をたたえて。

「島風を超えてみてください、速さで！駆けっこしましょう！」

### 速さは、自由か孤独か。 3

「それで、島風に軽くあしらわれて逃げ帰ってきたわけ？」

彼女は手元で装備を修理しながら、そう言い放った。彼女は軽巡、夕張。普段の出撃任務の傍ら、工廠で装備の開発や修理に従事する技術派の艦娘である。今その手元には、偵察機発艦用のカタパルトが置かれていた。

「そうなのじゃ！じゃから吾輩はやめようと言ったのに、龍驤が言うことを聞かんでのう！」

利根がため息混じりに言ってみせた。かくいう彼女も、島風に負けた口なのだが。

遡ること数十分、島風に駆けつこ勝負を挑まれた龍驤と利根は、鎮守府内のグラウンドにて勝負を行っていた。龍驤、利根と、なぜか意気揚々とやってきた少佐を加えた三人は、いざ島風に挑んだのだが、結果は惨憺たるものであった。伊達に最速を自負するだけのことはあつて、艤装がなくとも島風はいとも簡単に三人を千切つて見せた。「あんたなあ、恥つちゆうもんがないんか!?これじゃあ島風を余計に増長させただけやないか！なんとしてもあいつを負かしたらなああかんで！」

「といつても圧倒的大差で負けてるんだから話は簡単じゃないわね。提督のほうはどうだったの?・・・聞くまでもないか」

夕張が想像する通り、少佐は島風に置いて行かれた二人にもさらに置いて行かれ、ぶつちぎりのビリであった。なぜ軍に入れたのか、甚だ疑問である。

「途中で倒れとつたから水だけ置いてきた。こここの場所は伝えてきたからそのうち来るんちゃうかな」

「お主は世話焼きなのかどうかよくわからぬやつじゃのう。夕張よ、吾輩のカタパルトは直りそうか？」

夕張はカタパルトを一通り眺め、最後に何箇所か手を加えると、カタパルトを利根に差し出した。

「これで大丈夫だと思っわ。後は何度か発艦させてみて、不具合が出

るようならもう一度持つてきてちょうだい」

夕張からカタパルトを受け取った利根は、愛おしいものを見るような目でしげしげと眺め、にっこりと笑った。

「礼を言うぞ夕張！やはり吾輩にはこれがなくてはのう！」

「なんだ、カタパルトの修理は終わってしまったのか？是非見学させていただきたいものだったのだが」

ちょうどそのタイミングで少佐はやってきた。彼からすれば悪いタイミングだったようではあるが、その顔にはいつも通りのなんとも憎たらしい笑みが浮かんでいるので、体力は回復したようである。

「あら提督。他にも修理するものはたくさんありますから、いつでも来ていただいていいですよ。ご所望でしたら試し撃ちもしていただけます。最も、艀装無しでの砲撃は無理かもしれませんけどね！」

「何？そうか、できることならばぜひ撃ちたかったのだが」  
少佐はいかにもがっかりしたというように肩を落として見せた。

「……？提督、何か機械仕掛けのものを持つていますか？」

「ふむ？持つているものといえば時計くらいなものだ」

夕張は一瞬聞きなれない駆動音を聞いたような気がして、小首をかしげた。確かに時計などとは違った音だったようだが、次に耳を澄ましたときにはいつもの鎮守府の喧騒が聞こえるばかりだった。

「そうですか……。ごめんなさい、島風の話をされに来たんですよね？」

「おお、そうだな！噂に違わぬ快速だなああいつは！どう倒したのか、全く困ったものだ！」

「本当じやのう、正攻法で戦って勝てる気がせぬ！龍驤は何か算段があつて受けたのじゃろう？どうやって勝つつもりじゃ？」

問いかけられた龍驤は、何やら文字に起こしづらい唸り声をあげながら天を仰いでいる。視線の先にあるのは薄汚れた天井のみである。  
「……まさかなんの案もなく受けたってわけじゃないんじやろ？」

「う、うるさいなあ！うちらで勝てんのやったら勝てるやつを見つければええんやろ!?せや、夕張、あんたはどうやねん？」

「わ、私？私は無理！そんなに足速くないから！」

「ぐぬぬ……。じゃあ金剛達ならどうや！高速戦艦のあいっらなら勝てるんと違うか!？」

「艦装をつけた状態のことを言ってるなら、スペック的には到底敵わないいわね。普段の状態でも、高速戦艦だからって足が早いとは限らないし」

それからまた何人か足の早そうな艦娘の名前をあげていく龍驤だが、最終的にどの艦娘も勝てそうにないというところに落ち着いた。こうしてみると、改めて島風の素早さが実感できる。

「艦装をつけての勝負ならば、速度に特化した艦装に改装してはどうかね？」

「君い、そんな改装が簡単にできたら苦労せんがな！しかも改装したとしても、島風の速さは頭一つ抜けてるんやで？」

少佐の提案に、龍驤は呆れたように返した。しかし、少佐の言葉を聞いた夕張は、何かひらめいたような表情をして、考え込んでいる。

「提督、速度特化の改装、ありかもしれません。島風に勝てるかも」「本当かのう？これがハツタリだったら吾輩はもう帰るぞ？ただでさえ筑摩との約束をすっぱかしておるのに！」

疑わしげな利根を尻目に、夕張は工廠内の何処かへと消えていき、戻ってきたときには何かをその手に抱えていた。

「じゃーん、これ、なんだか分かる？」

「あんまり吾輩を馬鹿にするでないぞ！高温高压缶じゃろ？」

「正解。遠征に出てた子たちが拾ってきた壊れた艦本式缶を改造してみたの。さしずめ新型高温高压缶ってとこね」

工廠には、出撃任務や遠征任務の際に発見された兵器が持ち込まれることがある。これもまたそのうちの一つである。

「これとタービンをあわせて増設すれば、島風以上の速度を出すのも難しくはないわ。ただ問題は、これは今度新しく着任する子の装備になるってことね」

「ならばその艦娘に島風と戦ってもらうしかならう。あの島風に勝るかもしれない艦娘、楽しみではないか！」

「・・・方針が決まったなら、吾輩はもう帰っていいかのう？いい加減

筑摩のところに行きたいのじゃが・・・」

これで次の作戦はまとまったと見たようで、龍驤が許可を出すと利根はあつという間に間宮へ向かっていった。少佐もしばらく工廠を見回っていたが、運動して腹をすかせたか、同じく間宮へ向かっていったようだ。

「・・・で、なんでわざわざ新しく着任してくるやつに責任転嫁させるような言い方をしたんや？装備やつたら使いまわしできるやろ？それしたら利根にまかせてもええし、うちだって艦載機を積んでなきや勝負に出れたはずや」

二人きりになった工廠で、龍驤が疑問を投げかけた。夕張の先程の言い方は、明らかにミスリードを誘うものだった。なぜそんな言い方をしたのか、問うために龍驤は最後まで残っていたのだった。

「新しく着任してくる子が早く馴染めるようにって理由じゃだめかしら？」

「それじゃあ釈然とせんなあ」

夕張は新しくタービンを製作するために忙しく動きながら返答している。龍驤が大方察しているからか、その言葉にはほとんどはぐらかそうという様子もない。

「まあ、どちらかと言えば島風のためね。あの子が新しい子と友達になつたらいいかなって」

「別に今ここに居るやつとでもええんとちゃうんか？なんなら問題児つながりで時雨とつながれてやつてもええかと思ってたんやけど」

抱えている、一際重そうなダンボールをドスンと置いた夕張は、一息ついてその上に座り、龍驤に向き直った。

「時雨はなんだかんだいって夕立がいるじゃない。でも島風は姉妹艦がない子だから、いつそフラットな状態から始めたほうが早そうだと思いますの」

そういって夕張は一瞬だけ、視線をそらした。

「同型艦がない寂しさっていうのも、分からないわけじゃないから」「あ・・・ごめんな。配慮が足らんかった」

兵装実験軽巡、夕張。彼女もまた同型艦のいない艦である。島風が速さに固執するように、夕張の兵器開発もまた孤独であるが故の特技であるのかもしれない。

「いいのよ。あの子は最速であることを誇りにしてるけど、もしかしたら追いついてきた子に何か感じるものがあるかもしれないし、私もあの子を超えるための装備作りに興味があるから!」

「せやなー!なんとしても島風に勝たなあかんから、期待してるで!」

かくして打倒島風の計画は形をなしてきたようだ。そして決戦は、一人の艦娘の着任と共に火蓋が着られた。

## 速さは、自由か孤独か。 4

「いい風来てる？陽炎型駆逐艦九番艦の天津風よ！これからよろしく頼むわね！」

執務室に天津風の元気な挨拶が響いた。彼女を迎えるのは少佐と秘書艦の長門、そして龍驤の三人である。

「うむ、よく来てくれたな。秘書艦の長門だ。本土からの長旅で疲れていると思うが、もう少しだけ付き合ってくれ」

長門は隣に立つ龍驤に視線を送った。龍驤は頷き、言葉を繋いだ。

「軽空母の龍驤や。ええな、軽空母の龍驤や。よろしゅうな。一応確認しておくけど、基本的な戦闘訓練は向こうで済ませとるか？」

「勿論よ。いつでも実戦に参加できるよう訓練を積んできたわ。・・・なんで二度も名前を言ったの？」

「まあ気にせんでええよ。空母やからな。で、高速で移動しながらの戦闘に自信は？」

その言葉とは裏腹に、異常に強調を加えた台詞回しをする龍驤に天津風は困惑するが、とりあえず、自信はあると答えた。

天津風は新艤装の建造に伴い、大本営より派遣された艦娘だ。余談ではあるが、艦娘の選出基準や出自など、その一切は非公開とされており、提督ですらその内容を知らされることはない。謎の敵たる深海棲艦の跋扈するこの世界ではあるが、それと同様にまた艦娘という存在も謎であるということも否定しがたい事実。最も、少佐に取ってはそんなことは些事な事ではあるが。

天津風の言葉を聞いた龍驤は、少し安心したような表情をした。そしてその後龍驤が言った言葉にまた天津風は困惑する。

「競争をして欲しい？しかも艤装をつけて？」

「そうや。どうしてもあんたに勝ってもらわなあかん相手がおる」

鎮守府に着任して初めての任務が競争？戦闘でも、速力試験でもなく、競争？そんな話は聞いたことが無い。しかし龍驤は大真面目な表情で説明を続けている。

「実はうちの鎮守府に艦隊行動に従わんやつがおつてな。そいつが言うことを聞く条件として言ってきたのが駆けつこに勝つことなんや」「はあ……でも艦装をつけての競争は駆けつことは言わないんじゃない？」

「大丈夫や。そのへんは話をつけてある」

龍驤は島風と勝負について色々と交渉したようで、最終的に艦装を装備しての海上での競争という条件を島風に飲ませることに成功した。これが龍驤達の、打倒島風戦略の第一歩であった。無論、島風は艦装装備時であつてもトップクラスの速力を誇り、決して手放しで喜べることではない。しかし龍驤達には秘策がある。それこそが、天津風の新型高温高压缶とタービンを用いての機関部強化である。

「着任していきなりこのような事を頼まれて戸惑っているところはあるところが、受けてもらえないだろうか？」

長門が申し訳なさそうに言った。本来は長門が処理しなくてはならない案件でもあるので、彼女なりに責任は感じているようだ。

「……わかつたわ。私にしかできないことなんですよ？」

「すまない、恩に着るぞ」

「天津風。天を吹く風か。良い名だ。なんとも美しい」

突然、少佐が口を開いた。

「天上に吹く風はきつと気高いのだろう。それはきつと神々に愛された清風なのだろう。だがそれでは足りないね。全く足りない。我々が必要としているのは鉄風雷火の戦場に吹きすさぶ暴風だ。疾風怒濤の一陣の風だ」

少佐の語りに、天津風はぽかんと口を開けている。反応に困つていふと言うより、この小太りの提督が何を言っているのかわからないと言った様子である。それに構わず少佐の語りは続く。いつも通り、狂気に駆られたように。

「良いかね天津風。あの艦娘に生半可な覚悟で挑んではならない。大洋を吹き抜けた風は天を穿つ。奴は狂風だ。一切合財を振り払って、傲岸に、不遜に、孤独に吹きすさぶ狂風なのだ。私達はそんな狂風の前に打倒されたのだ。ならば私達は最早ひれ伏すしかないのか？全



てを薙ぎ倒さんとする狂飆が頭上を駆け抜ける中で、身を震わせてただ恐怖するしかないのか？否！断じて否！！最速を自負する彼女への切り札として、私達は君を選んだ。彼女を最速の座から引きずり下ろすために！！なんとも高速で、不敗で無敵で最強で馬鹿馬鹿しい。だが我々は打倒する。君の『最速』を以って、我々は島風を打倒する！！」

駆逐艦寮のとある一角で、彼女達は出会った。

「貴女が島風ね？私は今日からこの鎮守府に着任した天津風よ」

島風は天津風をまじまじと見つめてから、見下したように鼻を鳴らした。

「ふーん。貴女が新しく着任してくるって言う話だった駆逐艦だったんだ。また私より遅い船が来たみたいね」

天津風はその反応に少し頬を引きつらせている。生意気な艦娘だとは聞いていたが……。

「貴女も連装砲ちゃんを連れてるのね。まあ島風の連装砲ちゃんのほうが可愛いけど」

「なっ……！私の連装砲くんのほうが可愛いに決まってるでしょ！？勝手に優劣を決めないでよー！」

「そう言ってる天津風のほうも優劣を決めてるじゃない。どの道島風には敵わないんだから。島風のほうが優れてるに決まってるじゃないー！」

島風はあくまでその態度を崩そうとはしない。煽られているのか、そもそも島風の性格がこうなのかはわからないが、どちらにせよ頭に来る。

「あら、自信満々ね。噂には聞いていたけどよっぽど足が速いみたいで羨ましいわ」

若干皮肉を込めて言った台詞を、島風はあえて言葉通りの意味で受け取った。

「そうよ。島風は速いの！島風は最速で、誰にも負けないの！」

「随分と自分に自信があるみたいだけど、速いからって周りを置き去りにするのは艦娘として失格よ！そんなの優れているうちに入らな

いじゃない！」

島風はその言葉を聞いた途端に、あからさまに不機嫌になった。二人の足元では、主人達のやり取りを知ってか知らずか、お互いの連装砲が無邪気に触れ合っている。

「貴女も島風の最速を否定するのね」

つぶやくように発せられた声には、先程の見下すような口ぶりとは違って、敵に向けるような威圧的な雰囲気があった。一瞬怯みそうになったが、すぐさま言葉を返してみせる。

「ならその最速、証明してみなさいな！私も速さには少し自信があるの。貴女との勝負に乗ってあげる！」

「・・・なるほどね、そういうことだったの。天津風が次の駆けっこの相手だったのね。あははッ！残念だけど島風は水上でも最速よ！条件を変えたって結果は島風の勝ちになるんだから！」

島風は一転して再び嘲るような口調に戻り、天津風を笑った。自分が負けるという状況は、全く考えていないようだ。天津風は右手の白手袋を外し、島風の足元へ投げつけた。

「なんのつもり？」

「決闘よ！私と貴女でどっちが速いか！それだけ豪語するからには、当然受けて立つでしょうね!？」

投げられた白手袋はしばしの間を置いて拾われ、島風はこの申込を受けるという意志を示した。その顔には彼女らしい大胆不敵な笑みが浮かんでいる。

「面白いじゃない！そこまでして見せるからには、島風についてくるくらいのことはできるんでしょう？じゃあ島風を超えて見せてよ！どうせ私には誰も追いつけないけどね！」

「見てなさい！絶対に貴女に勝ってみせるんだから！」

かくして二人の対決は、天津風の宣戦布告によって始まりを迎えることとなった。二人の最速をかけた対決は、艦娘達の間でも話題を呼び、結果多くの観衆の見守る中で執り行われることになる。準備期間を置いた数日後、二人の決戦の火蓋が切られた。

## 速さは、自由か孤独か。 5

その日の鎮守府は、異様な熱気に包まれていた。普段殺風景な鎮守府内のグラウンドには、間宮や鳳翔、その他艦娘から有志を募って開かれた露店が並び、中央には多くの艦娘達が同時に島風と天津風の競争を見届けることができるよう、超大型のモニターが設置されていた。このモニターは少佐の希望によって工作艦である明石と夕張に急ピッチで作られたものだ。実は二人の対決が決まった後、準備期間が必要であったのはこのモニターの準備に時間がかかっていたという事情もあるのだった。

「提督、天津風の艤装の最終点検、異常なしです。何分急な処置だったので突貫工事ではありますが、規定のコースを全速力で駆け抜けるくらいは可能であるとの明石からのお墨付きですよ」

早速艦娘達に混じって露店の食べ物食い漁る少佐を捕まえた夕張が報告する。当然処置とは機関部強化の事である。これまで本式缶とタービンの追加装備によって速力を上げる試みと言うのは研究されていたが、他の装備の枠を奪う形になり相対的に火力が下がるため、実用化には至っていなかった。いや、むしろ実戦での必要性が低かったというべきか。

「うむ、ご苦労。君も食べ給えよ、絶品だぞこの焼きそばと言うのは！」

「頂きます。あちらで龍驤がたこ焼きを焼いてますから、そちらも食べに行つてあげてください」

「たこ焼きだと？そいつはいいな、食欲を唆る！」

提督はまるで本来の目的を忘れたからのように露店巡りに精を出している。本当に変わり者な提督だと、夕張は思う。狂気的な一面を見せたかと思えば気の良い人でもある。それに、どこか違和感があるような。

「・・・さあ皆様！会場中央のモニターにご注目ください！間もなく時刻は〇九五〇！この後一〇〇〇を待ちまして、当鎮守府最速を賭けた決戦が幕を開けます！」

会場にけたたましい口上が響いた。マイクを握るのは霧島である。「提督、もうすぐ始まりますので移動をお願い致します。席をご用意していますから」

「ん、わかった。ああそうだ夕張、手の空いているものにフランクフルトにチョコバナナ、りんご飴に綿菓子と・・・あと焼きそばをもう一皿持ってきてさせてくれるかね?」

「わかりました、持つて行かせますから急いで下さい!」

「さて、スタートまでもうすぐですけど? 一体どんな仕掛けを用意して来たのか教えてくれないんじゃない?」

スタート地点で待機する決闘者の片方が、もう片方に投げかけた。無論彼女はどのような策を講じられようがどうこうするような性格ではない。自らの優位性、絶対的な速さを信条としている彼女には、対抗策など不要、ただ置き去るのみ。それを聞いたのは単純に相手がどのような悪あがきを見せるのかという興味からだっただろう。

「お生憎様。手札は勝負のその時まで晒さない主義なの」

天津風はそっけなく答えた。勝負のスタートに向けて意識を高めていく。いくら機関部が強化されているとは言え、敵はあの島風。高速での艀装の運用に置いては圧倒的に島風のほうが器用なのだから、油断はできない。ちよつとしたカーブでも小回りをきかせて抜き去ってくるだろうから。

「あら、慎重なのね。それとも臆病なだけ?」

島風は嘲るように笑う。

「そんな安い挑発は受けないわよ。そっちももう少し集中したらどう?」

しばしそのような言葉の応酬が続いた頃、決戦の始まりの時間が目前となる。両者ともに口少なくなり、静かにその時を待っている。

「提督、後数分でスタートです」

少佐のそばに待る大淀が彼に声をかけた。

「ああ、楽しみじゃあないか! いよいよ真の最速の艦娘が決まるとい

うわけだ！」

露店で買い集めた食べ物を貪りながら、少佐は笑う。その笑みが何に裏打ちされたものであるのか知らぬ大淀にとって、その不安をひとかけらも孕まぬ笑みはひどく危うげに見える。いや、それを知ったとて変わらないのかもしれない。彼の全てを裏付けているのは、純然たる狂気そのものであるのだから。

「その・・・始まる前にこんなことを言うものではないとは思うのですが、もし天津風が島風に勝てなかった時は、どのような処置を取られるのですか？島風のあの態度が治らなかった時は・・・」

「決まっているだろう。艦娘としての任を解く」

「ッ！提督、それは厳しすぎるのではないでしょうか？確かに彼女の奔放さは時に問題となつていますが、駆逐艦の子たちの中でもトップクラスの成績を修めているのも事実です！もつと長い目で見てあげても良いのでは・・・」

少佐は食べる手を止めることもなく答える。

「何か勘違いをしているんじゃないかね？私は罰として任を解くと言っているのではない。上官の命令に従わず強攻。いいじゃないか。自らの力に酔い、その速さで単身敵陣に切り込み、傲りが故に果てる。きつと幾多多数多の戦士がそうして死んでいったのだろう。彼らにとつて戦乱とはそうであつたはずだ。鬭争とはそうであつたはずだ。だが私には、そんな鬭争は御免だね。ただ死ぬのは真つ平御免だ。かつて私達はただ一つの戦場を得るために半世紀をかけて築き上げ、ただ一瞬の死を得るために何もかもを投げ打つた。その先にあつたのは甘美なる勝利だ。私達が死ぬに足る勝利だ。そうして世界すらも越えて、今ここに立っている。次なる勝利のためにここに立っている！」

また始まってしまった、と大淀は思う。この提督の異質な価値観が、度し難い狂気が溢れ出てくる。任務娘として提督の下で働くことに慣れてきたとは思っていたが、この狂気には未だに慣れることがない。

「傲慢が故に倒れるなんて、まるで化物じゃあないか。そんな死に方

をさせてたまるものか。かつて私に付き従った最後の大隊は最早存在しないが、今の私には君たちがいる。私を提督と仰ぐ艦娘諸君がいる！ならば君たちを連れて行こう。真に君たちが生きるに足る戦場へと！ならばこそ死んでもらっては困るのだ。私が私であるために。私が私である故に！」

少佐の狂気に呼応したかのように、歓声が沸き起こる。気が付かぬうちに競争が始まったようだ。

「肩の力を抜いて勝負を鑑賞し給えよ、大淀。君が泣こうが喚こうが、彼女はもう駆け出しているぞ！」

スタートコールとともに飛び出して数十秒。天津風は快調に速度をあげていく。艦装の調子は好調だ。島風の位置は、わずかに後方。ちらと振り返ると、島風がその顔に少しの驚嘆の表情を浮かべているのが見える。

「ちよつと貴女を侮りすぎてたみたいね！なかなか速いじゃない！……でもそれじゃ最速じゃないよ！」

安心したのも束の間、流石は最速を自負する彼女というべきか。更に加速をつけた島風は先行する天津風に追いついて見せ、お返しと言わんばかりに天津風を追い抜いた。練度の差か、島風の方がトップスピードに至るまでの時間が早い。艦装の改装を施してくれた明石と夕張によれば、スペック的にトップスピードは天津風のほうが高くなっているはずだと言っていた。こちらも加速したいところだが、正直に行つてその加速に耐えうる技術を持ち合わせていないのだ。無理に加速すれば最悪転倒の危険性がある。転倒すれば間違いなく致命的な遅れを生むだろう。

ふと視線を空へ移す。二人の進路の先には低空で飛行する偵察機、『彩雲』がいる。彩雲は前方の島の外周をなぞるように旋回しながらスモークを吐き出した。あの彩雲はこの競争における水先案内人だ。当然ながらこの広い海にコースを示す浮標を全て敷設しようと思うとそれ相応の時間がかかる。その代わりに、あの彩雲が規定のコースを飛行し、二人にコースを伝える役割を担っている。

「旋回速度は島風の方が速い……！直線が続くうちに加速すべきかしら……!?!」

「ほらほら、迷ってる暇はないわよ！」

采配に迷う天津風を尻目に島風は更に加速をかけて差を広げようとす。

「くっ……！確かに迷ってたら勝ち目はないわね！」

島風を追って天津風も加速を開始した。ほんの少し離されかけていた差はなくなり、再び二人は横並びで進んでいく。競争の最初の曲道へ、両者はほぼ同時に突入していった。

## 速さは、自由か孤独か。 6

島の周りを一周しようとする二人はほぼ同時に曲がり始める。が、やはり高速航行の経験がない天津風は大回りにならざるを得ない。それに対して島風は器用に加速と減速を使い分け、ある程度の速度を保ったまま最低限のロスで回っていく。ちらりと振り返ってこちらに見せる余裕綽々の笑みが憎たらしい。

「私に勝とうと速度を上げてきたみたいだけど、ただの頭でつかちなんじゃない？ 島風が速いのは最高速度の上限だけの話じゃないの！ その速さを活かしかれる力があるからこそその島風なの！」

「ぐっ……言つてなさい！ すぐに追いついて見せるわ！」

差を開けられながらも、なんとか食らいついていく。島風に有利な状況での勝負であるとはいえ、天津風も本土での訓練では優秀な成績を修めてこの鎮守府にやってきたのだ。島風までとは行かずとも、彼女もまたプライドの高い艦娘である。簡単に負けるのは自尊心が許さない。

やがて島を回りきり、再び直線路に戻る頃にはそこそこの差が二人に生まれていた。しかし慌てることはない。ここからしばらくは直線のルートが続く。十分に巻き返すことが可能だ。問題は中盤にカーブを多用する環礁群があること。曲線での競争で島風に勝つことは、とてもではないが叶いそうにない。直線が続くうちにこの差を巻き返し、出来る限りのリードを作っておきたいところである。

「やはり速いですね、彼女は。わかっていたとは言え実際にこのような勝負を見ると改めて思い知らされます」

大淀がモニターの中で駆ける島風を見て言った。島風の速さは勿論わかっていたことだが、これまでその速さを越えようとしたことなどなかったため、こうして見せられると、彼女は実に速い。

「しかし彼女の機動性を活かした戦い方というのも割りかしなしではないのかもしれませんが。現状では彼女の速力についていけない艦がないことが問題とと思っていましたが、機関部強化と旋回等の機動の訓



練を組み合わせればものになるかも。教官達と話し合ってみましようか」

「ようやく落ち着いたかね？先程から顔を赤くしたり青くしたりしていたようだが」

一体誰のせいだ、と言いたげな大淀だが、流石に口には出さず飲み込んだ。今に始まったことではない。

「君もここについていなくていいから、明石でも連れて屋台を回ってきたまえよ。今回のセッティングのために働き通しだろう？」

「よろしいのですか？別に屋台なら今日一日置いてありますからこの勝負が終わってからでもいいですけど」

「構わん、そのかわり龍驤のたこ焼きを買ってきてくれ。三人前だ」

ブレない提督の頼みを承諾し、屋台を回ることにする。まずは言われた通りに明石を探して歩く。彼女もここしばらく休日返上で働き詰めのはずだ。最も彼女や夕張は機械や艀装をいじっている分には仕事を趣味のように思っている節があるので、特に気にしていないのかもしれないが。だからといって休みを与えないのは所謂『ブラック鎮守府』になってしまうので、半強制的に休暇を取ってもらうことにはしている。それが本人たちには逆に不評なのが困りどころだが。

人をかき分けながら数分歩くと、案の定レンチを握りしめてモニターを凝視する明石を見つけた。大方更に二人の艀装を高速化するための改修でも考えているのだろう。隣に立つてもまだ気が付かないようなので肩を揺すった。

「ちよつと・・・にやけながらレンチなんて持ってたら控えめに言つて変態みたいだからやめなさい。さつきから駆逐艦の子たちが気味悪がってるわよ」

「へ？ああ、大淀じゃないの。提督についてなくていいの？・・・てか変態はひどいわ。せめて変人にしてほしいんだけど」

対して変わらないと思うのだが・・・。彼女なりの基準があるのだろう。人には他人に理解できない領分があるというものだ。

「その提督からののはからいでね。ここのところ働き詰めだから明石と

屋台でも回ってこいって言われたの。どうぞずっとここで妄想してたんでしょ？」

「だから妄想じゃないっての。大体そうやって艀装とか装備の改修を考えるのも私の仕事なんだからね！・・・ま、いいわ。せっかくだしまわなきや損よね」

「そうそう。実は間宮さんの屋台で出してる限定のパフェ、食べたかったのよね。お仕事終わってからじゃ絶対なくなってると思ってたから良かった！行きましよう！」

流石に間宮の店は他に頭一つ抜けて繁盛しており、少し並ぶことになったが、無事にパフェを手に入れることが出来た。本来食べることが叶わなかったものと思うと期待は格別だ。屋台の近くに配置されたテーブルに空きを探していると、少し意外な人物を見つけた。

「あら？龍驤さん、屋台を出しているんじゃないんですか？」

「ん？大淀と明石か。ちよつと休憩中やねん」

龍驤が大きなパフェをつついていた。ちよつと龍驤の対面の二席が空いているので一言許可を取って座る。

「本当は黒潮と二人で一日屋台に付きっ切りの予定やったんやけどね。なんや時雨が僕も手伝いたいって言うて来てくれてな。今は二人に店を任せるとこ。時雨のお陰で交代で休憩取れるようになったからこうして間宮の限定メニューを試しに来たって訳や。本日限定なんて言われたら、食べん訳にはいかんやろ！」

龍驤は満面の笑みで言った。実際その通りなので二人は深く頷く。腰を落ち着けたところで二人は待ちかねたパフェに手を伸ばした。贅沢に、少し多めに掬って口に運ぶ。

「っ！美味しいー！さすが間宮さんの限定メニューね！」

口の中に甘みが広がる。とても上品な甘さで、これなら飽きることなくいつまでも食べ続けられそうだ。これ一つで連日の仕事疲れも何処かへ飛んでいってしまう。たまらず二口、三口と口にするが、どんどん食べるペースが上がってしまいそうだ。

「で、どうなん？二人の競争は？うちあんまり見れてないんよ」

「あ、確かに朝から準備で忙しそうでしたしね。今のところは島風がほんの少しリードしているって感じですよ。と言つてもこつちに来る前に見た限りですけど」

実はこのようにモニターを見ていられない艦娘のために実況を置くという案もあつたのだが、実況を強く希望していた霧島が姉妹艦達によつて自粛を嘆願をされたため、競争中の実況はされていない。自粛を求められた理由は・・・察して知るべし、である。

「安心してください。天津風の艦装は島風にも負けないレベルまで上げた自身があります。と言つても島風の艦装の調整も手は抜いていませんから、後は本人たち次第ではありませんが」

「そうか。それならどつちに転んでもそう悪いことにはならんやろ。天津風が勝つてくれるならそれでよし。島風が勝つたとしても、初めてのほぼ対等な相手との勝負で何か感じてくれるやろうと信じたい」  
龍驤はそう言つて大分減つてきたパフエを掻き込んだ。

「勝てるよ、いいですね」

大淀が呟くように言った。提督の前では落ち着いた様子を見せたが、内心まだ心配だ。提督の言い分は、おかしな思想が混じっていることを除けば最もなものだ。慢心して、命を落とせば終わり。でも、だからといって彼女から、島風から艦装を取り上げればどうなるだろう。それは彼女の誇りであつたはずだし、何より心の拠り所であつたはずだ。もし島風を艦娘の任から解くとなれば大本営とのやり取りが必須になる。そしてそれを執り行うのは、任務艦である自分だ。それを行わなくてはならなくなった時、私はできるだろうか・・・？

「まあ、何にせよ」

空になつたパフエのグラスに落ちたスプーンが、カランと音を立てる。

「無事に帰つてきてくれるのが一番やね」

「大丈夫ですよ。この明石の調整した艦装を信じてください！」

「・・・そうやね！うちももうちよつと休憩時間あるし、二人の競争を見に行つてみるかな！」

## 速さは、自由か孤独か。 7

大淀が明石と露店を回っている裏で、少佐のもとには長門が訪れていた。大淀と交代で提督の補佐に入った形だ。実質的なパシラれ役とも言えるが。

「どの料理も量が充実していていいな！しかしこれだけの量を露店で提供するは大変ではないかね？」

「元々私達戦艦や空母は戦闘での体力消耗が激しい分食事も多いからな。これぐらいは普通だ。料理は妖精さんがいるから回っているようなものだな」

イカ焼きを齧る少佐の横で、大盛りの焼きそばを食べる長門が答える。

「食事を楽しむのは結構だが、勝負もすっかり観戦してもらわないと困るからな？ここまで大事になってしまったんだから・・・と言うのは私が言えたことではないな、済まない」

勝負を見守る長門の心境もまた複雑だ。本来秘書艦である自分が内々に処理できていけばことはもっとスムーズに進んでいたかもしれないし、この鎮守府に来たばかりの天津風に負担をかけることはなかっただろう。自分の力足らずを長門は恥じていた。

「いいや、ここまで来てしまったからこそそんなことは関係ないね。今彼女達を突き動かしているものは意地だ。負けず嫌いで意地っ張りなお嬢さん方は意地がために駆けている。外野が勝手に目的を付け加えるなど無粋なものだ。負けたくない。勝ちたい。目の前の宿敵を打ち倒したい。闘争に必要なのはそうしたシンプルな目的だけで十分だよ」

そういう少佐の言葉もあながち間違いではなく、天津風は島風を最速より引きずり降ろさんと必死で駆ける。ただの艦だった頃、島風に新型高温高压缶のデータを渡したのは天津風だ。つまり、私こそが先輩なのだ、という思いが天津風の中にはあった。故に意地っ張りな彼女は、同じく意地っ張りな最速への敗北は認めない。

既に勝負は折り返しをすぎる頃だ。カーブを多用する環礁群を抜け、直線で天津風が稼いだリードは最早ない。此処から先再び優勢に立てるかと言われれば、怪しい。

「だんだん集中力が続かなくなってきたんじゃない？諦めたらどう？」

わずか後ろを追う島風が言う。

「うっさいーまだ私のほうがちよつと勝ってるでしょ!?大口叩くのは速いんじゃないの!？」

すかさず言い返したものの、島風の言葉は凶星をついていた。なれない速度での長時間航行はいつも以上に消耗が大きい。息が上るとまでは行かずとも、気を抜けばミスを生みそうになる。この局面でのミスは命取りに近いのだ。もう一度、集中力を高めよと自分に言い聞かせる。

「残念だけど、次のカーブで追い抜いてあげる。それで勝負は決まりね。集中力を欠いた貴女なんて相手にならないわ」

二人を誘導する彩雲が曲線を描き始める。悔しいが、島風の言うとおりあのカーブで抜き去られれば、勝負は大きく島風に傾くだろう。それだけは避けなければならない。

「それなら抜かせないままでよ！負けてたまるもんか！」

二人は一心不乱に疾走る。その異変に気が付かず。

その異変に最初に気がついたのは、先導機の彩雲に登場する妖精さんだった。何かに気がついた妖精さんは旋回を取りやめ、鎮守府への最短ルートを取って飛行を始めた。眼下で困惑しているであろう二人に詫びて、鎮守府へ電文を打った。

先導機の彩雲が規定のコースと違うコースを飛行し始めたことに気がついた者は、モニターの前で首を傾げていたが、その中を駆け抜けて大淀が少佐の元へ転がり込むように戻ってきた。その鬼気迫る表情に、長門は麵を啜えたまま何事かと固まっている。

「提督ッ……！敵機襲来です！敵航空機編隊が島風、天津風に接近中

！」

「何!?馬鹿な!鎮守府正面海域だぞ!?なぜ敵機がここまで来ている!?!」

敵機来襲。その方に会場にどよめきが走る。この勝負にあたってコースは鎮守府正面海域で制海権が確保されたエリアで行われていたはずだった。普段であれば駆逐艦一隻でも対応できるほどの敵戦力が時たま現れる程度の。

「既に先導機の妖精さんの判断でこちらへ引き返し始めています!このまま引き返すように二人に伝えて構いませんね?」

「無論だ。彼女達の撤退を支援する艦隊を編成し、出撃させる。直ちに出撃できるものを選出し給え。私への確認は不要。但し高速艦を優先して編成だ。長門秘書艦、存在が予想される敵戦力への威力偵察が可能な艦隊を編成する。君が指揮を取り、可及的速やかに敵を捕捉せよ。以上だ」

「了解しました!」

「了解!」

二人は命令に頷くと、すぐに行動を開始する。動揺が走る鎮守府の中で、少佐は静かに笑みを湛えてモニターを見る。

「ああ、楽しくなってきた。実に素敵だ。さあ、私と戦争を始めよう、島風」

「敵機つて、ここは制空権が確保されてる海域じゃないの!?なんでこんなところまで来てるのよ!」

鎮守府への撤退を目指して舵を取った二人だが、天津風は困惑を隠せない様子だ。

「そんなこと言っても仕方ないでしょ!さっさと逃げるよ!」

「意外ね。貴女なら自分だけで敵を倒してやるってくらいいいようなものだと思っただけ?」

半ば皮肉のような言葉だが、実際素直に撤退命令を聞き入れた島風を意外に思っただけの言葉だった。一瞬むっとした顔で後に続く天津風を見た島風だったが、その意を汲み取ったのか少しため息をついて

言った。

「万全の状態ならそうも言えるけど、今は最低限の武装しか持ってないから。流石に反撃は出来ないし、悔しいけど逃げるしかないでしょ」

「ううん・・・その通りなんだけど貴女に言われるとなんだかね・・・」  
とは言ったものの、確かに現状最低限の装備しかないことは事実である。それは追加兵装のキャパシティを全て機関部強化に割いている天津風も同様で、更に言えば、慣れない速度での戦闘や疲労を鑑みれば最低限以下のコンディションであると言わざるを得ないのだ。

「問題はお迎えの艦隊と合流するまでにどうしても多少の時間がかかる事ね。既に戦闘機隊が上がってるとしても十数分はこのまま攻撃を躲さないといけない。もう敵機も追いついてくる。とにかく行けるとこまでいくよー!」

こうしている間にも敵航空機隊は迫ってきているのだ。いつ攻撃が始まってもおおかしくない。そう思うと手に汗が滲んでくるのがわかる。凶らずも天津風の実戦はこれが初めてだ。

「あーもう、最悪の初陣になっちゃったわね・・・」

「後悔するなら帰ってからにして!敵機の攻撃がくる!」

敵の攻撃機が低空でこちらへと飛来してくる。対空砲で対応するが、うまく砲火をすり抜けた機が魚雷を放った。回避行動を取ったところに、見計らったようにして艦爆が飛び込んでくる。

「攻撃が激しい・・・!」

襲い掛かってくる艦爆を撃ち落とすが、最後のあがきとばかりに爆弾を投下してきた。回避すべく更に舵を取ろうとするが。

「まずッ・・・!バランスが・・・!」

慣れない機動のつけが回ってきたか、加速する足元に体が追いつかず、後ろに倒れ込むような形でバランスを崩してしまう。炎上し、落ちてくる敵の艦爆が、にやりと笑みを浮かべたような気がした。

「だから無理して私についてくる事なかったのに。こんなところで死んでもらったら目覚めが悪いじゃない」

間一髪、高速で接近してきた島風が天津風の腕をつかみ、その勢い

のまま前方方向へ投げ飛ばした。今度は逆に前につんのめるな姿勢で倒れそうになるが、なんとかバランスを取り戻した。爆音とともに巻き上げられた海水が降り注ぐ。

「ちよつと強引だったけど、助かったわ・・・!?」

降りしきる雨の中で、背中から黒煙を吐く島風が彼女には似つかわしくない速度でこちらへやってくる。

「こんな時に集中力を切らさないで。迷惑だから」

「ちよつと、被弾したの!?!損傷は!?!」

「墜落してくる敵機が直撃しただけ。機関部がやられた。速力が上がらないわ」

周辺から敵機が離れたのを確認し、島風の様子を見る。傷事態は大したものではないが、当たりどころが悪く速力が上がらないようだ。

「ごめんなさい・・・!私を庇ったからよね・・・」

「本当、その通りなんだけど・・・。これじゃ離脱は厳しいみたいね」  
ほぼ兵装もなく、島風の速力も出ないこの状況では、絶望的と言っても過言ではない。最早万事休すか。

少し考えた後、天津風は島風に手を差し出した。

「・・・何?」

「貴女が他人と協力するのが苦手なのは知ってる。でも、お願い。私にその最速の力を貸して欲しい」

島風は差し伸べられた手を見、天津風の顔を見た。真っ直ぐな視線が向けられている。

「・・・貸すだけよ。最速は島風なんだから」

二人の小さな手が、繋がれた。



## 速さは、自由か孤独か。 8

天津風は差し出された島風の手をぎゅっと握りしめ、当たりを見回した。ひとまず敵の航空機部隊は撃退したが、第二波がすぐにでもやって来るだろう。急いでここから離れなくてはならない。

「よし・・・！舵取りは任せたわよ、島風え！」

「おうっ!？」

天津風がぐん、と加速する。それに引つ張られる形の島風は驚きを隠せなかった。これは、すごい加速だ。駆逐艦とはいえ、艦装を装備している自分を曳航しながらどんと速度を増していく。仮に、天津風がこのスペックを全て使いこなせていたならば、自分よりも速かったかもしれないと思わざるを得ないほどに。

「・・・すっごい速さだけど、攻撃を避けたりは出来るの？」

「舵取りは任せたって言ったじゃない」

天津風は振り向きもせず言った。おそろくその余裕すらないのだろう。転ばないように、ただひたすら速度を出すことだけに集中している。さすがの島風も返答に困ったように口を開けている。

「自分の艦装で動いてる時と他人に引つ張られてる時じゃ全然状況が違うでしょ!?!なんで出来ると思ったの!?!バカなの!?!」

「うるさいわね！やってみなきゃわかんないでしょ!?!大体力貸してくれるって言ったじゃないの!！」

「もうちよつとまともなお願いだと思ったわよ・・・。もう、これなら私が敵をひきつけてたほうがまだマシだったわ・・・」

島風が呆れたようにため息をついた。天津風は何も答えず、ただ手をにぎる力が一層強くなる。それは少し痛いほどで、島風はわずかに顔を歪ませる。

「ちよつと、痛いんだけど」

「あんだ、本当にそれで良かったと思ってんの？」

「・・・何が」

「本当にあそこに一人残って、ろくに動けないのに敵をひきつけて、沈んでりゃ良かったって思ってるのかって言うってんのよ」

怒りを孕んだ言葉に、島風は言葉を詰まらせた。それが最も合理的な判断だ。共倒れするよりもずつとマシ。一人でさつさと逃げればいい。そういつてやりたいのに、言葉が出ない。

「あんた最速なんですよ？誰にも負けないんですよ？そのあんたが、自慢の速さも失って、守ってくれる仲間もいなくて、そんな孤独の中で沈むなんて……」

返す言葉が出ない。握られた手が痛い。

「そんなの……悲しすぎるじゃないッ……！」

そんなこと言っただって、どうしようもないことだつてある。無理矢理に言葉を絞り出して、口を開く。

「だからってッ……！このままじゃ貴女まで一緒に死ぬだけじゃない！こんなことしなくたって、島風を置いていけば貴女だけは助かるんだから……！」

「そんな寝覚めの悪い事してたまるか！」

分からず屋め。天津風にも聞こえていないはずはないのだ、この遠くから近づいてくる敵機の音が。早くしないと間に合わない。

「あーもう！いい!?今から私があんたを最速にしてあげる！だから、誰にも負けない最速の島風を私に見せてみなさいよ！そうして生きて帰ったら、私があんたが最速の艦娘だって認めてあげるわよ！だから気張んなさいな！」

それでも彼女は手を離そうとはしない。ああ、もう、なんて。

「……なんて貴女って、生意気なの」

「あんなだけには言われたくないわ。で、どうすんのよ」

「……だめ。島風が力を貸して最速になったつて、本当に最速なのは貴女の方になるじゃない」

「なっ……！この期に及んで……！」

「だから、交換条件よ。貴女に島風の力を貸してあげる。その代わり、貴女の力を島風に貸しなさい。それで、対等。どう？」

島風の意地に、今度は天津風がため息を付く番だった。だが同時に、安心もする。島風には生意気で意地っ張りな、そんな性格がお似合いだ。

「はあ、しょうがないわね。私の力をあんたに貸してあげるわ。・・・頼りにしてるから。『最速』の島風を」

「取引成立ね。じゃ、貴女の力を使い倒してあげる。・・・『最速』の、天津風」

「提督、二人の撤退を支援する高速艦隊及び空母を主軸にした、敵戦力への威力偵察艦隊、両艦隊の出撃が終了しました」

「うむ、ぐっ苦勞」

先程まで熱気に湧いていたグラウンドは、露店の片付けもされず静かに横たわっている。皆万が一の事態に備えて待機しているからだ。少佐と大淀も執務室に戻り、吉報を待っている。二十分もすれば報告が上がってくるだろう。大淀は少なからずこの状況に責任を感じていた。たらい回しのようにして多くの艦娘を巻き込んだ今回の一件は、ほぼ大淀が発端に当たるのだ。こうした時に、自ら出撃することが出来ないことをもどかしく思う。

「しかし前回といい、今回といい、正面海域というのはこうも敵航空戦力が展開するものなのかね？」

「前回金剛さんを旗艦に出撃した海域は正面海域の中でも外側に当たるので、不思議はありません。ただ、今回は少し異様です。敵航空機の出現位置が鎮守府に近すぎます」

少佐は一瞬黙り込み、すぐに口を開いた。

「これは偶発的な戦闘だと思うかね？」

「・・・現段階では判断しかねます。が、もし偵察に出た艦隊が空母打撃群と交戦するようなことがあれば、鎮守府近海において敵拠点が設営されている可能性もあると考えられるかと」

「敵拠点か。しかしそのような大規模な行動を察知することはできなかったのかね？何らかの前兆はありそうなものだが」

「も、申し訳ありません。今回は深海棲艦のそのような動きは察知できておらず・・・」

「ああ、構わん構わん。メインディッシュは後に取っておこうじゃないか。私は大飯食らいなんだ」

天津風が島風を引つ張りながら駆けつけて十数分が経ったかと言う頃。島風は額に滲ませた汗も拭わず、首を回して後ろを見る。大空に幾つかの黒点が見える。注視するまでもなく、こちらを追撃してくる敵航空機の編隊だとわかる。夏の夜につきまとってくる蚊のように鬱陶しい連中だ。さつきから何度も追い払っているのにしつこく攻撃を仕掛けてくる。対空砲火を放つても、慣れない体勢のためか思ったように弾が飛んでくれない。

「もう！さつきからしつこーい!!」

「これは、かなりキツイわね……!いい加減諦めてくれないかしら……!?!」

慣れない速度に、島風を曳航しながらの移動と無茶を重ねた天津風はかなり疲労している様子だった。無理に稼働させ続けた機関部は今にも悲鳴を上げそうで、天津風の体力的にも、機関の耐久度的にも、最早どれほど持つかかわからない。何れにせよ、天津風が動けなくなってしまうば、万事休す。こちらに向かつてきているであろう鎮守府からのお迎えとは後どれほどで合流出来るのだろうか。

一秒ごとに募る焦燥感を嘲笑っているかのように、敵機は後方で悠々と旋回して見せた。

「魚雷が来る！緊急回避、いくよ！」

「っ……!やんなさい！」

島風は天津風の右腕を掴んだまま体重を後ろにかける。同時に、わずかながら動いていた自らの機装の駆動を駆使し、横滑りするようになり右へ。天津風も引きずられるようにスライドしていく。敵の魚雷は間一髪のところまで二人の左を疾走っていった。

「っ痛っっ……!」

天津風がうめき声を上げた。ただ引つ張っているだけでも疲労が溜まっているのに、今のような緊急回避を多用したために、肩が痛みを訴えている。

「肩は大丈夫!?!」

「全然平気、と言いたいけど……、ちよつときついわ。次は行けない

かもね・・・！」

もう全身がガタガタで、言うことを聞かなくなり始めている。まだ、友軍艦隊は見えないのか。早く、速く。

「——見えた！前方に航空機！鎮守府の艦戦よ！」

島風が叫んだ。焦点がぶれ始めた目を瞬かせ、空を見ると、確かに見慣れた艦戦がこちらへ近づいている。助かった。あとほんの数秒も時間を稼げば、こちらのものだ。

「や、やった！あー助かったわ！どうよ島風！最速のクルージングを終えた気分は!？」

「・・・なかなか、良い物だったんじゃない？ま、次は島風一人でもこれくらい、い・・・？」

島風の顔に、一瞬影が差した。表情の変化ではない、本当の意味で、だ。反射的に上を向くと、太陽を背にした機体がこちらへ急降下してくる。

「敵の、艦爆・・・!?!まさか、この期に及んで・・・!?!」

島風の思考が加速し、時間がゆつくりと流れるような錯覚に陥る。緊急回避？駄目だ、ここまで接近されていては間に合わない。対空砲で撃ち落とす？でも、さっきまで当たらなかったものが都合よく当たってくれるの？そうだ、今こそ、この手を離せば。

「島風、先に謝つとくわ。ごめんなさい」

天津風の言葉が、思考を途切れさせた。ごめんなさい？・・・ああ、手を離すことを、か。

「でも、一瞬だけ、あんたを本当に最速にしてあげるから。・・・許してよ、ねえええええええええええっ!!」

「おおおおおううううううううあああああああああああ!?!」

島風は、唐突すぎる出来事に刹那頭が真っ白になり、しかしすぐに、その速い思考で状況を理解した。天津風に、思いつきり放り投げられたのだ。ただでさえ、いつもの自分の最高速度以上の速さで突き進んでいたのに合わせて、艦娘の力で投げられたことにより、島風は凄まじい速度で水面を転がり、水面を跳ね、突き進んだ。水中を見ても、青。空を見ても、青。転がっているうちにどちらが上で、どちらが下

なのかわからなくなる。やがて、爆音が聞こえた後、島風は何者かに抱き上げられた。

「島風、無事捕まえました、お姉様！」

「霧島、nice catchネー！」

「あ……、金剛さん……霧島さん……？」

「助けに来ましたヨー！……よく、頑張りましたネー」

鎮守府からの救援だ。助かった。……いや、天津風はどうなった？ さっきの爆音は、敵の艦爆の積んでいた爆弾のものだろう。実際、それで巻き上げられた海水が雨のように降り注いでいる。嫌な想像が、脳裏をよぎる。まさか、避けられなかった？

「そんな、天津風は……？」

「安心せえ、無事やで。派手にすっ転んで気い失つとるけどな」

龍驤が、天津風を肩で支えてやってきた。その言葉どおり、天津風に大きな怪我はないようだ。よかった、と思った途端に、自分も意識が薄れていく。緊張の糸が切れたのか、何も考える間もなく、島風は眠りに落ちた。

「あら、二人とも寝ちゃいましたね」

「あれだけ頑張った後なんやから、寝かしといたろ。霧島、島風をおぶっててもらってええかな？」

「ええ、畏まりました」

「……おおい！ 島風え！ 天津風え！ 無事か!? 吾輩が不甲斐ないばかりにこんなことい……って、二人とも眠っておるのか？」

少し遅れて、利根がやってきた。大声で喚いている利根に、龍驤は口元で人差し指を立ててみせた。

「遅いで、利根！ 罰としてこいつらの艦装を持って帰ってくことな！」  
「んなっ!? お主が辺りに伏兵がおらぬか警戒しろというから周りを哨戒しておったのではないか！ 横暴じゃ！」

そんなやり取りをしながら、艦隊は二人を抱えて帰路につく。結局島風と天津風の艦装は利根が持たされることとなり、島風を霧島が、

天津風を龍驤が背負って言った。背中で静かに寝息を立てる天津風に、龍驤は静かに言った。  
「天津風、ありがとうな」

## 速さは、自由か孤独か。 9

「んんー！疲れたのう！いやあ、ほんと色々あったもんじゃー！」

夜の居酒屋『鳳翔』は、いつもに増して盛況を見せている。騒動巻き起こった今日の一日も、終わってみればまさに祭りの後のようであちらこちらでほろ酔いの艦娘達の歓談の声が聞こえてくる。対面に座る利根も上機嫌で杯を傾けていた。

「色々あったもんじゃー、やないで。あんたなあ、結局何もしとらんやないか！」

龍驤もまた、ほんのりと顔を赤らめて利根に絡む。結局島風と天津風はその艤装に大きな損傷を受けたものの、命に関わるような怪我はなく、無事に帰還することが出来た。今頃は医務室で眠っているだろう。利根が不満を叫びながら持ち帰った二人の艤装は、陸に上るとすぐに明石と夕張の手によって工廠へ持ち去られた。あの二人が艤装に何をしているかはよくわからないが、きつとより高性能な艤装となつて島風と天津風の元に戻るのだろうか。

「本当に天津風には苦勞をかけたのう。無事で帰ってくれてよかったのじゃ」

「ほんまやな。後は、上手いこと島風と付き合つてつてくれると助かるんやけど、まあ今言うことでもないか」

実際、龍驤はあまりそのあたりの心配はしていなかった。島風だけの世界であつた『最速』に足を踏み入れた天津風は、きつと良き理解者として、良き友としてあり続けるだろう。

「・・・実際うちらだけじゃどうにもならんかった訳やし、天津風には礼を返さんとあかんなあ。何がええんやろ」

「そうじゃのう・・・。では間宮の食事券はどうじゃ？なんだかんだこれが一番嬉しいじゃろ」

「やっぱそれが一番なんかなあ。ちよつと上と掛け合つてみるわ」

皿に山と積まれた枝豆を一つ取つて口に放り込む。ちらと壁掛け時計に目をやると、時刻は既に八時を回りつつある。

「すまん、ちよつと席外すで」



「んあ、わかった」

よっこいしょ、と腰を上げ、出入り口の方へ向かう。

「……待つのはじゃ、龍驤」

「……なんや？」

利根が神妙な面持ちで龍驤を呼び止めた。二人の間に沈黙が横たわる。数秒の無言の後に、利根が口を開いた。

「……この唐揚げの最後の一個、吾輩が食べてもよいか？」

「なんやねん！んなもん勝手に食えや！」

本当に勝手に食べたなら怒るじゃろうに、と言いつつご満悦な様子で唐揚げを頬張った利根に呆れつつ、今度こそ店を出た。

外は満天に輝く星空と、ただ真つ暗な海がいつものように広がっていた。店の前に置かれたベンチに腰を下ろし、ポケットを弄って、煙草を取り出した。ライターを探しているうちに、居酒屋の扉がガラガラと開く音が聞こえた。

「龍驤さん、お待たせしました」

「別に待ってへんよ。繁盛しとるとこ呼び出してすまん、鳳翔」

龍驤はそのまま煙草をポケットに戻し、鳳翔に隣を進めた。

「で、今回の一件やけど、鳳翔的にはどう思う？」

「あらあら、私は既に戦闘行動から落伍した身ですよ。龍驤さんのほうがずっと詳しいのではないですか？」

「ようゆうなあ。確かに艤装の性能的に一線で活躍するのは難しいかも知れんけど、練度は今でも赤城や加賀以上のもんやろ」

謙遜する鳳翔だが、龍驤の言うとおり彼女の練度はこの鎮守府内でも有数のものだ。その練度は、この鎮守府にいる艦娘の中でも最古参に当たる経歴の証であり、現在は出撃することは少ないものの、多くの艦娘の相談を受けたり、身の回りの世話をしたりと、母のように慕われている。その人望は、この鎮守府の艦娘一と言っても過言ではない。

「そうですね……。状況からして、近海に敵拠点の設営が行われている可能性も高いでしょうね。情報が少ないので細かくは偵察に向かわれた艦隊の帰還を待つほかないですけど」

「・・・なあ鳳翔、せめて教官としてやってく気はないんか？島風だつて、鳳翔ならもつと簡単に説得出来てたやろうし。うちが動くよりあんたが動いたほうがずっと効率がいいはずやで」

「それは違いますよ、龍驤さん」

鳳翔が言葉を遮った。その声はあくまで優しいが、何故かとても力強く感じる。

「少なくとも私には、貴女が時雨さんを変えたようなやり方は出来ません。私の力を必要としてくださるのは嬉しいですが、貴女にしか出来ないことだつてあるんですよ」

優しく微笑む鳳翔に、龍驤は頭を掻いてみせた。

「はあ、やっぱりおかんには敵わんなあ」

「ふふ、それほどでも。でも、悩んだ時はいつだつて頼ってもらつていいですからね？」

「あいよ。近々敵泊地攻略の作戦が展開されるかも知れんからね。皆に美味しい料理を振る舞つたつてや！」

ベンチを立ち、二人は店内に戻つていく。ここ最近厄介事が続いたためか、少し弱気になっていたかもしれないと、龍驤は思った。じきに偵察に出た艦隊も戻り、近く敵戦力に対する作戦が展開されることだろう。いざその時に遅れを取らぬよう、頑張らねば、決心を新たに、利根の元へ戻つた。

だが龍驤はまだ、新たな厄介事が近づいていることを、知る由もなかったのである。それは、海軍省から送られた一つの電文であつた。その内容はこうだ。

『発：海軍省 宛：ビスマルク諸島泊地司令官 本日貴官ノ着任スル泊地ニ向ケ、監察官ヲ派遣シタ旨ヲ通達ス』

Gleich und gleich  
geht sich gern.

水平線から日がさし始める頃、鎮守府に二人の艦娘が静かに近づいていた。優雅に水面を滑る彼女らは、やがてある島の軍港へ入り、上陸を行う。そこには二人を出迎えるように、二人の艦娘と太った金髪の子が立っていた。

「やあ、お待ちしておりました、監察官殿。申し訳ないが海軍の作法には不慣れなものでしてね。先にお詫び致します」

「いえ、私達こそこのような時間にお出迎えしていただくことになりましたこと、お詫び致したく思います、提督」

海軍省からの監察官であるという二人と言葉を交わす少佐の隣に立つ長門は、提督が極めて真つ当に対応していることに少しばかり安堵していた。軍人である以上は最低限の作法を持ち合わせているだろうとは思っていたが、何しろ狂人の片鱗を見え隠れさせる提督のことであるから、何かやらかすのではないかと内心ひやひやしていたのである。

「本土からの長旅、お疲れ様でした。当鎮守府秘書艦の長門です」

「任務娘の大淀です」

長門と大淀が名乗る。

「おっと、名乗り遅れました。海軍省より監察官として派遣されました、練習巡洋艦の香取と申します」

「同じく、練習巡洋艦の鹿島です。よろしく願いますね、提督さん」

二人とも愛想はいいらしい。のっけから猜疑心に溢れた監察官ではなくて良かった、と長門が胸を撫で下ろした。大淀ならともかく、自分はいまいち腹芸には向いていない。問い詰められれば簡単に吐いてしまう自信がある。まあ、そもそも問い詰められて困ることがあるわけでもないのだが。

「立ち話も何でしょう。庁舎の方へご案内いたしましょう」

少佐が監察官の二人に移動を促し、二人もそれを承諾した。さてはて、ここからが本番であるが、一体何を突っ込まれることか。

庁舎に移動した一行は、提督の執務室近くの応接室——元々空き部屋だった部屋を急ごしらえて誂えたものだが——で、テーブルを挟んで向かい合った。大淀が紅茶を用意し、香取と鹿島が口をつけるまでしばしの沈黙が訪れる。

「提督さん、御本名はなんと仰られるのですか？」

鹿島が沈黙を破って言った。視線を横に向けると、大淀もほんの僅かに眉をしかめているように見える。きつと彼女も質問の意図を掴みかね、怪訝に思っているのだろう。対して提督本人は至って涼しい顔である。

「本名などもう長いこと名乗っておりませんからな。提督で結構。敢えて名乗るならば、以前の階級である少佐とでもお呼びいただきたいところですね」

「少佐、はつきりと申し上げます」

香取が半ば少佐の言葉を遮るかのように口を開く。すこしばかり語気も強い。

「貴方の着任に関して、正式、非正式を問わず海軍省が決定を下した事実はありません。貴方はこの鎮守府の正式な司令官ではないということ、先ずもってお伝えします」

「ちよ、ちよっと待て！」

長門が慌てて口を挟んだ。

「提督は確かに海軍省からの書類を所持していた！これは私と陸奥が確認しているから間違いない！」

長門はこの提督を迎えた時のことをはつきりと覚えているし、着任を命ずる命令書も大淀の手によって管理されているはずだ。あの命令書は間違いなく本物であった。

「…確かに、それは本物だったのかもしれませんが」

香取の返答に、長門は心の中で首をかしげた。言っていることが矛盾している。海軍省が着任を決定したのでなければ、命令書が本物であるはずがない。本物、もしくは本物と見分けがつかないほどに偽

装された命令書を用意するには結局海軍省に関わりのある人間の手で作成されなければならぬだろう。彼女の言い方では、まるで海軍省の関与がないことも、命令書が本物であることも、両方が真実であるかのようだ。

「いまいち言葉の意味がわかりませんなあ。つまり私がこの立場にあることはあなた方の仕組んだことではないということかね？」

「それどころか、こちらでは貴方の経歴すら把握していませんから」

少佐と香取の間に妙な雰囲気漂っている。舌戦にならない方がいいが、と長門が引き気味に構える中、鹿島が言葉をつなぐように香取に変わって言った。

「まあまあ、お互いに把握出来ていない事情があることですから。ここはお互いに情報を交換しあつて、認識のすり合わせをすればいいかがですか？」

「・・・私からは異存はありませんが」

「いいでしょう。ご期待に答えられる答えを持ち合わせているかは別として、ですがね」

「では、こちらから質問させていただきます。まずは貴方の以前の所属についてお願いします」

香取の質問に少佐が答えていく形で前半が始まった。長門と大淀の二人も、顔には出さないものの、その内容には興味津々だ。少佐の着任から暫く経つが、彼の経歴については未だ謎が多い。仮に質問したところで、どこまでが本当のことなのか判断が難しかったとも思うが、とにかく彼本人から答えを聞くことが出来るのだから、気を惹かれるのは必然である。

「私はドイツ第三帝国、武装親衛隊の士官。先程言った通り最終階級は少佐だった。大隊指揮官とも言うがね」

「第三帝国・・・。ナチス政権下のドイツですか」

「ほう、驚かれないのですな。第三帝国が地上に存在したのは遙か昔の1945年までのことだ。時系列が合わんとは思わんかね？」

少佐が茶化すかのようになり、ニタニタとした笑みで香取に言った。香

取はそれに対して取り合わず、手帳に何やら書き込んでいる。おそらく質問と返答を記録しているのだろう。後に海軍省に報告されるのだろうか、あまり口を挟まないほうが良さそうだ。

「我々艦娘とてかつて艦であった頃の記憶があるのです。貴方にかつてドイツ軍士官であった頃の記憶があつたとしてなんの不思議がありませんか？」

少佐への意趣返しか、香取もまた冗談めかした口ぶりで言葉を返した。やはりお互いに笑みを浮かべてはいるが、なぜだか近寄りがたい雰囲気拭えない。長門は腹の探り合いは苦手であつた。

「私達が後ほどご説明させていただきますが、貴方のようなケースは初めてではないということですよ。提督さん」

鹿島がすかさず説明を入れた。基本的に話を進めているのは香取だが、要所所で鹿島が口を挟んでいるところをみると、彼女が参謀役なのだろうか。

「なるほど。いやあ、失礼致しました、監察官殿。私の想像以上に、貴方は情報をお持ちのようだ」

「いえいえ、よろしければ所属をより詳しく教えてくださると助かります」

「とある特務機関の指揮を取っております。活動内容は軍機のためお答えできませんがね」

監察官の二人はいまいち釈然としない様子だ。これだけでは情報が足りぬと考えているのか。

「第三帝国は崩壊しました。連合国の手によつて」

「だから祖国を裏切れというのかね？まあ私には第三帝国が滅亡したことなど些細な事象に過ぎないが、君たちからそんな言葉を聞くとは随分と滑稽な話じゃあないか。君たちの祖国、大日本帝国は最早存在しないのだ。深海棲艦と戦わなければならぬ理由もあるまい？」

少佐の言葉を受け、香取の笑みが少し引きつり始めていた。

「そもそも軍機自体、君たちが知ったところでなんの価値もないものだ。それに固執する意味はないと断言しておこう」

「貴方がどのような任務を受け、どのような活動をしていたのか。そ

れがわからなければ艦隊を任せることは出来ません。それだけ提督には権限がありますから。どうしても情報を公開しないというのならば、貴方には提督の職を放棄していただくことになります」

香取がより突き放すような口調で告げる。実際彼女の言っていることはそう可笑しな話でもない。軍事機密の公開という点は少々無理があるが、どのような思想で、どう動く傾向があるのかを知っておきたいというのは普通だろう。基本的に日常的な艦隊運用は提督に一任されており、常に大本営及び海軍省の監督がある訳ではない。しかし、普通は身元の不透明な人間を基地司令官とする事自体があり得ない事であるはずなので、そもそもその前提がおかしいのだ。

「ははは、それは無理な話でしょうなあ。お嬢さん、貴女はブラフに向いていない」

あくまで少佐は余裕を崩さない。香取を軽く笑い飛ばし、両手を広げて首を振った。

「・・・どういう意味でしょうか」

「そのままの意味ですよ、お嬢さん。貴女方には私を傀儡としたい理由があるはずだ。でなければこのような出自のわからない、ましてや日本人ですらない男を要職に置いておく理由が無かろう。いちいち交渉などせずとも、代わりの司令官を寄越せば済む話だ。そうしないということは、それが出来ない訳があるということだろう。違うかね？」

「・・・」

香取はその問に答えない。だが沈黙が答えのようなものだ。

「簡単に手球に取ろうなどと思わないことだ、お嬢さん。私は“あの武装親衛隊の士官だぞ？”仮にも同盟国たる大日本帝国の君たちには知っておいて貰いたいものだね、私達の狂気を！」

余裕綽々に言葉を返す少佐に、香取は少なからず苛立ちを覚えていた。いや、彼の勢いに圧倒されつつある自分自身に苛立っていると言ったほうが最適か。私たちにはこの男の説得に時間をかける余裕などないのだ。

「貴方が本当に狂人なのか、ただの虚勢なのかは知りませんが。私達にとつてはそんなことはどうでも良いことです。問題は貴方が我々海軍に協力する意思があるのかどうかということですから。何れにせよ、その意思がないのならば提督の任から外れていただくのみです」

「おやおやお嬢さん、肝心な点にお答えいただいておりますなあ。私をここから追い出すというのなら結構。そうすればよかろう。だがこの泊地の艦隊指揮は誰が行うのかね？代わりを超越せない理由は知らないが、大方制海権の問題か士官の不足か、大方そんなところだろう」

二人の交渉は睨み合ったまま遅々として進まない。少佐の両脇に立つ長門と大淀の二人も、息を呑んだままその行く末を見守るしかなかった。ただ一人鹿島のみが、静かに微笑んでいるのみである。

「そんなことよりも君たちの方こそ教えてくれないかね？君たち艦娘は一体何物なのか！ああ、興味深いね！人間でありながら、不可思議な艦装を持ってして大洋を航行する能力を持ち、その身に余る凄まじい火力で砲撃できる！実に素晴らしい！実に恐るべき！実に、実に頼もしい！！出来ることならば君たちと共に英国を征討したかった！！」

「艦娘に関する情報は、機密事項に当たります。少なくとも今の貴方にお話は出来ません」

「先程からないないづくしですなあ。少しは譲歩するということを知ったほうがいい」

「貴方だけには言われたくないですね」



「・・・お二人さん、そろそろ妥協点を図ってはどうかでしょう?」

二人の問答を見かねたか、鹿島が口を開いた。香取、少佐共に何か言い返しかけたが、鹿島はそれを咎めるように咳払いをして、言葉を続けた。

「提督さん、私達は貴方を操り人形にしたいわけでも、ここから追い出したいわけでもないんです。まずはその点をわかっていただけていただけますでしょうか?」

少佐はどうだか、とでも言いたげに肩をすくめて見せた。

「私達は・・・海軍は貴方に協力していただきたいと考えています。いえ、協力せざるを得ないのです。でなければ、この泊地はそう遠くないうちに陥落することになるでしょう」

思いがけぬ言葉に、長門と大淀はぎよつとした表情でのけぞった。たまらず大淀が、

「それは、何故に・・・」

と言葉をこぼす。

「その理由をお話します。ですがその前に、まず提督さん・・・。貴方についてのお話をしなくてはなりません。貴方方、『漂流者』について」

「漂流者・・・」

「そう、漂流者です。私達海軍省では、貴方方のことを漂流者と呼んでいます。漂流者達はいつもどこから流れ着いてくるのです。何故か、海軍省の書類を携えて」

少佐はこの世界に流れ着いた時のことを思い返す。確かに、奇妙な部屋で眼鏡の男に出会った後、気がつけばこの島の浜辺に倒れていたのだった。それからあれよあれよといううちにこの泊地で艦隊指揮を取るようになったのだ。

「これまで私達は何人かの漂流者と交流してきました。その全てが、元のいた時代・・・または世界はバラバラでしたが、とある人物と接触し、ここに現れたと証言しています」

「ふむ。確かにその心当たりはある。しかし、それとこの泊地の危機

になんの関係があると言うのだね？」

「このような漂流者の出現は、ある程度の規則性を持つて発生しているのです。その多くが、設営されて日の立たない泊地に本来の司令官の代わりに現れる事案でした。また、あまり戦況の思わしくない方面に出現しやすいという傾向も」

あつ、と長門が声を上げた。先日の島風と天津風の一件における敵航空機の襲撃が思い当たったのだ。その後、同海域に向かった威力偵察艦隊は空母を有する敵艦隊と交戦、これを撃破したが、存在が予想された敵前線拠点については確認することが出来なかった。

「南方の戦線は、それほどまでに困難な状況なのか・・・？」

鹿島は初めて少々気まずそうな表情をして、深く頷いた。

「先日未明、ショートランド島の泊地との連絡が途絶しました。以前からショートランド泊地は深海棲艦の苛烈な攻撃にさらされていたため、おそらく陥落したものと思われれます」

ショートランド陥落。長門も、大淀も驚きを隠せずにいた。

「ショートランドつて・・・南方でも精鋭揃いの泊地のはずでは？確かにフィジー・サモア方面への進出を図っていたとか・・・」

「ええ、確かにそうでした。あの海域、アイアンボトム・サウンドに向かうまでは」

鹿島が言うには、ソロモン諸島の制圧を目指し、鉄底海峡、アイアンボトム・サウンドと呼ばれる海域に進出したところ、深海棲艦からの大規模反攻を受け、複数回の交戦の後、劣勢に陥ったという。

「このままであれば、確実にこの泊地は深海棲艦の攻勢にさらされるでしょう。こちらとしても、それは大きな痛手です。協力を約束していただければ、当然ながらこの泊地への支援は惜しみません」

「良かろう。君たちを相手に戦うよりも深海棲艦との戦争のほうがずっと面白そうだ」

「よかった、ご理解感謝致します」

少佐の快諾に、鹿島は安堵して息をついた。

「今後の作戦展開等については、追って大本営からの要綱が届くはずです。しばらくは私達もここに滞在させていただきますね、提督さ

ん」

南太平洋の島、ショートランド島。透き通るように碧い海を映した鏡のように、空もまた青く澄み渡っている。なんと恨めしいことだろう。これほど素晴らしい日であるのに、一歩たりとも海へ出ることは敵わないのだから。彼女は望遠鏡で水平線を見渡した。ただ大海が横たわるのみだ。

「ビスマルク姉様、何か見えますか？」

「何も見えないわね。深海棲艦も、友軍も」

ビスマルクは双眼鏡をおろしてため息を付いた。彼女に声をかけたプリンツ・オイゲンもまたがっかりした様子だ。

「せっかく南の島での任務だと思ったのにー……」

プリンツが嘆くように言った。正直ビスマルクも同じ気持ちだった。彼女達は当然ながら日本の艦艇ではなく、ドイツ軍の艦艇である。そのドイツ艦娘がなぜこのアジアの果ての島にいるのかといえば、どこぞの狂人のように漂流したというわけではなく、ドイツによる日本への戦力提供のためである。

「戦況が思わしくない泊地への援軍とはわかってたけど、まさか到着してすぐに泊地が陥落するとは思ってもなかったわね」

彼女達ドイツ艦隊がショートランドに到着した時、既に泊地は空襲を受けていた。防衛に加勢しようと突入したが時既に遅く、残っていたのはほぼ破壊された泊地と、悠々と飛び去る敵機のみであった。

「姉様、資源は残っているんでしょうか？私、こんなところに置き去りは嫌ですう……」

「私だって嫌よ。残っていてくれればいいけど……どちらにせよ、グラーフ達を待つしかないわ」

「おや、退屈させてしまったか？」

二人が振り向くと、噂をすればと言わんばかりにグラーフ・ツェツペリンが立っていた。何やら色々と抱えている。

「あら、早かったのね。……で、状況は？」

ビスマルクが問う。グラフは先程まで泊地内の探索を行っていたのだ。

「まず残念な知らせだ。こここの admiral は戦死している。艦娘も駄目だな。少なくともここには生き残りはいなかった」

「Scheisse! 半分わかつてはいたけど、やっぱりだめだったようね……」

「ああ。あと軽く調べた程度だが燃料や弾薬もわずかにしか見つからなかった。代わりと言ってはなんだがこれを拾ってきたぞ」

グラフは方に担いでいた小銃をビスマルクに投げてよこした。よく見れば、彼女が抱えているものの幾つかは兵器の類のようだ。

「Gewehr? こんな小銃じゃ深海棲艦は倒せないわよ」

「そんなことはわかってるぞ。何、野生動物がいるかも知れないだろう。その護身用にと思ってたな」

「ふーん……他には何か?」

「ああ、次は喜んでくれていい。なんとか使えそうな通信機が残っていた。奇跡的だな。救援を要請することが出来ると思う」

おお、これは思わぬ朗報だ。孤立無援の状況から脱することの出来る手段が見つかったのはとてもありがたい。

「救援を要請したとして、何日ここで耐えればいいのか……。最悪の開幕だわ……」

Gleich und gleich gesell  
tsich gern. 3

ボロボロになった建物の中を、慎重に歩き進む少女が二人。一人は凜と迷いなく、一人はフラフラと危なげに進んでいた。

「ユー、気をつけろよ。どこの床が抜けるかわからん。まあお前は軽いから大丈夫だと思うがな」

その前者、グラーフ・ツエツペリンがユーと呼ぶ後者の少女に声をかけた。ユー、正式にはU-511という名の潜水艦である彼女は、マイペースに、ところどころひび割れた床をびよんぴよんと飛び越えながら、グラーフに続いて進む。

「ユー、気をつけます。ユー、軽い……。グラーフ、重い？」

「いや、そういう意味ではないのだが……。そういうことはビスマルクには言うなよ？ 割りと気にするからな、あいつ」

ユーは不思議そうな顔で首を傾げている。子供は時に残酷だ。まあ、戦艦はどうしても筋肉質な体になつてしまうため、ある程度体重が増えるのは仕方ないことだと思ふのだが、本人が気にしているのだからあえてそこをどうこう言つてやる必要はないだろう。

「グラーフ、さっきの通信機は、良いの？ さっきの部屋は、こつちの方じゃない、よ」

「ああ、あつちにはビスマルクが行つてるからいいんだ。私達はここ  
の提督の執務室に行こうと思つてるんだよ」

先程の探索時、通信室を見つけて来たのはユーであつた。その間、グラーフは貯蔵資源と生存者の探索を行つていた。結果は散々なものであつたが、収穫がなかつたわけではない。わずかあまりの資源もかき集めれば多少の足しにはなるし、普通の小銃とて無意味なわけではない。艦娘といえども、艦装がなければ一般人と何ら代わりない。その状態で野生動物に襲われでもしたら、普通に怪我だつてする。しかし、わざわざ野犬やイノシシ……。がいるのかはわからないが、それらにいちいち艦装の砲を使つていては弾薬の無駄だし、何よりオー

バーキルも甚だしい威力である。何よりもちようどよいものを選択するのが一番だ。

さて、話は少々逸れたが、先の生存者の搜索の折、他より一層被害の大きな一角でこの泊地の司令官であったであろう人物の亡骸を発見した。おそらく、避難の途中で悲運にも爆撃の直撃を受けたのだろう。その亡骸は正直見るに堪えないものではあったが、辛うじて原型をとどめていた。日本式の供養はこれでよかったか、と思いつつ遺体に手を合わせ、他の遺体に行ってきたように持ち物などを調べていく。その中に気を引くものが一つあった。グラフはそれを手の中で転がす。

「死を間近にしてなお、死してなお後生大事に握りしめていた鍵だ。有用なものがしまい込まれているかも知れん」

「鍵、ですか？」

そう、鍵だ。他に気を引くものがない中で、これだけは彼の手に握り込まれていた。

「避難するのに握りしめていたということは、地下壕か何かの鍵かな。だからこの建物の見取図のようなあつたら渡してくれ」

「わかった。ユー、頑張つて探します・・・！」

「頼りにしてるぞ。役に立ちそうな物があつたら何でも持つてこい」

鍵にはタグのようなものもなく、何のものをうかがい知ることのできる情報がない。さすがにまったく関係のないものの鍵ということはないだろうが、これが泊地の外の物となると、お手上げだ。

そのまましばらく歩くと、ほかより重厚な扉の部屋が見えてくる。どうやらあそこが提督の執務室であつたようだ。周辺に大きなひびや崩落がないことを確認し、扉を開いた。

執務室の中は爆撃の衝撃からか、棚が倒れていたり、物が乱雑に散らばっていたりと、かなり荒れていたが、皮肉なことに致命的な被害はなかったようだ。避難が遅れていたならば死ぬこともなかったのかも知れない、というのはいささか希望的過ぎる観測であるが。

「これは・・・探索も一苦労だな」

「ユー、お片づけします・・・グラフ、あれ、金庫？」

「ん……だが扉が開いている。この鍵とは関係がないようだ」

ユーのいうように、部屋の片隅に金庫が転がっている。中も空なので、ひとまず関係はなさそうだ。

倒れた柵を起こし、足元に散らばる書類をかき集めて目を通していく。出撃の記録や本国からの通達などの諸々、今のグラーフたちには必要のないものばかりだ。そりやそうか、と書類の束を柵に適当に置き、部屋を見渡す。鍵穴のありそうところといえば、鍵つきの書類棚と提督の執務机くらいのものだが、書類棚のほうはガラス面が割れているためあける必要もなく、そもそも鍵の形も合わなかった。執務机のほうも鍵は合わなかったが、先ほど拾った拳銃で強引に鍵を破壊した。中身は判子や提督の私物など、持ち出してやりたいが、今役に立ちそうなものはない。

「鍵はこのものではなかったか。となると、範囲が広がるな……」  
少しため息をついてユーをほうを見た。まだ散らばった書類の束に目を通していているようなので、そちらを手伝いに回る。

「……ん、あった、よ。見取り図、じゃない？」  
十分強ほどたつたころか、ユーが見取り図を見つけたようだ。

「おお、でかしたぞ。……地下に施設があるな」

見取り図によれば、予想通り地下に何か施設があるようだ。執務室にこれ以上の発見がなければ、次はそちらへ向かうことになるだろう。

「大本営海軍部より至急電です。『先二陥落シタシヨートランド泊地ヨリ救援要請ノ報有り。貴泊地艦隊ハ此レノ救援ニ当ルベシ』、とのことです。同救出任務の目標は同盟国独逸より派遣された艦娘四名の回収です。本作戦の是非は日本と同盟国の関係を左右するものであり、一刻も早い救出が望まれます。これを受け、当泊地では、水雷戦隊を主軸とする救出部隊と、敵主力艦隊と交戦、これを撃滅することを目標とする機動部隊の両艦隊を派遣することを提案いたします」

作戦会議室に集められた面々を待ち受けていたのは、緊急に大本営

より送られてきた任務の通達であった。ことは遡ること数日、シヨートランド陥落の報を受けて程なく、大本営にドイツ艦隊を名乗る艦娘から救援を要請する旨の通信が届いた。この艦隊がドイツからの戦力提供によるものであることから、救援の遅延は外交問題を招きかねないということで、救出作戦実施の命令が下ったのである。

しかしこの男は、そのような事情には興味を示さない。

「ああ当然承認する。そんなことよりもドイツ艦隊を早く救出してくれ給え！この世界でドイツ艦と出会う事ができるとはなんと素晴らしい！心が踊るなあ！」

「金剛・・・提督はなんであんなに燥いでるんだクマ？」

軽巡洋艦である球磨が、隣席の金剛に小声で聞いた。彼女達二人は、それぞれ水雷戦隊、機動部隊の旗艦として選出され、この会議に出席している。

「提督は出身がドイツらしいデース。やっぱり自分の国の艦娘と出会うのは嬉しいんでしようネー・・・。Damn it！私がドイツ出身の艦だったら良かったんですけどネー！」

「いや、流石に無理があるクマー。あとヴィッカーズを始めとする各方面が悲しむからやめてやれクマー」

本気か冗談かわかりかねる金剛のリアクションに、球磨が極めてまともに返す。

「シヨートランドで救援を待つドイツ艦娘は燃料、弾薬が不足しているとのことですので、救出部隊でこれに補給を行うための資源輸送をお願いします。また、同海域には強力な敵主力艦隊の展開が予測される他、敵主力と接敵するまでも多数の敵部隊との戦闘が予測されます。その為、先に説明致しました作戦主力二艦隊とは別に、道中護衛を行う前衛支援艦隊、敵主力艦隊との交戦時に火力支援を行う決戦支援艦隊の両支援艦隊の二艦隊の派遣を具申します」

「おお、それはまた素敵な戦争になりそうだ」

「現段階の当泊地に於いての全力出撃となります。既にお伝えした通り、救出部隊となる水雷戦隊旗艦は球磨さん、敵主力を攻撃する機動部隊旗艦を金剛さんをお願いします。支援艦隊については現在



急ぎ編成中です。ここまでで何か質問のある方はおられますか？」

「投入戦力だけ聞くと火力過剰に聞こえるけど、それほど敵は多いクマ？」

球磨が質問を飛ばした。確かに救出艦隊は差し引いても、三艦隊を投入するとなるとかなりの戦力だ。通常の海域であれば球磨の言うように過剰な戦力だといえるだろう。

「展開する敵戦力の情報がないのでなんとも言えませんが……。本作戦には政治的な問題も絡んでおりますので、万全を期した編成になっています」

「ふーん……。ま、やることは変わらないクマ」

大淀が他の面々に視線を向ける。質問がないのを確認し、最後に長門へ言葉を渡した。

「本作戦は短期間ながら、大規模な作戦展開を行う事となる。事態は一刻を争うものだ。各自、迅速な行動を心がけ、万全の体勢での作戦遂行に務めるように。では、解散！」

「艦娘がこれほど同時出撃すると壮観ですね、お姉様！」

「そうですネー！何と言つても本隊、支援艦隊合わせて十八人の大艦隊デース！流石にこの規模の作戦はそうそうないですからネー！」

そんな雑談を交わしながら、東に向かうのは金剛と比叡を含む主力機動部隊と二個支援艦隊の一団だ。それぞれの艦隊は程々に距離を空けて航行しているが、流石にこの人数になるとその多さが際立って見える。

この機動部隊は金剛型四姉妹と、二航戦である蒼龍、飛龍の六名で編成された重編成の艦隊である。哨戒部隊や水雷戦隊を相手にするにはかなりの火力過剰になるが、その際には道中護衛の支援艦隊による露払いを行い、残った敵を主力が叩く、という形で弾薬消費を抑える進み方になる。逆に潜水艦隊と接敵した際も同様に、支援艦隊の駆逐艦による牽制で押し通ることになるだろう。主力艦隊には対潜戦闘の手段がないため、可能ならば早期発見からの回避が望ましいが。

一方の決戦支援艦隊については、道中では極力交戦せず、敵主力を捕捉した後には支援砲撃を行うことになる。こちらも任務は敵主力部隊への先攻攻撃であるが、重要性は異なる。今回の作戦はショートランド泊地へ向かう救援部隊を支援する為の安全確保という面があり、そのためには軽武装の水雷戦隊である救出部隊では対処不可能な敵主力を可能な限り撃破することが望ましい。仮に被害軽微のままショートランド島へ突破されれば、救出作戦の遂行が難しくなることは必死であるため、一度の交戦を取り出して見た場合の戦果の重要性が高くなるのである。

「先行した彩雲から敵艦隊発見の報あります。金剛さん、決戦支援艦隊に距離を取らせたほうが良いかと」

蒼龍が敵発見の報を伝えた。

「Roger！編成と距離はわかりますカー？」

「軽巡洋艦二、駆逐艦四の水雷戦隊です。このまま進んだ場合十数分で接敵すると思われれます！」

蒼龍からの情報を聞き、金剛が各艦隊に指示を出していく。幸い敵の編成は軽いもので、航空機での雷撃と支援艦隊の砲撃で無力化出来る可能性もある。後発の救出部隊のためにも叩いておくのが打倒だろう。

「敵哨戒部隊を叩きマース！蒼龍、飛龍、艦載機の発艦をお願いしまース！」

「了解しました、友永隊、発艦はじめ！」

「二航戦攻撃隊、発艦します！」

「やっぱり先行して三艦隊も通った後だと海が静かだクマー。ちびっ子共、ちゃんといってきてるかクマー？」

「誰がちびっ子よ！二番艦暁、ちゃんといってきてるわ！馬鹿にしないでよ！」

球磨が振り返って確認すると、暁が食いつくように返した。彼女は子供扱いされるのが嫌いだ。当然それをわかって行っている球磨は、それを見て呵々と笑っている。

「そう怒るなクマー。他のもちゃんというようだクマー」

「大丈夫だ、三番艦響、ついてきているぞ」

「四番艦雷、ちゃんというわよ！」

「五番艦電、大丈夫なのです！」

続いて三人の駆逐艦達が元気よく答えた。暁も含め、四人は第六駆逐隊の面々だ。姉妹艦であるが故、いつも息の合った掛け合いを見せてくれる。戦闘でもそれは健在だ。

「・・・んー？最後の一人の声が聞こえんクマー」

「んむー・・・六番艦、島風・・・」

「はい、よろしいクマ。じゃ、引き続き逸れずについてこいクマー？」

先に出撃した機動部隊を主軸とする三艦隊に数十分ほど間を空けて出撃した救出艦隊は、以上の六人の艦娘で構成されている。彼女達

の任務は陥落したショートランド泊地に取り残されたドイツ艦と合流、ドイツ艦に補給を行い、これの脱出の支援を行う事である。

「よろしいクマーじゃない！なんで島風が最後尾でドラム缶なんて引つ張らされてるんですか！」

その最後尾から島風が怒声を上げた。確かに彼女が叫んでいるように、島風はドラム缶を引つ張りながら航行している。無論、それは孤立するドイツ艦隊への補給を行う燃料物資だ。

「なんでって、そりゃ重りつけとかないとお前が勝手に先行して行っちゃうからに決まってるクマー？天津風からも目を離さないようお願いされてるクマー」

「もう自分勝手に動いたりしないってば！」

「そういう信頼は行動で勝ち取るものだクマー。今回の作戦でしつかりできたら見直してやるクマー」

島風は頬を膨らませて怒っているようだが、かつての傲慢さは鳴りを潜めている。天津風との交流は、彼女にとって意味のあるものになったようだ。

球磨はあえて島風に釘を刺すような言葉を選んだが、彼女に燃料の輸送役を当てたのは、その高い能力を見込んでのことであるのはいうまでもない。先行して進む金剛たちが露払いをしてくれたとはいえ、敵艦隊との接敵がないというわけではない。万が一にも交戦の影響で輸送物資を失うことになれば、作戦に大きな遅れが出ることは必至であるため、これは非常に重要な役回りなのである。

「じゃ、無駄口叩くのもそろそろ辞めるクマー。討ち漏らされたやつがないとも限らないから、各員気を引き締めていくクマー」

大艦隊がドイツ艦隊救出へ向け航行している時、当のショートランドでは、ドイツ艦娘たちが四苦八苦しながら現状を生き延びるのに尽くしていた。しかしほどなく、グラーフは希望の一つが摘み取られた事に落胆せざるを得なかったのだった。見取り図で見つけた地下施設へ至る通路は空襲での崩落でふさがれており、どうやら到達することができないだろうと知ったからだ。

「なんで地下壕に行くまでの道が塞がってるんだ。使えない地下壕など無意味にもほどがあるだろう！」

ビスマルク達と合流する予定の浜辺への帰路でも、つい愚痴がこぼれる。一応、その手にはわずかばかり見つかった缶詰などの備蓄食糧が抱えられていた。

「グラーフ、まだあそこの鍵だつて決まったわけじゃ、ないから、ね？ そんなに、怒らないで……？」

後ろをひよこひよこことついてくるユーがおずおずと言った。気を使わせてしまったか、とグラーフは表情を和らげ、ユーに微笑んで見せた。

「そうだな、すまないユー。今は嘆いている場合じゃなかったな」

悲観に囚われかけた頭をリセットし、気を引き締めなおす。確かにこちらの収穫こそ少なかったが、ビスマルクとプリンツが救援を呼ぶことさえできていればまだ望みはあるのだ。

しばらく歩き、合流を約束した地点が見えてくると、何やらプリンツがしゃがみこんで地面を見つめているようだ。最初彼女が何をしているやらさっぱりわからなかったが、近づいてみるとそこには穴が開いているのがわかった。穴といっても小さなものではなく、人数人が中に入ることができそうな大きなものだった。

「これまた……何を始めたんだ？」

「ビルマルク姉様が、タツコ・ツヴオ？を掘るといつて……」  
「タツコ・ツヴオ……？」

プリンツが説明するが、そもそも単語が意味不明であった。ビスマルクが掘っているのは見ればわかるが。

「蛸壺よ、た・こ・つ・ぼ」

「蛸壺？ Krakenfantoppf……か？」

ビスマルクが穴を掘る手を止め、汗をぬぐいながら言った。

「日本軍は南方で米兵と交戦するときに、蛸壺という個人用の塹壕を掘って迎え撃つたと聞いているわ。それを参考にして掘ってみたのよ。いざ深海棲艦が来ても粘ることができるようだね」

話を聞くに、ビスマルク達は日本の海軍司令部と連絡を取ることが

でき、救援を要請することができたらしい。その救援が到着するまで  
防御を固めるため、この塹壕を掘っているということだった。

「なるほどな。だが人生とはわからんものだ。いや、艦生というべき  
か？まさかこんなところで陸軍の真似事をする日が来るとは露も思  
わなかったぞ」

「私もよ。まあそもそも艦娘なんてものになること自体が想像もでき  
なかったけど」

「全くだ。どれ、私も手伝おう」

蝟壺は既に二人ならある程度余裕を持つて入ることが出来るよう  
な大きさになっていたため、おそらくビスマルクが探索の際に拾って  
きたのであろうスコップを手に中へ下りた。後数十分もあれば十分  
な広さの塹壕が出来上がるだろう。念のためプリンツとユーには辺  
りの哨戒を頼み、二人で穴を掘り広げていく。

しばらく背中合わせで黙々と作業を続けていると、ビスマルクが遠  
慮がちに声をかけてきた。

「ねえ、グラーフ？」

「何だ？」

グラーフは手を動かしたまま応答する。

「あの基地、艦娘の死体がそこらじゅうに転がってたわね。出撃する  
間もなくやられたみたいだった」

「深海棲艦の奇襲がよほどまく行われたか、あるいはこの様子だと  
備蓄資源が枯渇していたのかもしれない。いずれにせよ艦娘が海の上  
で死ねないのは無念だったろうさ」

「そうね。そうなんだけど・・・」

ビスマルクの言葉が途切れ、次の言葉を探している様子で小声で  
唸っている。グラーフはしばらく彼女の言葉を待ったが、やがて耐え  
かねて単刀直入に聞いた。

「何が言いたい？」

「・・・ちよつと全体的に不可解過ぎないかしら。ここはアイアンボト  
ムサウンドを攻略するための要衝だけど、貴重な艦娘を使い潰してま  
でここにとどまり続けるっていうのは考えづらいと思う。私達が増

援に送られたのも、ここまで戦況が悪ければ後方に拠点を設営してそこまで前線を下げたほうが良かったはずだから、見当ハズレな処置。日本の司令部もここが陥落していることをつかめてなかったみたいだし、となると・・・」

「この状況が人為的に起こされた惨事だとも？」

「そこまでは言わないけど、対応を遅らせるだけの何かがあったんじゃないかしら。たった一度の攻勢で基地を壊滅させるほどの攻撃だったのか、或いは戦況が悪化しても報告できない理由があったのか」

半ば荒唐無稽な話であると思わないではないが、そう断じて無視できる問題でもないと思う。艦娘は決して安価な兵士ではない。何処ぞの赤い国のように人員を次々と投入して解決というわけには行かないのだ。それを踏まえて考えると、やはり何かしらの要因はあっただろう。

「まあ、何はともあれ救援を待つしかないさ。それが叶わなければ、私達もここに骨を埋めなければならんからな」

海原を航行する深海棲艦の艦隊に、数十機の艦上攻撃機編隊が襲いかかる。接近を察知した深海棲艦は対空砲火で迎撃を行うが、抵抗むなしく砲火を抜けた艦攻の雷撃が艦隊に突き刺さり、大きな被害を与えた。

旋回し、引き返していく艦攻隊を恨めしく睨みつける艦隊旗艦の彼女は、しかし次の瞬間にはその視界を失うこととなった。前衛支援艦隊の撃ち放った砲弾の一発が、彼女の顔を貫き破壊したのである。続いて降り落ちる砲弾の雨が、既に半壊していた艦隊にとどめを刺す形となり、じきに壊滅するに至った。

遠方で高く上がる水しぶきを見た金剛達は、予定に滞りなく進軍を続ける。敵艦隊と接敵するのはこれで三回目だったが、そのいずれも飛龍と蒼龍による艦攻隊の雷撃と、支援艦隊の砲撃により本体に被害を受けることなく敵を退けることができていた。もうじきショートランド島近海に到達するころだろう。

「金剛お姉様、前衛支援艦隊から入電。現時刻を持って作戦海域からの離脱を開始、艦隊支援任務は予定通り決戦支援艦隊へ引き継ぐとのことです！」

「I see! いい活躍でしたネー！」

霧島の伝えた報に振り向くと、その言葉通り航路を離脱する艦隊が見えた。代わりにその後ろに位置していた決戦支援艦隊が距離を詰め、本隊と一定の間隔を保つ。

ここより先は敵の本隊と接敵する可能性のある極めて危険な海域となる。さらに今回の作戦では、後続の救援艦隊のショートランド上陸を確実なものにするため速やかな敵戦力の撃破、最悪でも作戦遂行に支障のないほどに深海棲艦を抑え込む必要があるのだ。いやが上にも緊張感が高まっていく。

「索敵機からの報告です。索敵途中ではありますが、とりあえず周辺



に敵艦の存在は確認できないようです」

飛龍が金剛に告げた。

「この海域の制海権は私達に傾きつつあるということでしょうか？」  
「我々の進撃を警戒して本隊の警護のために下がったのかも知れませんが、どちらにせよ、油断せずに行きましよう、金剛お姉様！」

榛名の疑問に霧島が被せる様に答えた。実際霧島の言うように、本隊に合流するためにこの海域の深海棲艦が撤退していった可能性もある。何しろ既に三回も交戦しているのだから、敵本隊に我々の存在が察知されていないはずはないだろう。

「むー、霧島！榛名は金剛お姉様に聞いたんですよ!？」

どうやら金剛に話しかけたところを横から阻まれたのに立腹のようで、榛名が声を上げた。一方の霧島は悪びれることなく、

「あら、わざわざ旗艦のお姉様に聞かずとも妹だけで解決できることは解決しておくべきじゃないかしら?・そうですね、お姉様!？」

と言つてのけた。

「戦況の把握は全体で行っておくべき事柄です!・報連相ができない部下は失格ですよ霧島!・そう思われますよね、お姉様!？」

「ここから、榛名も霧島も金剛お姉様を困らせることをしない!」

「比叡お姉様は黙っててください!!」

両者の争いに介入した比叡は、あえなく弾き出される事となった。どうやらこの争いは長期戦となりそうだ。

「・・・姦しい妹達で申し訳ないデース」

「いえいえ」

「姦しいのはいつものことですから」

蒼龍も飛龍も、呆れ半分で、しかし咎めることもなくその様子を見守っていた。この姉妹が金剛お姉様LOVEなのは今に始まったことではないし、こう見えて彼女たちが周辺に警戒を払うのをおろそかにしていないのも知っているからだ。むしろ、命の危険も付きまとう出撃中に痴話喧嘩をする凶太さにある種の尊敬すら覚えるところだ。

「提督、作戦本隊より中間報告です。作戦本隊及び決戦支援艦隊の両艦隊は現時刻を持ってショートランド近海へ到達。前衛支援艦隊は既に離脱を開始しており、作戦計画に遅延なしとのことですよ」

「うむ、ありがとう」

鎮守府はいつもに比べ非常に静かで、空気も重い。当然ながらそれは大規模な作戦が遂行されているが故のものである。単純に敷地内に滞在する艦娘が少ないのは勿論、そのいずれもがいざという時の出撃に備えているのだから空気も張り詰めるというものだ。

報告を読み上げ終えた大淀は改めて耳をそばだて、提督の執務室の近くに他の艦娘がいないことを確認した。

「・・・提督、今回の作戦ですが」

大淀はその心中に抱えた疑問を口にした。彼女の知るところではないが、その内容はビスマルクがグラブに語ったものとはほぼ同じである。

「ふむ、私は日本の海軍省の作戦展開の全容など知らんからなんとも言えんが。基地が壊滅したという結果があるのだから理由はあるだろう？第三帝国のスターリンググラードがそうであったように。君たちの玉砕がそうであったように」

「そう言われたら、まあ、そうなんです」

少佐の言うことは尤もであるのだが、どうもそれだけでは納得のいかないような気がして、大淀は言葉を濁した。勿論戦況を読み違え、孤立した末の結果という可能性が一番現実的であるということもわかっているのだが。

「だがまあ、そうだなあ」

少し思考に意識が沈んでいた大淀が少佐に意識を向け直すと、彼の顔には先ほどよりわずかに、何かこれから楽しいことが起こるのを知っている子供のように、薄い笑みを浮かべているのに気づく。

「あの鹿島とか言う監察官には気をつけたほうがいい。まだ何か腹に一物抱えているぞ？」

場面は戻り、シヨートランド沖を進撃する二艦隊は極めて順調ながら、不気味にも感じるほど静かな海の上にいた。しかしこの穏やかな海もすぐに艦隊決戦の舞台になることは明白であった。というのも、たった今飛龍の放った索敵機の一機が遠方に敵本隊と見られる重編成の艦隊を発見したためである。

「さーて、ここからが私達の腕の見せ所デース！比叡！榛名！霧島！金剛型四姉妹の面目躍如たる活躍、見せますヨー！」

ここまで活躍の少なかった、というより戦術的理由により弾薬消費を抑えられていた金剛型の四人は、いよいよ本隊との交戦を目前とし、再度気を引き締めあつて激戦に備える。

「はい！気合！いれて！いきますー！」

比叡が金剛に呼応して答えた。榛名、霧島も各々それに続いて気合の入った返事をし、士気を高めていく。

と、そのときである。艦隊からさほど離れていない地点から、突如雷撃が放たれ、艦隊を襲う。最も早く反応したのは、艦隊直掩機の視点を持っていた蒼龍だった。

「艦隊右側面から魚雷接近！」

「回避運動開始！支援艦隊の駆逐艦は爆雷投射、お願いしマース！」

その急報に金剛が即座に命令を下し、行動を開始する。支援艦隊からの爆雷が水柱を多数撃ち立て、敵魚雷の進路を逸らそうとするがさほどの効果はなく、一路突き進んでいく。魚雷は比叡の足元に到達し、一際大きな水柱を立てた。

「ッ！比叡！」

「痛つつつ……！大丈夫です！航行、戦闘共に問題ありません！」

比叡の言葉通り、その艦装は中破級の損傷を負っているように見えるが作戦行動は続行出来るようだった。次に魚雷を放ってきた敵潜水艦のいるであろう方向を見やる。既に支援艦隊から発艦した対潜哨戒機が攻撃を開始している。こちらも問題はなさそうだ。

「急ぎ敵本隊を叩きマース！榛名と霧島は比叡をcoverしつつ周辺警戒！蒼龍、飛龍は敵本隊への攻撃に備えて艦載機発艦！支援艦隊は潜伏する敵精鋭潜水艦に備えて対潜哨戒を厳としてくだサーイ！」

「機動艦隊が敵主力とみられる艦隊と交戦開始・・・始まったかクマ」  
金剛達がいるであろう海域の方を眺めながら、球磨は呟いた。当然その姿は肉眼で見えはしないが、海風が砲火の匂いを運んでくるような錯覚を覚える。

「主力艦隊・・・向こうの皆は大丈夫かしら・・・」

「大丈夫さ。金剛型戦艦四姉妹に二航戦の二人の精鋭揃いだよ？ 暁は人の心配をする前に自分の心配をすべきじゃないかな」

「なっ！うるさいわね！レディは他人に心配り出来るほど心に余裕があるのよ!!」

暁と響がじやれ合っている。ちびつ子は元気があっていい、などというと自分が年寄りであるかのように感じるが、実際そう思う。戦場にミスマツチなその無邪気さは、脆くも得難い。できれば守ってやりたいものだが。

そんな目で最後尾まで見渡すと、特三型四人娘とは打って変わって真剣な面持ちでいる島風が見えた。なるほど、こちらは薬が効いたようだ。元より島風は戦闘に関して高い技術を持ち、尚且つ賢い子だ。これまでは高い能力が故に自尊心が強いところがあったが、あの一件で大分とコントロールがつくようになったらしい。

「さて、各員上陸準備クマ。往きはなんとか問題なく到着、帰りがどうなるやら、だクマー」

球磨が全員に声をかけた。前方に見える、半壊した施設が立ち並ぶ基地。ショートランドである。ドイツ艦隊救出作戦は、いよいよ最も重要な局面へ向かいつつあった。

孤立無援であったショートランドに、六人の艦娘が今上陸を果たした。球磨を旗艦とするドイツ艦救出艦隊だ。駆逐艦達は輸送してきた燃料と弾薬を陸揚げしている。さて、目的のドイツ艦隊はどこだろうか。

「おーい、ドイツ艦娘ー！助けに来たクマー！出て来いクマー！」

球磨が呼びかけるが、反応はない。どこかに潜伏しているのか。あたりを見回してみると、半壊の基地施設に密林、そして砂浜。向こうから出てきてくれればいいが、一方的に探すとなると少々骨が折れそうだ。

「んんー……。ちよつと球磨はこの辺一回りしてみるから、その間に補給ができるよう準備しとくんだクマー。それで見つからなかったら全員で探すクマー」

「わかったわ！雷にかかれればあつと言う間に終わらせちやうんだから！」

「電もがんばるのです！」

二人の応答を確認し、駆逐艦達にこの場を任せて探索に向かう。ドイツ艦からの救援要請は基地内に残っていた無線機から行われていたので、少なくとも基地からそう離れたところにはいないだろう。まず手始めに、基地内を探るべく球磨は足を向けた。

基地内は荒れ果てており、ところどころに艦娘の遺体すら転がっている有様だ。

「うおー……。こりやちびつ子共をつれてこなくてよかったクマ。精神衛生によろしくないクマー」

艦娘などという立場であれば、命のやり取りをすることは日常茶飯事ではあるが、死体を目にする機会は意外に少ない。洋上で撃沈した深海棲艦の亡骸は海中に沈んでしまふし、それは艦娘とて同じこと

だ。逆に、艦装が健在であれば、艦装の保護があることで、艦娘が致命傷を負うことは少ない。怪我を負ったとしても精々軽い火傷や切り傷程度である。よって、いかに艦装が大破していようとも破壊まで至らなければ、艦娘自身は死に至る傷を負うことはまずないと言っている。

その艦装がない状況で戦闘状態に入ることなどは奇襲を受けた場合などを除き、まず想定されていないし、実際に起こることが少ないため、死体を見慣れていない艦娘も多い。球磨とてその一人であるが。

ドイツ艦を探し基地内をある程度回ったが、当のドイツ艦が見つからず、死体ばかりが目につく。その中で、球磨はなんとなく遺体に傾向があるように思った。

「小型艦の遺体が多い……。上はせいぜい重巡まで。戦艦や空母らしき艦娘の遺体はおそらくこれまで見た中ではなかったクマ。ま、龍驤みたいなのがいれば話は別だけどクマー」

自らを落ち着けるためにおどけてみせ、思考を働かせる。

「大型艦がないのは、錬度が高い艦が多いから奇襲を免れた……？ いやいや、艦装も装備していない状態で奇襲を受けてそれは考えづらいクマ。となると奇襲を受けた段階で大型艦は出払っていたと考えるほうが自然……。ショートランドの主力がやられて敵の攻勢を抑えきれなくなった結果、基地奇襲を許してしまった？……。ショートランドの艦隊は精鋭揃いだって話だったし、それが戦線が崩壊するほど一気にやられるのかクマ……？」

しばし考え込んだ球磨であったが、やがてそれも打ち切つてドイツ艦の捜索に戻ることにした。そもそも何が起こったのか解明するのは我々の任務ではないし、素人考えでは限界があるだろう。

結局基地内にドイツ艦は居らず、別のところをあたることになりそうだ。思いのほか時間を費やしてしまったため、いったん駆逐艦達のところへ戻ったほうがいいだろう。ここからなら密林を突っ切つていったほうが早そうだ。

「やつべえクマ。そろそろ向こうも準備終わるころだし時間を無駄に  
できんクマ」

救出艦隊に与えられた猶予はすなわち敵主力と交戦している金剛  
たち機動艦隊が稼いだ時間だ。同様に我々が速やかにことを済ませ  
れば、向こうが離脱する時間が早まる。何せ事前偵察もろくに済ませ  
ていない、急ピッチで実行された作戦だ。つつがなく進行するに越し  
たことはない。

球磨は密林を駆け足に進む。幸いにしてそこまで鬱蒼としている  
わけではなく、距離もそこまでないのですぐに抜けられるだろう。  
木々を避けながら前へ、前へ。そのまま五分もすると木々の隙間から  
海がうかがえるようになった。砂浜はもう目の前だ。

「おっ!?ととつと?」

不意に伸びた木の根に足をとられ、足がもつれる。立ち止まろうと  
するが、勢いづいた体はすぐには止まらず、目の前に広がった砂浜に  
転がり、

「ツ!?うおーっ!?」

転がり込むことはなく、その手前に空いた穴に落ちることとなっ  
た。

「痛つてえクマ……。なんでこんなところに大穴いてんだクマ……  
!?!」

派手に砂埃を立てて落下した球磨は、うつ伏せのまま周りに視線を  
向ける。穴の中には、艦娘がいた。自分以外の艦娘が四人、皆ほかん  
とした表情で球磨を見ている。その手には缶詰とフォークが握られ  
ていた。……砂埃が降りかかった缶詰が。

「あ……お、お食事中だったクマ?」

「ああ、砂塗れになっちゃったがね」

彼女らの一人、グラーフが言った。

「だがいいさ、我らの救援に来てくれたんだらう?」

「救援……!助かりましたねビスマルクお姉様!」

ドイツ艦は思い思いに歓声を上げた。球磨は起き上がりつつ、その  
面々を確認する。ドイツ海軍より派遣された四人の艦娘、潜水艦U—

511、重巡プリンツ・オイゲン、正規空母グラーフ・ツェッペリン、そして戦艦ビスマルク。確かに四人の生存を確認し、球磨はひとまず胸をなでおろした。ここからが肝心ではあるが、そもそも回収すらできなければ話にならない。

「球磨は日本海軍ビスマルク諸島泊地所属の軽巡洋艦、球磨だクマ。今からあんたの名を冠する我らが鎮守府にご招待だクマー」

「あら、運命的じゃない。私の名というか名づけ元が同じってだけだけど」

「細かいことは気にするなクマ。近くに部隊が待機してるクマ。補給を行うから艀装を運んでくれクマー」

彼女たちの艀装は塹壕の近くの茂みに隠されていた。ほとんどは個人で運び出せるものだが、ビスマルクの戦艦艀装は少々重量がありそうだったので球磨も手を貸して運んでいく。

「クマとやら。補給にはどれほど時間がかかる？」

道中、グラーフが球磨に聞いた。

「少し気になることがあつてな。この泊地の admiral の遺物の鍵。こいつの鍵穴を見つけないんだ」

「グラーフ、でもそれ、地下通路は通れなくなつてた・・・」

「ああ。だから Stuka の爆弾を使う。救援がいつ来るかわからなかったからあえてはやらなかったが、ここまで来たら見届けたいのが人情つてもものだろう？」

「これから交戦があるかもしれないのに弾薬を消費するのかクマー？現場指揮官としては承服しかねるクマ」

球磨はグラーフの言葉に難色を示す。まあその言い分はもつともであるが、グラーフは折れなかった。

「クマ。君も基地を見てきたならわかるだろう。艦娘が一度にあれだけ死ぬとは考えづらい。私が admiral ならもつと早く戦力を後退させ、補充、再編成を経てから泊地奪還を行うだろう。ビスマルク諸島に君たちの泊地があるならそこまで下がることはできたはずだ。ではなぜそうしなかった？なぜ玉砕するような選択をした？この基地を死守すべき理由があつたはずだ」



「陰謀論だクマ。下がれなかった理由は何らかの要因で艦隊主力の大半を喪失し、作戦展開が困難だったから。基地内に大型艦の死体がないことがそれを物語ってるクマー。泊地を離れた艦隊が帰還せず、他の泊地に退避も確認されてないとなると・・・まあ、そういうことだクマ」

「ショートランドは南方最前線の泊地。フィジー、サモアへ進出し南太平洋地域の制海権を奪還する、君たちでいうところのFS作戦の遂行を任されていたと聞いている。そのショートランドの精鋭たちがそう簡単にしくじるものか？」

引き下がるグラーフに球磨も反論を立てて争ったが、やがて球磨は溜息をつき、呆れた表情で言った。

「ドイツ人は頑固で困るクマー。それで満足するならちやつちやとなんもないこと確認していくクマ」

結局押しに負けた球磨は、彼女たちの艤装を駆逐艦たちのもとへ運び終えた後、補給を任せてグラーフと共にもう一度基地へ向かうことになった。

地下通路、とは言うものの、ちょうど崩落して瓦礫でふさがった部分の天井からは日光が差し込んでおり、外とつながってしまった。その穴を目がけ、上空から急降下爆撃を行おうとアプローチをかける爆撃機があった。グラーフの艦載機である、J u 8 7 c 改、通称シュトウーカだ。シュトウーカは低空まで高速で降りてくると、航空爆弾を投下し、さすがのお家芸といわんばかりに正確に瓦礫を吹き飛ばして見せた。

「よし、これなら通ることができるな」

「一応鉄扉はあるけど・・・本当にその鍵がここの鍵かもわからんじやないかクマ？ 案内内地に残してきた恋人の家の鍵だったりして」

堅牢な扉に歩きよると、鍵穴があることはわかった。しかしその鍵でここが開くとは限らない。そんな球磨の言葉とは裏腹に、グラーフが鍵を差し込み、ひねると、カチャリ、という音とともに簡単に開い

て見せたのだった。

「開いたな」

「開いたクマー」

二人が恐る恐るドアを開くと、その先は階段だった。奥深くまで続いている。お互い目配せし、どちらからともなく階段を降り始める。カツン、カツンと響く足音は反響し、階下に消えていく。

長い階段を下り終わると、雰囲気は一変した。そこは研究室のようだった。おそらく先の基地襲撃の余波だろう、地上と比べれば微々たるものではあるが、ここもまた物が散乱し、被害が見て取れた。

「・・・おい」

研究室自体は、どこの基地にもありそうなものだった。・・・研究室自体は。問題はそこにあるものだ。

「これは、いったい・・・何の冗談だ？」

研究室の真ん中に鎮座する培養槽の中に浮かぶそれは、点滴のように見える管を複数その身に纏い、静かに眠りにについている。

「深海・・・棲艦・・・？いや、艦娘のようにも見えるクマー・・・？」

それは、見間違えようがない。冒瀆的な形状の艦装、病的なまでに白い肌。そして艦娘としての本能が、佇む彼女が深海棲艦であると警鐘を鳴らしている。だが、全てがそうである訳でもない。まるで浸食に抗うかのように、わずかに艦娘のように見える部分が残っていた。いや、馬鹿な。これでは、艦娘が深海棲艦へ変質するかのようではないか。

「・・・どういふことなんだクマー。球磨には、わからんクマー」

「私には、艦娘が深海棲艦に・・・あるいは深海棲艦が艦娘になりかけているように見える」

そんなことは言われなくてもわかっていて。そう言ってやりたいが、その事実を認めたくないという意思がそれを許さなかった。

「そんな、大体なんだってそんなものがここにいるんだクマー？深海棲艦を鹵獲して、艦娘にする実験が行われてたとしても？深海棲艦を鹵獲なんて話、聞いたことがないクマー！」

「落ち着け。・・・これの左手を見てみる」

グラフに促され、彼女の左手を見る。その手もまた、半ば深海棲艦のように変質しているのが見て取れたが、その中に一つ、異質なものがある。

「左手……。薬指に、指輪？……。ケツコン艦かクマ!？」

左手の薬指に光る指輪。通常ならば既婚を意味するそれは、艦娘にとつては最精鋭の証だ。

提督の最高戦力として、また伴侶として長年連れ添った艦娘に送られる仮初の結婚指輪。出自が不明な艦娘に対して、それでも共に生きることが望んだ提督たちが生み出した慣習が、ケツコンカッコカリである。法的な意味のある婚姻ではないが、提督にとつても艦娘にとつても特別な行為であることに違いはない。

「なるほどな。これを置いていけなかったんだろうさ。……。上に見つかれば実験台にされることは目に見えてるからな。問題はこれをどう報告するかだが……」

「……。その心配は、無用だクマ」

執務室のモニターに、その様子は映し出されていた。球磨の胸元、スカーフに、バツジのようにつけられた小さなカメラが球磨の作戦行動の視点を常に送っていたのだ。少佐のために、明石が開発したものである。

「おお、これはこれは……」

少佐が感嘆の声とも言えるような声を上げた。その隣で、大淀が目を泳がせながらモニターを食い入るように見つめている。

「あいにく私はこの世界の事情に詳しくなくてね。あれが何なのか教えてくれよ、なあ鹿島監察官殿？」

はつとして、大淀は扉の方を振り返った。いつの間に入ってきたのか、鹿島がそこにいた。

「お気づきでしたか。隠密には少々自信があったのですけど」

「諜報に通じていそうな君なら知っているんじゃないかね？あれは何なのかを」

「・・・深海棲艦ですよ。あれは紛れもなく深海棲艦です」

二人の間の剣呑な雰囲気、大淀は口を開けずにいた。鹿島はこの空気の中でも微笑を崩さない。それがまた、提督の笑みとはまた違う気味の悪さを演出している。

「そうか、なるほど。では聞き方を変えようか」

少佐がゆっくりと振り返り、鹿島に向き直った。

「艦娘と深海棲艦は同一の存在なのかね？」

Gleich und gleich gesell  
t sich gern. 7

「か、鹿島監察官……、どうしてここに？」

大淀が喉から絞り出したような声で、恐る恐る言った。

「失礼ながら、この部屋に盗聴器を仕掛けさせていただきました。何やら興味深い物を見つけられたようでしたので、是非私にもお教え頂きたいと思ひまして参りましたのです」

「なるほど。どうやら我々には防諜意識が足りていなかったようだ。まあ今はそのことはいい。私の質問にお答えいただけようか、監察官殿？」

少佐の言葉に、鹿島はしばし口をつぐんだ。二人に挟まれた大淀が、おろおろと二人に視線を向ける。二つの無機質な笑みの対峙は、大淀にとってひどく長いものに思えたが、やがて鹿島が切り出す。

「質問に質問で返す無礼で申し訳ありませんが、なぜそのような仮説に到ったのか、お聞かせ願えますか？」

「なぜ、ねえ。この期に及んでなぜ何も無いと思うが、まあいいだろう。なあ大淀」

「え……、あ、はい！」

重苦しい空気に吞まれていた大淀も、少佐の言葉でようやく抜け出したようで、あわてて少佐に向き直った。

「球磨の言うように、あの指輪は特別な艦娘の証ということではないのかね？」

「はい、あれはケツコン艦……泊地でも最精鋭の部類に値しますし、提督とも非常に親しい間柄であったことは間違いないかと」

大淀によるケツコンカッコカリの説明を聞いた少佐は、間違いはあるかと問いかけるように鹿島に目をやった。鹿島は何も答ええない。無言の肯定といったところか。

「じゃあ推理といこうじゃあないか。そもそも艦娘とは何だ？ 深海棲艦とは何だ？ なぜ対になるようにして両者は存在している？ 深海棲

艦という脅威に対応するために人類が開発したというのなら、艦娘の詳細はなぜ軍部の中でも機密として伏せられているのだ？ 深海棲艦が先に現れたのか、艦娘が先にあつたのか、私にはわかりはしないが、この二つが同一の存在であるとしたら、この状況にも説明がつく」

誰も相槌は打たない。少佐も構わず言葉を続けた。

「仮に、艦娘が何らかの要因で、吸血鬼に血を吸われた処女童貞のように深海棲艦へと姿を変えたとしたら？ ああ、きつとこんな話だろう。度重なる激戦の中で深海棲艦化したケツコン艦を艦娘に戻すため、密かに泊地の地下で研究を進めていた。その執念はどれだけ敵が侵攻してこようと曲げることはできなかった、と。なんとも涙ぐましいことじゃあないか？」

「面白いお話ですね。ですがそれで両者を同一のものとするのは些か早計ではありませんか？ 艦娘とも、深海棲艦とも関係のない、一般の人間だって深海棲艦化するのかもしれないじゃないですか」

「確かにそうだ。だから情報を頂きたいのだがねえ。君たちは一体私の何が不満なのだね？」

その相手は無駄に煽っていく態度ではないでしょうか、と大淀は思ったが、流石にこの状況で口に出すことはできなかった。当の鹿島は煽りに乗せられることもなく、相対している。まるで二人の剣士が互いに距離を図り合っているかのようだ。

「もう一つだけ、お聞きしたいことがあります。貴方が深海棲艦と戦う理由、これを確認しておきたいのです」

先に均衡を破つたのは鹿島だった。鹿島は更に質問を挙げ、間髪をいれずその意図を説明した。

艦娘の指揮官たる存在として現れる、漂流者。その存在そのものの意味を彼女、海軍は調査しているという。

「考えても見てください。正体不明の人類の敵、深海棲艦。深海棲艦に対して人類の有する唯一の戦力、艦娘。両者の存在としてはこれである意味で完結していると思いませんか？ 対になるようにして存在している私達と深海棲艦とは別に、どこからか現れた貴方達、漂流者

は一体何の指名を帯びて我々を率いるのでしょうか。そして我々に漂流者がいるように、深海棲艦にも指揮官がいるのか、貴方達漂流者がその答えを知っているのなら情報を提供していただきたいのですよ」

「既に伝えた情報で全てだよ。重症を負い、私の戦争も終わりかと思っていたが、得体の知れない男に出会い、気がついたらここにいた。それだけだ」

まるで現実味のない話であるが、事実である。少佐としてもそれ以上のことは知ったことではない。それを聞いた鹿島は、案外薄い反応を見せた。どうやら他の漂流者からの情報と大差ないものであったようだ。

「そうですか……。では貴方個人の戦う理由を教えてくださいませんか？ 私達に協力していただける理由と言い換えても構いません」

「戦う理由？ ふむ、戦う理由ねえ」

「……やはり、相手が化物だからですか？」

「何？」

鹿島が挟んだ言葉に、珍しく少佐が驚いたようだった。わずかばかりではあるが。

「秘書艦の長門さんにお聞きしました。なにやら化物という存在に対して並々ならぬこだわりがあるようで。そうした類の方が漂流者の方にもおられましたから、貴方もそうした理由をお持ちなのかと」

そういえば提督が着任した直後、長門からそのような話を聞いたな、と大淀は思い返す。あの時は雑談として軽く流してしまっただが、提督にとって重要な信条であったのだろうか。

「深海棲艦が化物だから、私は君たちに味方し、奴らと戦うと？」

「私はそのように受け取りましたが、間違っていますか？」

「間違っではないないさ。そのほうが私の好みだ。だが大元を突き詰めればそれは正確ではない」

少佐は椅子から立ち上がり、大仰な身振りをつけて語る。

「敵だから戦い、殺すのだ。人種も種族も国も組織も思想も宗教も、有象無象森羅万象全てそこに至る原因に過ぎない。敵がいるからこそ、

そこに鬪争が生まれ、鬪争は戦争を育む。深海棲艦という敵が生み出す巨大で未知の戦争が私を待っているのだ。ならばこそ私はそれがほしい！そう、とどのつまり私は戦争が好きなんだよ。ご理解いただけるかな？」

また提督の発作が始まったか。ついそう思う大淀に対して、鹿島はあくまで真面目にその言葉を聞き届けた。

「なるほど、戦争の相手は関係なく、戦争行為そのものを行うことが目的であると、そういうことですか」

「如何にもその通りだ」

「個人的には度し難い思想であるとは思いますが。．．．ですがその相手が深海棲艦である限りは、ある程度は許容しましょう」

鹿島の言う許容とは、彼女達がこの鎮守府に訪れてすぐの頃言っていた「海軍省が正式に派遣した司令官ではない」という点を取り下げ、正式に司令官として任命することだろう。この明確な答えが得られたということは良かったと言ふべきか。．．．いや、よく考えれば今この状況の問題は何一つ解決していない。

「で？君たち海軍省に認められたということは、私の質問についても回答が得られるということではないのかね？まずあれの説明をして欲しいのだがね」

「勿論情報は公開させていただきませうわ。．．．と言いたいところですが、おそらく今説明しているだけの時間はないかと」

その意味を問いただすまでもなく、部屋の外からはバタバタと誰かが走ってくるような音が聞こえる。すぐにその足音の主が勢い良く扉を開け放ち、部屋に飛び込んできた。鹿島はすつと横にずれ、先程まで鹿島が立っていた場所に駆け込んだ彼女を迎えた。

「な、長門秘書艦？どうしたので．．．」

「緊急事態だ！機動艦隊が敵主力との戦闘において艦隊半壊規模の損害を追って撤退中！それに、撤退中に比叡が．．．！」

『第一次ショートランド沖海戦、帝国海軍敗北！』．．．男の読む新



聞にはそのような見出しが大きく書かれていた。その記事の内容はこうだ。

——本日未明、帝国海軍ビスマルク諸島泊地に所属する機動艦隊が、先日陥落したショートランド泊地沖に展開する深海棲艦の主力艦隊と交戦、これに敗北せり。また、戦域より撤退する際に敵の追撃、悪天候海域への突入等の混乱が発生。これにより先の戦闘で大破した戦艦比叡が行方不明となった。

悲惨な内容の記事だが、それを読む眼鏡の男に悲観の色はない。他の記事と同じように読み終わると腕時計を一瞥し、そのデスクにかけられていた「昼休み中です」と書かれた札を外し、乱雑に置かれた書類の中から一つを掴み取る。

「次」

金剛率いる機動部隊が半壊し撤退中との報は、すぐに球磨へ伝達された。ショートランド沖にて敵主力を抑えていた機動部隊の敗北は、即ちドイツ艦救出艦隊の復路の安全が保証されないことを意味している。

「緊急事態だクマ。急いで離脱を開始するクマ」

「おい待てー！こいつはどうする!?!このまま放置していくのか!?!」

グラーフが言うのは、当然ながら艦娘とも深海棲艦ともわからぬ、眠れる彼女のことである。正直どうしていいのかは分からないが、このまま見なかったことにして良いものではないことは明白だ。

「ショートランド沖で敵を抑えていたうちの機動艦隊がやられたクマ。何時我々が攻撃を受けてもおかしくないクマ」

機動艦隊が撤退を始めた正確な時間は分からないが、この混乱で伝達が遅れた可能性等を勘案するとそこそこの時間があったはずだ。既に足の早い艦や艦載機隊が展開しているとしてもおかしくはない。それに加えて、救出艦隊の装備は決して交戦に最適化されたものではないため、敵戦力によっては離脱すら困難になる場合も考えられるだろう。

「しかし・・・」

「しかしも何もないクマ？球磨達が受けた命令はあんたらドイツ艦の救出にほかならんクマ。そもそもこれをどうやって運び出すんだクマ？」

「・・・そうだな、いや、すまない」

流石のグラーフもこれには素直に引き下がり、球磨と共に部屋を後にする。少し未練がましいような表情をしてはいたが。

「・・・なんだか落ち着いているじゃないか？さっきまで取り乱していたのに」

「別に落ち着いたわけじゃないクマ。ただ今のクマはあんたら四人に

麾下部隊の五人、合わせて九人もの人命を預かる身だから、何よりこの島からの離脱を優先しているだけだクマ」

機動艦隊撤退を受け、球磨達救出艦隊がショートランドからの離脱を開始した頃、金剛達は泊地を目指しソロモン海を北西へ航行していた。撤退開始から数十分、しつこく追撃をかけてきていた敵攻撃機の追跡を振り切り、戦闘海域からの離脱を果たした頃合いであった。

「金剛お姉様、泊地より入電です。我々機動艦隊、ドイツ艦救出艦隊の両艦隊の撤退を支援する部隊が既にこちらへ向かっているとのことです」

半壊という状況報告の通り、彼女達の被害は大きい。旗艦である金剛こそ小破で済んでいるものの、敵機の猛攻を受けた蒼龍、飛龍の両艦は中破により戦力的に無力化され、他艦の盾としてカバーに回っていた霧島、榛名に至っては大破寸前の有様だった。

「Rogerinのまま出来る限りの速度を保って航行を続けマース！霧島、比叡については・・・？」

「・・・駄目です。比叡お姉様と逸れた海域は敵主力の展開も予想されるため、現状で作戦行動に投入できる戦力では搜索は困難であるとのことです。早くとも現在の作戦が終了し、再編成を経てからでなくてはならないかと・・・」

何よりも大きな損失は、比叡の行方不明であった。ショートランド沖での海戦で大破していた比叡の艦装は、撤退戦での駆動に耐えられず、突入したスコールの強烈な風と波に攫われてしまったのだ。予断を許さぬ深海棲艦の追撃と、吹き荒れる暴風雨から生まれる混乱のため、助ける間もなく波間に飲まれ、作戦行動中行方不明となってしまうたのである。

「金剛お姉様、申し訳ありません。私が比叡お姉様を守りきれませんでした・・・！」

榛名の言葉からは、強い悔しみの色が見て取れる。護るべき対象、しかも姉妹艦を失ったとあれば当然とも言うべきか。

「それは私も同じデース。それにK I Aが確認された訳じゃないデースから、希望はありマス！そう簡単に死ぬような姉不孝な妹じゃないことは私が一番知ってマスからネー！」

「お姉様・・・」

気丈に振る舞う金剛であるが、今一番辛いのは金剛であろうことを榛名はわかっている。妹たちが皆金剛を敬愛しているように、金剛もまた妹たちを何よりも大切に思っていることを知っているのだ。

「私達の飛行甲板が生きていれば索敵機を出すことも出来たのですが・・・」

「蒼龍達の落ち度じゃないデースヨ。明らかに敵の航空戦力はこちらを凌駕していましたからねー」

実際敵主力との交戦では、こちらが正規空母二隻を有する艦隊であるにも関わらず、制空権は敵側にあつた。これは当然敵艦隊が正規空母二隻以上に匹敵する航空戦力を持っているということであるが、げに恐ろしきは砲戦火力においてもこちらに劣らぬものだったことだ。

「通常艦隊六隻編成でこれほどの戦力となるとやはり・・・」

「空母棲鬼級、でしょうか。そうであれば私と蒼龍の艦載機をあわせても太刀打ちできなかったことにも合点がいきます」

「・・・どちらにせよ、救出艦隊とドイツ艦隊が心配デース。無事に抜けられるといいんですけど・・・」

本来ならば救出艦隊の撤収まで時間を稼ぐ筈だった。それが今、こうして先に撤退することを余儀なくされていることに自らの力不足を覚え、金剛は下唇を噛んだ。

「楽観視はできませんが、我々の攻撃で随伴艦にはかなりのダメージを与えているはずですよ。球磨さんを信じましょう！」

「榛名の言うとおりですわ、お姉様！今はいち早く泊地へ戻り、再出撃の準備を進めましょう！」

妹たちの言葉に励まされ、気を取り直す。今は後悔の前に立ち止まっている場合ではない。とにかく早く泊地へ戻り、皆を助けなくては。

「工廠艦明石、出頭致しました」

「うむ。では鹿島監察官殿、ご説明をお願いしても?」

明石が少佐からの出頭命令を受け取ってすぐ執務室へ向かうと、少佐と大淀の他に、鹿島が待っていた。内心何事かと身構える。

「はい。明石さんに来ていただくようお願いしたのは私です。明石さんには工廠艦としてご意見をいただきたいことがあります。お願い出来ますでしょうか?」

「ええ、私にわかることであればお答えしますが……。何についての意見でしょうか?」

「それなのですが、まず見ていただいたほうが早いかなと思います。大淀さん、お願いします」

鹿島に促され、大淀が部屋の片隅に置かれたホワイトボードを引っ張ってきた。そこには、大きく刷られた写真が多数貼り付けられている。

「これは……」

そう、ショートランドで発見された艦娘ないしは深海棲艦の写真である。中継映像の録画からプリントアウトされたものだ。全景が収められたもの、細部を拡大したものなどが雑多に貼られている。明石はそれらにすばやく目を通し、鹿島に向き直る。

「これは、なんですか?艦政本部の記録でもこんなものは見たことがありますね」

「それもそのはずです。この……そうですね、仮称キマイラは先程ショートランド泊地跡の地下で見つかったばかりなのですよ」

「そのネーミングはどうかと思いますが……。とにかく発見されてすぐということですね」

明石は鹿島がその質問に頷いたのを確認すると、再び写真に目を戻した。工廠艦明石には、その任務を遂行するための知識や情報があり、また同時に艦娘、深海棲艦両者の研究者としての知識も持ち合わせている。しかしいずれの知識にもそれは含まれなかった。

「なるほど。これが本物だとしたら非常に興味深いですね。深海棲艦

と艦娘の相互関係を紐解くことができれば研究も大いに進むことでしょう。しかし、艦娘用兵装についても開発が進むことでしよう。できれば現地に行つて調査したいところですが、ショートランドは陥落しているのですよね……。周辺環境から察するに鎮静剤を投与し続けているとかなつていようですから運び出すのは難しい。ああ！でも管理者がいないと後だけ鎮静剤が持つのかわからない！やはり多少の危険を負つても私が現地に突入して」

その捲し立てるような語りは、大淀の咳払いに阻まれた。ハツとして大淀を見ると、ジト目で明石を咎めていた。

「明石博士、君の高説を聞きたいのは山々なんだが、生憎と私は基礎知識に乏しくてね。濟まないが基礎から解説してくれないかね？」

「た、大変失礼しました。艦娘と深海棲艦の関係性について、と言つてもかなり私見によるところが多いですが、説明させていただきます。……その、すみません」

Gleich und gleich gesell  
tsich gern. 9

「えー、そもそも深海棲艦の出現は西太平洋地域から始まったと推測されています。程なく人類は世界的に制海権を喪失することとなりますが、特に早期から深海棲艦と交戦していた極東地域の諸国は甚大な被害を受けました。今や周知の事実ですが、深海棲艦に通常兵器は効果が薄く、艦娘の登場、運用が始まる前に旧来の軍用船舶の大半が失われました。その後、日本で艦娘による反攻作戦が開始され、現在に至る、というのが今までの大きな流れになります」

「ここまではいいですか、というように少し間を置いた明石だが、案の定というべきか少佐の反応は薄かった。

「いや・・・なんとというか、端折りすぎじゃあないかね？私は艦娘の登場に関する諸々が知りたいのだが」

「それに関しては、私から説明いたします」

鹿島が変わって口を挟んだ。

「答えは単純で、記録が残っていないのです」

「記録が残っていない？深海棲艦はともかく、艦娘に関しては人類が運用しているものだぞ？開発に至る記録か、なにかしらの情報位あるだろう？」

「いえ、本当にはないんです。深海棲艦の記録は初期の交戦記録を始めとして散見されるのですが、艦娘の記録は人類が初めて深海棲艦の泊地攻略に成功した、つまりは艦娘の存在を世に知らしめた作戦以前に遡ることができないんです」

その説明に、少佐も訝しげな雰囲気で見ると、彼女もその通りというように頷く。鹿島曰く、艦娘の運用が始まったのは日本国の旧来海軍船舶——所謂海上自衛隊の護衛艦という奴だが——が甚大な損害を受け、組織だった抵抗が不可能になった後であることは間違いないらしい。しかし艦娘が実戦投入されるまでの道筋については一切が不明であるとのことだった。

「ふむ、出処不明の技術ねえ……。日本政府の秘匿していた超兵器技術だったのか、はたまた深海棲艦と同様に突如としてこの世界に現れたのか」

「どちらにしろ、実績のない段階で公表するのは難しかったんじゃないでしょうか。艦娘は見ての通り少女ですので、非人道的という声が強かったのではないかと思います。実際に艦娘が公表されたときにも少なからずそのような話があったと聞きますし」

明石の意見に、少佐は肩をすくめ、非人道的ねえ、とこぼした。少佐が思い出すのは他でもなく、かつてドイツ占領下のワルシャワで、そして南米で追い求め続けた吸血鬼のことに違いない。彼に言わせれば、人道などというものは純然たる戦争に混じる不純物に過ぎないが、世の中それを気にするものが大半なのもまた事実。

「そういう訳ですから、現段階だと関係性どころか、双方の起源すら謎だった訳です。それが今回見つかった素体……。と言っては悪いですけど、彼女の研究ができれば関係性がわかるかもしれないんですね。深海棲艦の研究が進めば、戦闘をもっと有利にできる情報が得られるかも知ですし、その根絶も可能になるかも知れません！更には……。」  
何やらスイッチが入ったようで、明石がつらつらと語り始めた。その内容も興味深いのだが、少佐としてはもう一つ別に気になった点がある。

「……。つまり、君は公開する情報もないのに主導権を握っていたということかね？」

「あら、知らないということも情報ですよ。」

くすりと笑いかける鹿島に、少佐もまたにやりと笑みを作る。……笑みというより、凶相の類ではあるが。

「改めて自己紹介致します。軍令部戦史部所属の鹿島と申します。以後こちらの肩書でお見知りおきをお願い致します」

「大淀、軍令部戦史部というのは？」

「はい、その名の通り深海棲艦との戦いの戦史を編纂している部です。」



戦史編纂と言っても、艦娘、深海棲艦両方に対する情報収集や研究を行っているところでもありますので、特務機関に近いとも言えます」つまり、諜報機関という訳か、と納得する。当初より彼女に得体のしれなさを感じていた少佐だが、これで腑に落ちた。

「我々戦史部は内地から戦線最前線まで広域にわたって艦娘、深海棲艦、そして貴方方漂流者に関しての情報収集を行っています。軍令部の作戦立案や各戦線指揮の為です。基本的には各鎮守府から送られてくる情報をまとめたりしていますが、漂流者や今回の「キマイラ」など、直接出向かなければならない事態も多いので。私が軍令部からの実動部隊として派遣された訳です」

「なるほど、では香取監察官は？」

「香取姉え・・・失礼、香取は事前の紹介通り、海軍省から派遣された監察官です。人事に関する決定権を持っていますから、漂流者の方へ海軍への協力をお願いすることがお仕事ですね。漂流者の方々は軍事的な知識を持ち合わせていることが多いので、士官が不足している海軍としてはぜひ協力していただきたいのです」

香取は海軍省から人事権を委任された監察官、鹿島は軍令部の諜報員。それが両者の立場ということだ。この場に香取がいないのはその管轄の違いだろうか。

「結構だ。説明ありがとう、鹿島殿」

どういたしまして、と微笑む鹿島から明石へ注目を戻すと、どうやらその話が誰にも聞かれていないと言うことにも気が付かず、未だ喋り続けているようだ。

「あー、なんだ、明石。面白い話だが要点の整理がしたいのでね。すまないがもう一度最初から話してもらえないか？」

少佐が明石を止めると、それを聞いた明石は嫌な顔一つせず、むしろ嬉しそうにわかりました、と言って同じ話を始めた。これが噂に聞く日本のオタクという奴だろうか、と内心想ったのは秘密である。

「まあ先程述べたように、その一切が不明な深海棲艦ですが、我々艦娘

側との類似点からアプローチできると考えています。その一つは私の専門分野、艦装です」

艦装。言うまでもなく艦娘が運用する兵装のことである。深海棲艦の中でも駆逐艦などの姿形は化物と言うに違いないが、重巡洋艦や戦艦クラスになると見た目はかなり艦娘に近い。姿が人形である、という点を除けば、艦娘と深海棲艦の最たる共通点は艦装を身にまっている、ということろだ。

「艦娘が艦娘たる所以は、艦装を運用し、艦船だった記憶を持つことです。では、深海棲艦はどうでしょう？ 後者についてはわかりませんが、前者については明白です。あれらも艦装を用いている。艦娘の定義と深海棲艦の定義、その両者に艦装という共通点があるのですから、無関係なはずがないでしょう」

「全くもってそのとおりだな。しかし艦娘はそれら以外はおよそ人間と変わらぬだろう。だが深海棲艦は？ あれに意思はあるのか？ ただ暴れ散らすだけの存在など化物にも劣ると言わざるを得ないさ」

「うーん・・・、それはわからないですねえ・・・。そもそも深海棲艦は生物であるかすら不明ですし、社会性を持つているのかも怪しい。一部人語を解する深海棲艦もいるという噂もありますが真偽は不明。とにかくわからないことだらけです」

だからこそ、是が非でも「ギマイラ」を回収しなくてはならないのだと明石はいう。深海棲艦の素体として研究することができるならば、その影響は多岐にわたると予測される。当然艦装についても研究は進むだろう。

「そうして高性能化された艦装を運用し、深海棲艦を討ち滅ぼすか。素晴らしいじゃあないか！」

「んー、私個人としては艦装の高性能化よりも研究のほうをメインに考えたいんですけどねえ」

艦装の兵器としての進歩の予想に興奮する少佐とは裏腹に、明石はそれ自体にはあまり執着がないようだった。

「私は工廠艦ですから、もちろん艦娘を兵器として最大のパフォーマンスで運用できるようにすることが使命です。でもそうして運用し

ている艦娘の仕組みもわからないなんて気持ち悪いじゃないですか。自分が管理する兵器のことを理解しつくしていないなんてありえない！ましてや自分も艦娘なのに！……あ、すみません、話がそれちゃいましたね」

「いやいや、素晴らしいことだ。私ももつともつと知りたくなつたぞ、私の敬愛する部下の諸君らのことを。そして敵たる深海棲艦のことを！ああ、そうだ。まだ私は何も知らなかったじゃあないか！こんなに面白い戦争が何者かに彩られているのかを！彼らを、我らを理解しよう。もつともつと戦争が面白くなるぞ!!」

水平線に太陽がかかり始めた頃、泊地内は未だ多数の艦娘が行き来している。つい三十分ほど前に金剛率いる機動艦隊が帰還し、收容作業等で皆対処に追われているためだ。特に損傷の大きい榛名と霧島はすぐに工廠へ運び込まれ、発艦機能が無力化された蒼龍、飛龍の艤装と合わせて修理が始まっている。明石に夕張も駆り出され、急ピッチで作業が進められていた。

その間、旗艦であり、比較的被害も少なかった金剛により、戦況の報告が行われていた。

「状況は先に長門秘書官から報告がされていたと思います。シヨートランド近海に展開していた敵戦力は想定よりかなり強力なもので、砲戦火力は支援艦隊のお陰で拮抗していたものの、航空優勢は敵にありまシタ。できる限りの応戦は行いまシタが……。申し訳ありません、撤退戦中、比叡がM I Aとなつてしまいまシタ」

普段ムードメーカーとして常に明るい金剛も、流石にその鳴りを潜めているようだ。指揮下にあつた僚艦が行方不明になっており、更にはそれが姉妹艦であるとなれば無理もない。

「聞くに激戦だったのだろう。よく生きて帰ってくれた！大淀、比叡の搜索救助については？」

「機動艦隊の皆さんからの情報から、比叡さんが行方不明になった海域周辺で漂流場所の当たりをつけています。が、いかんせん戦力の抽

出が足りません。先の作戦においてかなりの戦力を投入しましたので、予備戦力として泊地に待機していた艦娘だけでは当該海域での搜索任務遂行は不安が残ります」

「ふむ、艦隊の再編成にはどれほどかかるかね？」

「まず二航戦のお二人の艦装が修復されてからでないかと厳しいです。機動艦隊が交戦した強力な敵航空部隊と再接触する可能性を考えると、こちらも航空戦力が万全の状態での出撃でないと。極力早く出撃できるようにしますが、どう見積もっても明日以降になります・・・」

明日以降、とつぶやき、金剛は肩を落とす。危険度の高い海域での遭難で、できることならばすぐにでも駆けつけて探したいのだろう。姉妹間の繋がりが一際強い金剛型四姉妹のことであるから、その心境は周囲からも察して余りある。しかし金剛自身、身体的にも、精神的にも色濃く疲労が見える状態で、無理を押し出撃しても成果は上がらない。むしろ二次被害で自分のほうが遭難しかねないだろうということは、長女であり艦隊旗艦も務めることの多い金剛が一番わかっていることだった。

「比叡・・・無事でいてくだサイ・・・」

焦れる皆の気もちを知ってか知らずか、太陽はゆっくりと、しかし歩みを止めることなく水底へ沈んでゆく。

同刻。とある砂浜に一人の少女が打ち上げられていた。その背にはボロボロの艦装が背負われている。気を失った少女の傍らには、もう一人少女がおり、その様子を伺っているようだ。やがて傍らの少女は壊れかけの艦装から彼女を引き剥がし、ひよいと右肩に担ぎ上げた。そして穏やかに吹き抜ける潮風にその銀色の髪をためかせながら、ジャングルの奥へと消えていくのであった。

彼女が意識を取り戻したのは、地面に乱雑に落とされた衝撃を持つてであった。ぼんやりとした視界と思考で当たりを見渡そうとするが、その前に何者かに水を顔にかけられ、強制的に覚醒させられる。咳き込みながら状況を理解しようとするが、それも叶わぬまま、うつ伏せにされ、背中に乗りかかられる。そして後頭部に硬いものを押し付けられた。

「おい、起きろ。わかつちやいると思うが、貴様に銃を突きつけている。これからいくつか質問するが、私の質問にはJaかHeiで答えろ。わかつたか?」

「はえ・・・?だ、だー?いえつと?ってなんですか・・・?」

「・・・はいか、いいえで答えろ」

「あ、は、はい」

この場の雰囲気にもまるで似つかわしくない、そんな間の抜けたやり取りを挟んでから、質問が始まる。

「貴様は日本海軍属の艦娘か?」

はい。

「貴様はソヴィエト・ロシアに依頼を受けて私を探しに来たのか?」

いいえ。・・・そもそも、ソヴィエトは崩壊して久しいはずなのだが、あえて発言はしないでおく。

「本当か?・・・はあ、貴様も遭難者か」

「ガングート、戻ったぞ。・・・その人は?」

のしかかる女をガングートと呼んだのは、どこからかやってきた男だった。

「おお、同志!海岸に漂着してたのを見つけてな、素性が知れんから尋問していたところだ!」

連れ合いが現れ、安心したのかようやくのしかかりの状態から開放される。すると今度はガングートに起こしあげられ、座らされた。そ

うしてようやく二人を視界に収めた。銀髪で白い海軍服を羽織った女と、対象的に黒い軍服を羽織った小柄の、どこか自分の司令官に似たところのある男の二人である。

「手荒な真似をしてすまない、僕たちにも事情があつてね。僕は新城直衛と言う。君は？」

「わ、私は比叡です！よろしくおねがいます！」

新城と名乗った男は比叡の自己紹介によろしく、と頷くと、新城がガングートと呼ぶ少女にも自己紹介を促した。

「私はソヴィエト海軍のガングート級一番艦、ガングートだ。オクチャブリスカヤ・レヴォリユーツィヤと名を変えたこともあつたが、まあ長いのでガングートの方でいいぞ」

「では自己紹介も終わったところで、本題に入ろう。・・・と言いたいところだが、比叡、君もかなり体力を消耗しているだろう？我々も遭難者でね。食料やらを探してきたところなんだ。ひとまず食事しようじゃないか」

比叡が新城と出会った頃、泊地でも新たな動きが起きていた。球磨率いるドイツ艦救出艦隊が無事、ドイツ艦を連れて帰還を果たしたのである。先に帰還した機動艦隊の奮戦もあり、救出艦隊は交戦もなく、無傷での作戦遂行であつた。

「ドイツ艦救出艦隊、旗艦球磨以下六名。任務完了しましたクマ」

提督執務室では、救出艦隊の面々による帰還報告がされていた。彼女らにも機動艦隊の被害は伝わっており、駆逐艦の五人はそれぞれ不安を携えた表情をしている。対して球磨は凜とした態度を崩さない。「うむ、球磨、暁、響、雷、電、そして島風！困難な作戦であつたが、ご苦労であつた！機動艦隊は戦術的敗北を喫したが、諸君らの帰還を持って我らの戦略的勝利は達成された！次なる作戦のために今は休息を取り給え。下がっていいぞ」

彼女ら六人が退室し、一人残された少佐は、逸る気持ちを抑えて次の来訪者を待っていた。そう時を置かずして、執務室をノックする音

が聞こえ、思わずおお、と声を上げ、机から立ち上がる。

「失礼します。提督、ドイツ艦の皆さんをお連れしました」

大淀が入室し、続いて四人の艦娘が入室してきた。彼女らを見た少佐は一層目をギラつかせ、また一層ニンマリと笑う。ドイツ艦達は執務机を挟んで少佐の前に整列し、ビスマルクの号令の下に、敬礼する。「Achtung! 麗しのドイツ艦の諸君、懐かしの我が祖国の戦友諸君!! 私達の鎮守府へようこそ! 姿は変わったが、時を越え世界すらも越えて、諸君らと再び戦争をとものにできること、実に歓喜の極みだ!! ぜひ一人ずつ話を聞かせてくれ給え!!」

「ドイツ海軍より同盟国日本の太平洋戦線支援のために派遣されましたドイツ艦隊旗艦ビスマルク、以下四名。救出に感謝いたします。本来は先に陥落したショートランド泊地へ派遣される予定でしたが、以後このビスマルク諸島泊地で指揮下に入ります。よろしくお願いいたします、提督」

ビスマルクは恭しく挨拶をする。少佐は恍惚の表情でそれを聞く。いつにもまして上機嫌そうだ。

「ああ、そう畏まらないでくれたまえよ。せっかく出会ったドイツ人同士だ。肩の力を抜いて親交を深めようじゃあないか」

「Schiffbrüchiger... 漂流者だったかしら。わかったわ。正直私たちがただの艦船だったころのドイツ軍人と出会えるなんて思ってもみなかったし、お互いに理解を深めましょう」

ドイツ艦隊の面々は泊地へ到着した後、鹿島の立ち合いの下で大淀から漂流者に関する説明を受けていた。少佐がナチス時代のドイツ軍人であったことから、ドイツ艦へ事前にそれを伝えておいたほうが話が円滑に進むと考えての行動だ。鹿島に関しては、その後の仮称キマイラの情報についてが重要そうであったが、流石に少し見ただけのグラフからは現状わかっている以上の情報もなく、すぐに解放されていた。

「はいはい! 私、Admiralさんのドイツにいた時の話聞きたいです!」

「おお、君は...」

「アドミラル・ヒッパー級3番艦のプリンツ・オイゲンです！」

「プリンツ・オイゲンか！いいだろう。かつて私は武装SSで少佐として大隊を指揮していた。東部戦線だね。当時は海軍とはほとんど関わりがなかったが、何の因果か今は地球の裏側まで来て艦娘の指揮を執っているというところだ」

ほえー、とふわふわした反応のプリンツだが、対してグラーフは武装SSか、と少し含みのある反応だ。

「いや、すまない。個人的に武装親衛隊は好きになれなくてね。いや、総統閣下が好きになれないといったほうがより正確かな」

ちよつとグラーフ、とビスマルクが制止しようとするが、それを遮ったのは少佐であった。少佐は興味深いものを見る目で、分厚いレンズの眼鏡の向こうから覗いているようだ。厄介なことにならないければいいが、とビスマルクは思う。性格に頑固なところがあるグラーフだが、こんなところでそれを出すことはないだろう。何せ相手は元武装親衛隊の士官であり、すなわち第三帝国総統アドルフ・ヒトラーの忠実な私兵だった男だ。幾ら艦娘といえども、総統を批判して何もなしではすまないだろう。

しかし、ビスマルクの予想とは違い、少佐は特にそんなことに気を留めることはなかった。

「君は、グラーフ・ツエツペリンだな？そうかそうか、かつては終ぞ完成することはなかったが、艦娘として大洋へ出たか。ああ、素晴らしい。なんとも、なんとも素晴らしい」

「素晴らしいものか。完成を目前として滅びゆくドイツを傍観していることしかできなかった。結局私は勇敢に死ぬことすら知らなかったんだ。少しくらい恨んだっていいだろう？」

「そう悪く言うものではないぞ。総統は戦争に無知な男であったかも知れんが、史上最大で最高の戦争を作り出した男だ。それだけで、崇拜すべき男だとは思わないかね？」

しばらくお互いを見透かすかのように向かい合った二人を、大淀も、ビスマルクも、オイゲンも口出しできず見守っている。

「・・・グラーフ。喧嘩は、ダメだよ？」



唯一、沈黙を破ったのはユーこと、U—511だった。

「むつ、いや、ユー。別に喧嘩してるわけじゃないぞ。ただ彼が元武装SSだというから思ったことを言っただけで……」

「ダメだよ、新しいadmiralと仲良く、しなきゃ。ほら、Es tut mir Leid、って」

むむむ、とグラーフが唸る。グラーフとしては、本当に他意なく思ったことを言っただけだったのだが。

「ハツハツハー！いや、お嬢さんの言う通りだ。君がU—511だな？  
ありがとう、U—511。煽るような真似をしてすまなかつた！Gr af, Tut mir Leid！」

ユーの言葉に、少佐が態度をやわらげ、グラーフに先んじて謝罪を述べた。ユーはユーとお呼びください、と改めて自己紹介をする。すっきり緩んだ空気に、グラーフは頬を搔いて肩をすくめた。

「Es tut mir Leid, admiral. 別に突っかかるつもりはなかつたんだ。すまなかつた」

「構わんさ、だが立ち話もこの程度にしようじゃないか。皆疲れているだろう？何かつまみながらビールでも飲もうじゃないか。ここ  
の鎮守府の料理は絶品だぞ！」

夜の帳が下りたころ、南のどこかの島で、薪を囲んで食事する三人の人影があった。比叡、ガングート、そして新城の三人である。ガングートと新城が捕まえてきた魚を捌いている間、比叡は木の実を貪っていた。つい数時間まで漂流していた比叡を氣遣って二人が休ませ  
ていたのである。

「いやー、お二人ばかりに準備を任せてしまつてすみません」

「何、気にすることはないさ。相当に体力を消耗しているだろう？今は回復に努めるべきだ」

会話も交えつつ準備を進める一行であったが、同時に現在に至る事情をそれぞれ語るなど情報共有を行っていた。比叡に関しては言わずもがな、である。

「どうだ比叡、痛むところはないか？ほら、私の Водка を分けてやる。もう少しから大事に飲めよ？」

ガングートがスキットルを取り出し、比叡に渡す。

「手荒な真似をして悪かったな。私はソヴィエト海軍から日本に戦力供与で派遣されたんだ。配属されたのは最前線で激戦続くショートランド泊地。近頃は風向きもよくなり、分の悪い出撃を繰り返していたんだが・・・最後の出撃を最後に記憶がない。気が付いたらこの島で同志新城に拾われていたというわけだ」

「ひえー、そうだったんですか。でもなんで私を警戒していたんですか？救助を待っていたんじゃないんですか？」

「馬鹿な、作戦行動中に行方不明になっているんだぞ。祖国に戻れば脱走で軍法会議もありうる。下手したら銃殺刑まであるんだ。私はまだ死んでやるわけにはいかん」

ガングートが新城を見ながら言った。

「銃殺刑ってそんな・・・大げさじゃないですか？ロシアだって今はそんな国じゃないと思いますけど」

比叡の言葉を聞いたガングートは、一つため息をついて比叡に向き直る。

「ロシア連邦という国に変わりがなくとも、海軍は別だ。私のような帝政ロシア時代の艦もいるが、ロシア海軍属の艦娘の大半はソヴィエト時代の艦娘なんだ。今や海軍内はソヴィエトに回帰していると書いてもいい・・・はあ、十月革命の名を与えられたこの私が、ソヴィエトを恐れなくてはならないとはな・・・」

ガングートは非常に複雑そうな表情で空を仰ぐ。

「ふむ。ロシア連邦、ソヴィエト、日本。どれも聞いたことのない地名だ。やはりここは僕の知っている世界ではないようだな」

二人の会話を聞いていた新城が作業をしながら口を挟んだ。あるいは、気まずい雰囲気を感じたのかもしれない。どちらにせよ、比叡にとっては渡りの船であった。

「皇国という名の国もこの世界にはないというし、そもそも技術も進んでいるようだ。艦娘なんて兵科は僕のいた世界には存在しなかつ

たぞ」

新城が、彼が元居たという世界について語るが、やはり比叡達にとっては知らぬ世界であった。

「我々はお互いに寄る辺なき者ということだな。ならばここにいればいいさ。幸いにしてこの島は食料豊かなようだ。数人が生きていくのに困ることはないだろう」

「同志新城……！ そうだな、何処へも行けないのならばここで生きればいい。今日からこの島が、私と同志の、たった二人のソヴィエト連邦だ！」

ガングートは目にうつすらと涙を浮かべて感激しているようだ。新城も、帰るすべがないのならばと居直っているらしい。確かにこの島は豊かのように、軍人二人が身を寄せ合えば生き延びるのも難しい話ではないだろう。しかしそうなると困るのは比叡である。

「えー……さすがに不便じゃないですかあ。帰りましょうよお」

「帰るといっても、僕はそもそもこの世界の者ではないからな。そもそもこの辺りは戦争の最前線だったんだらう？ 果たして救援が来るかどうか、だな」

「ひええ……。お姉様あ、帰りたいですう……」

夜更け、漂着した比叡ら三人は焚火を囲み、時間を過ごしていた。ガングートはすでに横になり、寝息を立てている。新城が火を絶やさぬよう、薪をくべる横で、比叡はとも目が冴えているようで、静かに星空を見上げていた。

「眠らないのかい？疲れているだろう。それとも、僕たちが信用できないかな？」

「いえ、そんなことはありません。ただちよつと、眠れなくて」

「そうか、と返す新城に比叡が視線を向けると、彼はどこか興味深げに比叡を見返していた。

「君も、艦娘とかいう兵科の兵士ということだが。その艦娘について、僕に教えてくれないか？ある程度はガングートに説明を聞いたのだが、改めて聞いておきたい」

「はい、私ができる範囲でよければですけど・・・」

比叡は艦娘の概要について新城に説明する。それは少佐が鎮守府に着任してすぐに長門から説明された内容とおおよそ同じ内容である。

「なるほど。およそガングートと聞いた話と同じだな。深海棲艦とかいう化物と戦うことのできる唯一の存在。艦娘はこの世界にかつて存在した艦艇が人に化けたようなもので、その記憶を引き継ぐが、これもまた正体不明・・・。全く、意味が分からないな」

新城は頭を掻きながら、空を仰いだ。

「深海棲艦が何なのかわからないのは、まあいい。だが艦娘がどこから来たのかわからんのは一体どういうことだ？話を聞いた感じでは、どこかの軍が開発したというわけでもなさそうだ」

しばらくぶつぶつと独り言のように話し続けていた新城だが、考えが煮詰まってきたようで、ごろんと寝転がった。

「そろそろ僕も眠ることにする。君も睡眠をとっておくんだぞ」

「あ、はい。わかりました」

それだけ言い残すと、新城はあつという間に寝てしまった。たくましいなあ、と比叡は思う。また一つため息をついて、また空を見上げてみる。お姉さまと妹たちは無事だったろうか。今日はまだ、眠れそうにない。

夜更けの鎮守府。未だ賑やかな食堂では、少佐とドイツ艦達の食事が続いていた。厨房からは料理とビールがひっきりなしにやって来る。応援に来た鳳翔が振る舞う料理のお陰で、余計におかわりのスピードが上がっているのである。

「本当にこの鎮守府の料理は絶品ね。これだけでもはるばる日本までやって来た価値があるというものだわ」

軽々と料理を平らげ、空のジョッキを侍らせるのはビスマルク。国が変われど、戦艦が大食漢であることに代わりはないようだ。ビスマルクほどではないが、他の三人も十二分に料理を堪能している。無論、少佐もである。

「提督、ご歓談中失礼します」

料理の合間を縫ってやってきた大淀が少佐に声をかけた。その顔にはわずかに疲労の色が見える。救出艦隊の旗艦、比叡の作戦中行方不明の発覚から、搜索活動及び回収作戦の立案のため働きづめなのだ。

「ご苦労。何か進展があったかね？」

「はい。比叡さんが漂流していると予想される海域に多数の彩雲を夜間偵察に出しました。結果としてその大半を喪失することとなりましたが、大分状況が見えてきました。おそらく、空母棲鬼を中核とする艦隊が展開しているものと思われます」

「空母棲鬼？」

初めて耳にする言葉に、少佐が聞き返した。

「はい。深海棲艦の中でも、特に強大な力を持つ個体は棲鬼、または棲姫と呼ばれています。空母棲鬼は非常に高い制空能力を持つ空母型

の深海棲艦で、我々日本海軍も過去に幾度もの被害を受けています。厄介な相手ですよ」

「なるほど。一筋縄ではいかなそうだ。二航戦の二人はどうだね？ 艦装がひどくやられたと聞いたが、どれほどで復帰できそうかね？」

「工廠を挙げて修復に取り掛かっていますが……当初の予想より時間がかかりそうだと明石から聞いています。完全に修復が完了するまでには少なくとも四十八時間は要することです」

四十八時間。この状況ではあまりに長い時間である。比叡の安否を考えれば、一時間どころか一分一秒でも早い救出作戦の開始をすべきであるが、この泊地の誇る正規空母の二枚看板たる蒼龍・飛龍の二人がいなければ、航空戦の天秤は大きく空母棲鬼に傾くだろう。

「現状すぐに出撃できる空母の方となると、龍驤さんだけです。こればかりはどうしようも……」

「ん、待て待てオーヨドとやら。空母ならここに一隻いるだろう？」

グラーフが自分を指さしながら言う。

「しかし……いいんですか？ 到着されたばかりで……」

「構わんだろう。我々はもうこの鎮守府の指揮下にある。助けてもらった礼もしたいところだしな。どうだ、ビスマルク？」

「勿論。我らが提督にドイツ艦の力をお見せしますわ。ただ、これでも空母は二隻。基地航空隊を飛ばすとしても後一隻くらいはいないと話にならない」

ビスマルクの見立ては、大淀も同意するところだ。二航戦の戦力で押し負けたことを考えれば、もう一隻でも少ないくらいだろう。

「前と同じ条件では、同じ轍を踏むだけだろうな。装甲空母か、とびきの練度の空母か。どちらかでももう一隻いれば、やってやれないことはないのだが」

そんなものがぼんどだせれば、苦労はしない。グラーフが参戦してくれるだけでもうれしい誤算なのだ。無理を承知で救出作戦を早期決行するか、二航戦の復帰を待つか。

「……救出を急ぐあまり、二次被害を出してしまつては本末転倒です。やはり、今は待つしか……」

「いや、大淀。いるではないか。空母はただもう一隻。とびきりの彼女が」

とびきりの？と大淀が疑問符を浮かべると同時に、厨房から彼女がやってきた。はっとして視線を向けた大淀に続き、皆彼女を見つめた。

「皆様、デザートをお持ちしました・・・あの、なんでしょう？」

「軽空母鳳翔。他の艦娘達から噂を聞いたよ。今は泊地で居酒屋を営みながら、艦娘達の良き相談役として銃後の護りに尽力しているが、実のところ、この鎮守府の一番の実力者は君であると。君が加われれば、対抗できるのではないかね？」

鳳翔が運んできたアイスクリームを受け取り、口に運びながら、少佐は言った。大淀も、なぜ気が付かなかったのか、と思った。大淀や明石、間宮のように、出撃任務を主とせず、泊地での後方支援を主とする鳳翔であったが、彼女も空母である。そして、詳しい経歴こそ不明であるものの、この泊地に着任する以前は、数々の激戦地を転々としていたと噂されるほどの戦闘能力を持つ。

「能力を評価していただけるのは嬉しいですが、既にほぼ一線を退いた身です。それに、私の艦装も旧式ですし、皆様の足を引っ張ってしまいますよっ。」

「謙遜するのは辞めたまえ。今は君の力が必要なのだ。そして、その力を私に見せておくれ！」

鳳翔は少し戸惑った様子で、大淀を、そしてドイツ艦のほうをちらりと見た。と、そこで初めて、黙々と食事をしていたユーがとてとてと鳳翔のほうに歩きよっているのに気が付く。オイゲンがユーちゃん、と呼び止めたが、やがて鳳翔の足元までやってきて。

「あなたは、U-511、ええっと、ユーちゃんって呼ばれてるのかしら？」

ユーの目線に合わせて中腰になった鳳翔の顔をじっと見て、ユーは静かに微笑んだ。

「いろいろありますよね。いろいろ」

その言葉に、ほんの少しだけあつけにとられたような顔をした鳳翔に、続けてユーが言う。

「お願い、します。グラーフを、助けてあげて」

「・・・助けに行くのはむしろこつちなんだがな。いや、ホーショー、だったか。私からも頼む。力を貸してくれ。我々のために沈んだ艦がいるとなつては、なんとも寝覚めが悪いのだ」

グラーフも椅子から立ち上がり、恭しく頭を下げた。オイゲンとビスマルクも続いて、頭を下げる。

「そんな、頭を上げてください。皆様が頭を下げることなんてないのですから、ああ、困ります」

「鳳翔。夜明けまでに回答を決めたまえ。時は一刻を争うぞ？」

デザートを平らげた少佐はナプキンで口元を拭き、立ち上がって食堂を退室しようとする。ああ、お待ちください、と呼び止める鳳翔に、ああそうだ、と振り向いて、何かを思い出したかのように、手をたたくて見せた。

「君を私に推薦してくれた者がいるのだよ。ぜひ彼女とも話して決めるといい。君の店で待っていると書いていたよ」

居酒屋『鳳翔』の前。いつもは夜遅くまでにぎやかなこの場所も、臨時閉店となった今日は静寂の中にある。店の前に置かれたベンチに一人、煙草を吸いながら暗い海を見つめる艦娘がいた。

「・・・やはり、龍驤さんでしたか」

そこに走り寄ってきたのは鳳翔。食堂からここまで急いでやってきた彼女には、どこかで待っているのが龍驤であるという確信があった。

「おう、悪いなあ、こんな遅くに呼び出してもうて」

「一体どういうことですか？私を推薦だなんて」

「理由か？そうやなあ、一つは単純にあんたしか適任がおらんということ。もう一つは・・・あんたが出るべき話やと思ったから、かな」



龍驤は煙をくゆらせながら、どこか遠くを見つめている。

「何がおっしやりたいのか、わかりかねます。どういう意味ですか」  
らしくなく取り乱した鳳翔に、向き直った龍驤がその目を見据えた。

「あんだ、この泊地に来る前はショートランドにおったんやつて？」

なぜそれを、と言葉が出なかった。それはここに着任してからは誰にも話したことがないはずのことだった。

「・・・なるほど。鹿島さんですか。外からの情報は防げませんものね。そうでしょう？」

そういつて振り返った鳳翔の目の前には、その鹿島が驚いた様子で立っていた。

「気が付かれていたんですか。気配を消すのは自信があるのですけれど」

「悪趣味やな。まあ、ええわ。なあ、鳳翔。あんだが何で出撃したからなのか、詳しい事情は分からんけど、何らかの要因がショートランドであつたんやないかとうちは思つとる。もしかしたら辛いことなんかもしれん。けど、これだけは聞かせてくれ」

そういつて龍驤が鹿島に合図をすると、鹿島は鳳翔に一枚の写真を手渡した。訝しげに受け取った写真を見た鳳翔の様子が一変したのを、龍驤は確かに見た。

「その艦娘を知つとるか？ケツコン艦や。同じ泊地にいたなら知つとるはずや」

龍驤の言葉が耳に入っていないような様子の鳳翔は、しばらく写真に見入っていたが、急にめまいに襲われたように、ふらりと地面に倒れこみかけた。慌てて二人が支えようとするが、すんでのところで持ち直し、大丈夫です、とだけ言つて、龍驤の隣に座りこんだ。そのまま少しだけ、心ここにあらず、といったような状態だったが、すぐに己を取り戻したようだ。

「すみません、龍驤さん。お煙草を一本、頂けますか」

「ええけど・・・。吸うんか？意外やなあ」

龍驤が差し出した煙草を銜え、懐から取り出したマッチで手早く火

をつけると、ゆつくりと、深く吸い、やがて語りだす。

「・・・その子を知っています。いや、知らないのかもしれないかもしれませんね」

どこか曖昧な言葉に、龍驤と鹿島が顔を見合わせる。鹿島も、意図をつかみかねているようだった。

「私を知っているのは、提督と仲睦まじくて、とてもかわいらしい、栄えある一航戦の、赤城さんですよ」

鳳翔は紫煙をぼんやりと見ながら、過去を思い返す。それは、まだ自分が最前線に立ち続けていた頃のことである。

## 母

当時のショートランド泊地は設営されたばかりの新しい鎮守府で、太平洋全域に広がった戦線の中から精鋭の艦娘たちが抽出されて構成されていた。というのも、南方戦線での大規模攻勢作戦としてフィジー・サモアまで前線を押し上げるFS作戦が計画されており、激戦の続く南方戦線を練度の高い艦娘を集中運用して突破するために人員が集められたのである。

その鎮守府で出会ったのが、空母赤城だった。

「すみません、お伺いしたいのですが…提督の執務室はどちらでしょう？」

出会いは、泊地に着いてすぐのことだった。続々と各地から艦娘が集結し、着任している中で、彼女は私のすぐ後に到着したようだった。「ええと、ちょっと待ってくださいね。私も着任したばかりで…。」

持ち合わせていた地図を取り出し、庁舎の場所を探して示して見せる。赤城は場所を把握すると、不安げだった表情をぱっと明るくさせて、ありがとうございます、と言った。

「提督に<sup>ご</sup>挨拶に伺うところなのですが、連れ合いとはぐれてしまつて…」

「そうだったのでですね。私もこれから伺おうと思つていたところで。私は軽空母の鳳翔です。あなたは…」

赤城さん、と声をかける艦娘がいた。他の艦娘や行きかう妖精さんたちの合間を縫ってやってきたのは、赤城とは変わって凜とした雰囲気

の艦娘。  
「赤城さん、こんなところにいたんですか。離れずついてきてくださいといったのに」

「加賀さん！ちようど今こちらの鳳翔さんに場所を伺つてたんです」

加賀と呼ばれた艦娘は、こちらを向いて会釈した。

「ふふ、赤城さんと加賀さんですね。栄えある一航戦のお二人。よろしくお願ひいたします」

この会話が、二人との出会いだった。一航戦の、赤城と加賀。どちらも艦娘として着任してからまだ日は浅いが、抜群のセンスと正規空母としての戦闘力で目覚ましい戦果を挙げている。

「では鳳翔さん、私たちは提督にご挨拶に伺ってきます。また後ほどお話ししましょう！」

赤城はひらひらと手を振りながら歩いていき、加賀はまたはぐれますよ、と急いでそれについていく。私も手を振り返しながら、微笑ましい二人に頬をほころばせた。

「本日付けでショートランド泊地に着任しました、航空母艦、鳳翔です。不束者ですが、よろしくお願い致します」

しばらくして、私も提督の執務室に着任の報告に訪れていた。重要拠点として設営されたショートランドの提督は、予想に反してまだ三十路もいかない、若い男だった。

「鳳翔さんですね。お待ちしてました。こちらこそ若輩者ですが、よろしく願います」

物腰は柔らかいが、瞳には意志の強さも感じさせる、期待の若手といったところか。

「鳳翔さんは歴戦の艦娘だと伺っています。是非お力を貸してください」

「勿論です。必ずFS作戦を成功させましょう」

それから軽くいくつかの確認を行い、執務室を出た。私が退室するとすぐ、次の艦娘が執務室に入っていた。外はまだまだ慌ただしく、資材を運ぶ妖精さん達が右に左に動いている。身辺整理と他の艦娘との交流のため、この後はしばらく自由時間だ。とりあえず、他の艦娘の顔を覚えがてら、鎮守府内を散策するとする。

鎮守府を散策していると、食堂の辺りが何やらざわざわと騒がしくなっている。何かと寄ってみると、一航戦の二人もそこにいた。

「赤城さん、加賀さん。これは一体何の騒ぎですか？」

「うううう……あんまりですうう……あんまりですよお……」

赤城は泣きながら腹の虫をぐう、と鳴かせるという器用なことをしている。そばにいた加賀が、赤城の頭をなでてあやしなから、答えた。「何か手違いがあったようで、食堂に妖精さんが来ていないのです。それで昼食が取れない状況で……」

「あら、それは大変ですね……」

周りを見回してみると、確かに皆食事がとれないことに嘆いているようだ。中にはかなりの長旅をしてきている艦娘もいるため、昼食がお預けというのは少々厳しい。

「食材自体は食堂にあるんですよね？」

「それは、おそらく」

加賀の返答を聞き、艦娘たちをかき分けて厨房の中まで入っていく。調理器具や冷蔵庫の中身など、ささつと確認していき、よし、とうなずく。なんだなんだと見ている艦娘たちに、声をかけた。

「皆さん！申し訳ありませんが、配膳はご自身でお願いします！私が調理をいたしますので、暫しお待ちください！」

そこからはめまぐるしく料理を作り続けた。当初は集まっている艦娘の数もそこまで大人数というわけではなかったのだが、赤城がとにかくたくさん食べるのだ。やっと赤城が満足したころには、私の料理の話を聞いたという艦娘たちが次々とやってきて、みるみるうちに食堂は大盛況となってしまった。途中から料理が得意な艦娘たちが手伝いに来てくれたからよかつたものの、ラッシュが終わるころには、久々にくたくたに疲れてしまった。

料理が渡っていない子達がいなことを確認し、後を任せて厨房を離れる。そのまましばらく歩き、少し迷いながらも目的地を見つけた。喫煙所だ。

「ふう……」

懐から煙草とマッチを取り出し、手早くくわえて火をつける。一息つき、ようやく落ち着いてきた。すると、喫煙所の扉が開き、誰かが入ってきた。

「あれ、鳳翔さんですか」

入ってきたのは提督だった。あれからずっと着任した艦娘の対応をしていたそうで、提督にも少しの疲労が見える。

「少し意外でした。鳳翔さんも吸うんですね」

提督もまた、ポケットから取り出した煙草をくわえ、ジツポライターで火をつけた。

「よく言われます。匂いが嫌いな子もいるので、やめなくてはと思うのですけどね」

「やはり嫌いな子もいますか。僕もやめないといけないかな?」

とりとめのないことを話しながら、煙草を吸っていると、そうだと提督が何かを思い出したように言った。

「食堂で料理を振舞ってくれていたとか。すみません、妖精さんが配置されていなかったとは気が付かず、御迷惑をおかけしました」

提督は丁寧に頭を下げた。いえいえ、と言って返す。確かに妖精さんがいなくて艦娘たちが困っていたが、代わりに料理を作ったのは自分の趣味のようなものだ。

「皆さん、とても美味しいと言っていましたよ。僕も食べたかったな。

今日は食事する暇もなくてももうお腹がペコペコですよ」

「あらあら、それでしたらこの後お食事をご用意いたしますよ」

「本当ですか!それは楽しみです!」

そう言って笑う提督に、私も笑い返した。思えば、料理を他人に振舞ったのは久しぶりだ。

「料理はご趣味で?」

「そうです。最近の配属が激戦区続きだったので、久方ぶりの料理だったんですが、皆さんに喜んでもらえたみたいで」

「皆さん絶賛でしたから。ここが落ち着いたら、お店を開いてみてはどうですか?きつと繁盛しますよ」

お店か、と想像してみる。提督や艦娘達が訪れ、賑やかなひとときを過ごしていく。大きくはないが、皆の憩いの場になるような、そんなお店。

「・・・いいですね。やってみたいです。でも、そんなことができるの

は私が退役した後でしようね」

私は最精鋭の艦娘として、各地を転戦してきた。当然これからも、そうなるだろう。店を構えるなど、今の生活では到底不可能だ。「いいじゃないですか。ずっと先でも。深海棲艦との戦いがいずれ落ち着いたら、鳳翔さんが退役しても問題ない日が来ます。その時のお楽しみということだ」

「ふふ、そうですね。どんなお店がいいかしら」

「僕は居酒屋がいいですね。仕事の帰りに一杯、美人な女将がいる居酒屋で飲んで帰るなんて、最高じゃないですか？」

それはほんの雑談だったが、何故かよく覚えている。自分が艦娘としての役目を終える時のことなど初めて考えたからだろうか。いつか、そんな戦後が来ればいいと、思ったからだろうか。

## 母2

ショートランドに戦力が集結し、運用が始まると、私たちは破竹の勢いで戦線を押し上げていった。精鋭の艦娘たちを集めたという、鳴り物入りで設営されたこの鎮守府だが、実際その前評判に違わず、拮抗していた南方戦線の天秤は大きくこちらに傾いた。

ショートランド近海に展開する深海棲艦を駆逐すると、ソロモン諸島の海域を大きく進み、数カ月もするころには、ガダルカナル島の西方まで前線を到達させていたのだ。艦娘たちは皆大きな戦果を挙げていたが、中でも赤城、加賀、そして私の三人は目覚ましい戦果であった。常に最前線で戦い、敵の航空戦力を無力化し、的確な攻撃で敵艦隊を葬り去る彼女たちの存在で、鎮守府の士気も大きく沸き立っていた。

「皆さん、連日にわたる攻勢作戦への出撃、お疲れさまでした」

三人は提督の執務室で、ねぎらいの言葉を受けていた。ガダルカナルへの突破を確実とした先の戦闘の功のためである。

「近く、より激戦が予測されるアイアンボトムサウンドへの進出を決定します。皆さんには特別休暇を与えますので、英気を養ってください。では、これで解散としますが、赤城は少し残ってください」

赤城を残し、私と加賀は執務室を退出する。空母寮に向かって歩き、執務室の近くから離れると、加賀が恐る恐るといった様子で話しかけてくる。

「あの・・・鳳翔さん」

「はい??どうしましたか?」

話しかけてきた加賀だが、どうやら言い出しづらいのか、もごもごと呟きながら言葉を探しているようだ。あえてはせかさず、待っていると、意を決したように言い出した。

「実は、その・・・ケツコン、するんです」

「ええ!?加賀さんがですか!」

これには驚いた。加賀は大人しい、悪く言えば不愛想なところのある子だ。今では私にもいろいろと話しかけてくれるようになったが、



打ち解けるまでにはなかなか時間がかかったし、休暇などのプライベートルな時間にも、赤城と一緒にいるか、一人で静かに過ごしている。そのため、加賀が提督と特別な仲になっていたというのは意外も意外だったのだ。

「いえ、ケツコンするのは私ではなく・・・赤城さん、です」

勘違いだったようだ。しかし、赤城がケツコンするというのも、ほう、と思った。艦娘の中には提督に熱烈なアプローチをする子もいる。この泊地にもそうした艦娘がいるが、赤城はそういうタイプではなく、色恋よりも食事のほうが大事な子だと思っていた。

「あらあら、赤城さんが・・・へえ・・・。赤城さんもなかなか隅に置けませんねえ・・・」

先ほど提督に呼び止められていたのは、その関係だろうか。これは何かお祝いを用意しなくてはならないな。

「はい・・・。それで、私、心配なんです。赤城さんが上手くやっっているか。赤城さんは少し抜けているところがありますから」

「いえいえ、大丈夫だと思いますよ。赤城さんは根本ではしっかりしてると思えます。それに、多少抜けたところがあつたほうが殿方に好かれるとも言えますし」

「そうでしょうか・・・。しかし・・・」

安心させるように、加賀をなだめるが、どうにも腑に落ちない様子だ。付き合いが長いだけに、赤城のことを心配に思う気持ちも強いのだろう。それに、彼女自身が赤城に依存しているところもあるのだろう。赤城と加賀は一航戦として、運命を共にした空母で、それ故に艦娘として強い絆がある。その相手が自分から離れていくような感覚に、加賀自身気が付かないうちに焦りと不安を覚えているのではないか。

「大丈夫です。赤城さんも加賀さんも。二人とも優秀な子ですもの。きつと、上手くいきます」

「鳳翔さん・・・」

いつも表情の変わらない加賀だが、今は少しばかり不安げな表情が見て取れる。最も、普段から加賀の表情をよく観察していなければ気

が付かないほどのものだが、その機微がわかるくらいには、加賀のことも理解しているつもりだ。

「勿論、私もお力添えします。料理や家事は得意ですから、皆で修業しましょう！」

私の言葉で加賀も不安が解けたか、珍しく少し笑みを浮かべて、礼を言った。

それからしばらくして、提督から正式に赤城がケツコン艦となることの発表があった。一部の艦娘からは悔しがったり、次は自分が、という声が聞こえたが、大半はこれを祝福し、泊地全体に幸せなムードが漂っていた。しかし、それは長くは続かない。激戦、アイアンボトムサウンド攻防戦の開始は、すぐそこまで迫っていた。

アイアンボトムサウンド。ガダルカナル島北方のその海域は、これまで足を踏み入れた戦場の中でも最も危険な戦場と言っても差し支えない。かつての大戦で多くの艦艇が沈んだこの海域には、深海棲艦の一大泊地があると推定されており、展開する敵部隊の質、量ともに他の海域とは一線を画すものであった。精鋭ぞろいのショートランドの艦娘たちでも攻略は一筋縄ではいかず、激しい攻防が繰り返されていた。既に幾度か行われた艦隊決戦では、複数の轟沈艦が出ているような有様だ。それでも泊地が士気を保ち続けられたのは、私たち空母機動艦隊が着実に突破口を切り開いていたからだだった。

「偵察機が敵艦隊を捕捉！軽空母一、戦艦二、重巡三の編成です！」

機動艦隊はアイアンボトムサウンドに進入し、沿岸に沿って東へ向かっていった。進むほどに接敵頻度は増し、敵の編成も強力なものとなっている。

「敵の攻撃が届く前に先んじて叩きます！加賀さん、鳳翔さん、航空機隊を全機発艦させてください！」

旗艦の赤城が命令を飛ばしながら、弓をつがえ、射る。まっすぐに飛んでいく矢は、やがて戦闘機隊となり、敵艦隊へ航路をとって飛んでいく。すぐに続いて私たちも航空機隊を発艦させる。

すぐに先発の戦闘機隊が敵艦隊の直上で深海棲艦の直掩機と交戦に入る。赤城の誇る熟練部隊は、敵の対空砲火を易々とかわしながら、敵軽空母の護衛機を一機、また一機と落としていく。後発の艦攻・艦爆隊が攻撃のアプローチに入るころには、完全に制空権を確保していた。空の守りを失った敵艦隊は、襲い来る敵機を機銃で散らそうとするが、雷撃を止めることは叶わず、まず重巡が、続いて戦艦が魚雷の直撃を受ける。一撃で爆散した重巡たちに対し、戦艦の二隻はそれでもしぶとく生き残り、反撃しようとしていたが、曇みかけられた艦爆隊の攻撃により、一矢報いることもできずに沈んでいった。

あつという間に単艦となった軽空母は、何とか逃げようと進路を転換していたが、時すでに遅し。反転して再アプローチをかけていた艦攻隊の魚雷をもろに受け、あえなく全滅となった。

「敵艦隊の全滅を確認。赤城さん、流石ね」

帰艦する航空機隊を回収しながら、加賀が赤城に声をかける。

「いえ、敵機も少なかったですから、これくらいは」

赤城は謙遜しているが、私も素晴らしい動きだと思った。赤城や加賀とは、演習において模擬戦闘を重ねており、もちろんその強さは知っている。圧倒的な運用機数を活かした強力な正面攻撃を得意とする加賀に対して、赤城の特徴は総合力の高さだ。奇襲でも、高度な機動戦でもそつなくこなして見せるその技量は、機動艦隊旗艦にふさわしいと言える。経験から来る状況判断や練度は今は私が上回っているが、やがて彼女に敵わなくなる時が来るだろう。

「しかし、かなり深く侵攻してきましたね……。一度下がった方が良いかもありません」

ここまでの交戦で、艦載機の消耗も無視できないものとなってきた。同行する味方艦の弾薬も既に半分を下回っていた。

「そうね……。鳳翔さんの言うとおり一度撤退した方が……。赤城さん?。」

「……」

赤城は、東の空に意識を凝らし、じつと遠くを見つめている。

「どうやら、このまま撤退はさせてもらえないようですね」

その言葉の意味はすぐに分かった。微かに、航空機のエンジン音が聞こえてくる。それも十機や二十機といったレベルではない、巨大な編隊が近づいているようだ。激しい撤退戦が、始まろうとしていた。

撤退する私たちに、敵の大編隊が襲い掛かった。すぐに戦闘機隊を全機発艦させ、交戦に入る。次々と発艦した戦闘機たちは、上空で集結し、敵機の群れへと立ち向かっていく。そのまま正面から切り結ぶように砲火を交わす。何機もの敵機をこの一撃で葬るが、数が多すぎる。こちらの戦闘機一機に、深海棲艦の戦闘機が複数機で追い回してくる。何とか敵を振り切り、一機ずつ確実に敵を落とすが、あまりの多さに、すぐに次の敵機に取りつかれる。状況はあまりにも劣勢だ。

「ッ！敵機直上！」

加賀の叫びに、反射的に上を見上げる。既に敵編隊の一部が私たちの直上に到達しており、急降下爆撃を行わんとしていた。艦隊直掩機は敵戦闘機の執拗な追跡を受けており、ドッグファイトを抜け出せないでいる。

「各艦は対空射撃をいっつつ、回避行動を取って！」

赤城の命令に従い、敵艦爆の攻撃を回避しつつ、対空砲火で敵機を散らしていく。砲火を避けつつ爆弾をバラバラと落としていく敵機だが、狙いは逸れて、海原に水柱を立てている。急降下からの反転で勢いが落ちた敵機を再び対空砲火で追立て、撃墜する。が、如何せんすぐに敵の波状攻撃が次々に仕掛けられ、対応が間に合わない。

「不味い、ですね……！戦力が圧倒的すぎる……！」

既に制空権はほとんど喪失しており、少しばかり残存した戦闘機がまばらに抵抗しているだけだ。機銃での応戦も限度があり、徐々に敵機からの至近弾が増えてくる。さらに側方からは、艦攻の編隊が魚雷を投下し、私たちめがけて魚雷が突き進んでくる。額に冷や汗が滲み、焦燥感が見上げる。しかし、これは回避できない――！

ズドンッ！と大きな爆発音と衝撃波が起こり、巻き上げられた水しぶきが降り注ぐ。魚雷が炸裂したのだ。

「くっ！各艦、被害報告を！」

「鳳翔、中破です……！飛行甲板が損傷！それに、後続の子達が……」  
振り向いた時には、同行していたはずの味方艦は姿を消し、六隻編

成だったはずの艦隊は、赤城、加賀、そして私のたった三隻になっていた。轟沈したに違いない。

「っ……！加賀さんは!?加賀さんは無事なの!?返事をして!!」

加賀は、被弾の衝撃からか、少し離れたところにいた。艦装は大きく損傷し、黒煙を噴き上げている。その機能は今にも停止しそうに見えた。

「赤城さん……どうやら私はここまでのようです」

最早艦娘を保護する力すら消えかけているのか、加賀は血涙を流し、口の周りには吐血の後なのか、血がべっとりついていて。その有様に、私は言葉が出なかった。

「加賀さん!!そんなことを言わないで!駄目よ、諦めてはいけないわ!」

「いいえ、自分のことは自分が一番分かります。もう、体に力が入らないのです」

「がくり、と膝から崩れ落ちようとする加賀を、正面から赤城が抱き留める。」

「赤城さん、貴女は生きて帰ってください。提督が悲しむわ」

「加賀さんも連れて帰ります!必ず助けますから、強く気を保って!」  
「いけません。私はもう足手まとい。赤城さんなら、撤退できるはずよ。私を置いていってください。ここは、譲れません」

加賀は赤城に抱擁されたまま咯血する。もう先が長くないことは、私にも、赤城にも見て取れた。

「貴女を残して……沈むわけにはいかないと、思っていたのだけれど。赤城さんには、待っている……人が、いるわ」

加賀の艦装が限界を迎え、爆発する。それと共に、少し緩んだ赤城の手の中からずりりと抜け落ちるように、加賀が倒れる。そして、水面に体を横たえた彼女は、静かに、水の中へ、海の底へ沈んでいく。  
「待って!…いかないで!!加賀さん!!加賀さんっ!!」

慟哭する赤城に、これ以上は待てぬとばかりに敵艦爆が襲い掛かる。

咄嗟に矢筒から矢を取りだし、赤城に迫る艦爆に向けて一矢。矢

は正確に敵機を中心を穿ち、爆弾に誘爆したか、爆散した。すかさず赤城に近寄り、その背を強く押す。赤城は滑り出すように進みだした。

「鳳翔さんっ……！何をっ……！」

「いきなさい！」

戻ってこぬよう、強く言った。

「ここは私が押し止めます。わずかな時間かもしれませんが、貴女にはそれで十分ですね？」

赤城は答えない。だが、元々聞くまでもないことだ。彼女なら、大丈夫。

赤城は大粒の涙を流しながら、全速力で撤退していく。

「さて……ある程度数を減らしたとは言え、未だ大群。対して此方に残ったのは、僅かばかりの戦闘機。状況は最悪ですが——」

素早く矢をつがえ、赤城を追撃しようとするような動きを見せた敵機達に、立て続けに射ち放つ。一機に二の矢三の矢は必要ない。一矢で確実に仕留める。心なしか、動揺を見せたような敵機の隙をつき、追いたてられていた戦闘機隊の生き残りを攻撃に転じさせる。

「——やるときは、やるのです！——ここは通しません！」

「——ん、あら……？ここは……？」

「あ、意識が戻られましたか」

気が付けば私は、病室のような場所で寝かされていた。頭がぼんやりとしており、記憶があいまいだ。起きようとするが、力が入らず、思うように体が動かない。

「そのまま寝ていてください。貴女、ボロボロだったんですよ？偶然海域調査をしていたうちの艦隊が貴女を見つけ運び込んでくれたからよかったものの、かなり危ない状態だったんですから」

白衣を羽織ったピンク色の髪の少女は、手元の書類に何やら書き込みながら、様々な質問をしてきた。

「私は工廠艦の明石です。お名前と所属はわかりますか？」

「はい、ショートランド泊地所属の鳳翔と申します。あの……ここはショートランドではないのですか？」

ショートランド、とつぶやいて、明石はほんの少し複雑な表情をしたように見えた。それもすぐになくなって、明石はこちらの質問に答える。

「こちらは、ビスマルク諸島に新設された泊地です。まだ設営途中ですけど。しかし……ショートランド。うーん……」

明石はまた何かぶつぶつと独り言を言いながら、考え事をしているようだ。

「鳳翔さん、どうして負傷されたんですか？ 貴女の艤装、全損寸前の大破だったんです。貴女自身の体にもダメージが届いている有様です。尋常じゃない有様でしたよ」

「う……ううん、どうにも、記憶があいまいなようで、ショートランドからアイアンボトムサウンドへ出撃したことは覚えているんですが……」

「意識を取り戻したばかりで、記憶が混濁しているのかもしれないね。すみません、もう少し落ち着いてからにしましょう。今はお休みください」

「すみません……。そうさせていただきます」

明石はいくつかの注意事項などについて説明すると、後で食事をお持ちしますね、と言い残して部屋から出て行った。まだぼんやりとした頭は、強烈に睡眠を欲している。欲求にあらがうこともできず、再び意識は落ちていった。

部屋から出た明石は、鳳翔の言葉を反芻していた。

「ショートランド、か。つい先日から連絡が途絶したつて噂を聞いたけど……。一体、何が起こっているというの……？」



I F

鎮守府大爆発！ぶつちぎりバトルフリートガールズ

1

戦況報告。鎮守府正面海域に於いて敵大規模部隊の侵攻を確認。当海域哨戒部隊が交戦するも、壊滅的被害を受け敗走。現在艦隊再編成とともに防衛を行っているが、戦況は極めて劣勢である。

「・・・駄目です、やはり外部との連絡は完全に途絶。支援は望めそうにもありません」

暗く沈んだ大淀の声が司令室に溶ける。最早戦況は詰みに近い。近頃日本近海にまで展開するようになった深海棲艦に対し、日本海軍の対応は後手後手に回っていた。そのつけがとうとうこの鎮守府にまで回ってきたのだ。

「大淀、本土の戦況はどうであると予想されるかね？」

「最後の連絡から大きな変更がなければ、本土近海の制海権奪取後、各泊地、鎮守府への連絡を試みている頃かと」

「なるほど。ではその作戦が成功している可能性とは如何程と予測されるのかね？」

「・・・方に一つに等しいものと思われます」

司令室には再編成された艦隊の各旗艦を始めとして、重要なポストにある艦娘が集結しているが、皆が皆悲観を隠せぬ面持ちでいる。今後の作戦展開に置いて戦況が不利であるほど士気は高く持っていないければいけないことはわかっているのだが、その作戦遂行どころか、

作戦実行すらままならない状況ではそれも仕方ないのかもしれない。大本営との連絡もつかず、本土からの資源供給も当然途絶。資源確保のために遠征部隊を出そうにも鎮守府正面海域すら突破できない始末。

「龍驤秘書官代行、艦隊再編成はどうなっている？」

「正直戦力が不足していると言わざるをえん状況やな。長門は先の防衛戦で大破した傷がまだ癒えとらん。陸奥は構築され始めた深海棲艦の前線泊地を奇襲攻撃した時に戦線離脱に失敗した艦娘三名ともに行方不明。・・・轟沈の可能性も考えなあかんやろうな。空母部隊によって制空権は保持してるけど、ボーキサイトの備蓄はもう長くは持たん。総括して、いつ戦力の均衡が崩れてもおかしくない状況や」

少佐が呼んだように、龍驤はこの状況の中で秘書官代行としての任を受けていた。もつと余裕のある時に任せられていれば、と何度となく思ったものではあるが、それを悔やんでも仕方がない。どんな状況であれ、誰かがこの任を果たさなければならぬのだから。

「まさに八方塞がりというわけか。ああ、なんと絶望的だ。1945年の祖国を思い出すねえ」

少佐はその言葉とは正反対の、恍惚とも言えるような感情を湛えて言う。

「明石!!」

「はい、提督」

「敵前線泊地への打撃部隊を編成する。鎮守府内の高速修復材をかき

集め、各艦娘の艦装修理を急ぎ給え。それから倉庫内の余剰装備を最低限のものを残して全て資源に解体する」

「しかし・・・しかし全員分の高速修復材も、反復出撃を敢行する資源も最早ありません！今余剰装備を解体することは長期戦が不可能になることと同義です！どうかご再考を・・・」

長期戦が現実的でないことは、明石とてわかっている。しかしそれでも、提督の指示を受け入れることはできなかつた。乾坤一擲といえば聞こえはよいが、とどのつまりそれは玉砕にほかならない。

「否！今や機は熟した。我々は大海に包囲された孤島だ。遠く本土は連絡がつかず、増援は来ないだろう。そしてじきに深海棲艦の大群がここへ雪崩込んでくるだろう。ならば我らから打って出ようではないか。狩人氣取りの彼らに、最後に目にも物を見せてやろうじゃないか」

「っ・・・！そんなの賛同できません！死を近づけるだけです！」

「待てば海路の日和あり、とでも言うかね？だがその海路は一体どこへとつながっているのかな？我々は包囲されていて、本土は大洋の彼方に霞んでいる。そんな幻想を追うよりも目の前の闘争に飛び込むほうがずっと有意義で楽しいぞ。倒すべき化物はそこにいて、私達はここにいる。戦うべき戦場はそこにあり、死すべき戦場はここにある！さあ、戦争をしよう。瓦礫の山の片隅で泣きわめいているよりも、ずっとずっと楽しいぞ！」

明石は、言葉を失って立ち尽くした。どちらが正しくてどちらが間違っているのか、わからなくなる。もう逃げる場所はなくて、投降も出来ないのだから、最後まで戦って死ぬのが、正しいのか？・・・わからない。

「龍驤秘書官代行。打撃部隊の選出は君に任せる。命令に従わないものは君の判断にまかす。何者かを打ち倒しに来た者は、何者かに打ち倒されなければならぬ。それは私達とて深海棲艦とて、同じことだ。それに作戦は全て計画通りじゃないか。この戦争はこの私の小さな手の平から出た事など一度たりともないのだ」